

自分の書いたゲーム転  
生小説の主人公に成り  
代わってしまった主人  
公の話

ばgood(バグ最かわ)

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

自分が書いたゲーム転生者の小説の主人公に転生した主人公。

しかし、その小説は既存のゲーム転生ものの逆張り小説であり、どうあがいても成り上がれないように出来ていた。

自分の命を守るために主人公は頭を働かせ、現状を打開すべく奮闘する。

「くっそ。こんなことなら、バリバリの成り上がり小説にすれば良かった。」

安全かつ、確実に強くなれる方法とか設定すればよかった」

そう思ってももう遅い、頑張れ主人公、自分が蒔いた種、もとい作った設定に殺されないように抗うんだ!!

※小説家になろう様にも投稿しています

# 目次

俺たちの戦いの始まり!!

えっ?ここはどこ?わたしはだあれ?

1

我が名はピーマ……………いや、魔導師

Pだああああああ……………

戦えて?……………いやあ、それ

はちよつと……………

あれ……………俺ってポツチなの

では?……………

俺の原点……………65

ヒロインがないって?遅くなってすま

ない……………

ヒロインと接点?いやなんで?

83

すれ違ってるって分かっているとも言え

ないことつてあるよね……………101

命がけの戦いに安定なんて無かったの

かもしれない……………114

反省も後悔も大切だけど、そういつた

ことが許されない状況もある……………132

モブはモブなりに頑張ってるんです

……………147

ゴールが近くなると難易度上がるのは

主人公だけで良くない?……………166

癒羽希カルミアは補助魔法だけでいい

かもしれない……。―― 181

それでも私は信じたい。―― 191

見つけ次第、地の底まで追っかけて○す

プロローグ……。……どっちかと言うと

エピローグ？。―― 215

真道君には女難の相が出ているのかも

しれない……。―― 232

いくらなんでも圧倒的過ぎない？（修

正）―― 245

あれ？俺の出番は？。―― 262

久しぶり!! 今日も出番が少ないけど主

人公です。―― 276

幕間 私はみんなを守りたい。―― 294

幕間 俺は我が子を守りたい。――



俺たちの戦いの始まり!!

えっ?ここはどこ?わたしはだあれ?

むにやむにや。

むにやむにやむにや。

「起きなさい」

まって、まだ眠い。

もうちよつと、後五分間だけ……………

「ぼんちゃん。起きなさい。ぼんちゃん」

誰がぼんじゃ、ワイにはママンがくれた、くれた……………なんて名前だっけ?

ヤバイ自分の名前全然思い出せんわ。

マジ、なんて名前だったっけ?

「ぼんちゃん、起きなさい。ぼんちゃん」

えらい、ぼんちゃん、ぼんちゃんうるさい。

ワイは地獄の業火のような怒りをばうあーに変え、思いつき布団から起き上がる。

そこには腰に手を当てて般若のように眉を上げたおばちゃんが立っていた。

いや、誰だよあんた。

ま、よく分からんおばちゃんがおつて、ここがどこかも分からんが、別にいつか。  
つか、腹減ったわ。

「おばちゃん。腹減った。」

「まあ、昔はおばちゃんなんて言う子じゃ無かったのに。

うううう。

何時からこんな子になってしまったの？」

「？良くわかんただけど。

飯くれるの。くれないのどっちなの？」

「うううう。下に用意してあるから、早く食べてらっしゃい」

うわーい、やったー、飯だ。



「それにしても何だか頭がふわふわするなあ。

夢か?夢か。

じやなきやおかしいもんな。

知らん場所について、知らんおばちゃんが飯くれるなんて。

それよりも、飯、飯。

トンタツタトンタツ階段を華麗に下りてゆく。

お、あつたあつた飯だあ。

「いったただつきまーす。」

うまいうまい。

んんん。飯に夢中で気付かなかったが、何だ、テレビがついているぞ。

俺はテレビをジツと見る。

魔法、魔物、ファンタジーな感じなのか?

「もう、もう少し落ち着きを持ったらどうなの?

ぼんちゃんももう高校生なんだから」

おばちゃんはそう言いながら、鞆と制服を持ってくる。

制服の裏地には名前が刺繍されていた。

おとながほんた  
—音長盆多

音長盆多、その名前を俺は知っている。

ちらりとテレビを見る。

そこには手のひらサイズの十字型の金属に関するCMが流れている。

俺はあれを知っている。

極めつけは、制服の胸ポケットに入っている学生証に書かれた国立防人魔法学校。

急速に頭がクリアになっていくのを感じる。

「ぼんちゃん。ささ、着てみて、着てみて。」

「あ、ああ、分かったよ。母（かあ）さん」

俺はそれを母親であるだろう人から受け取ると同時とある結論を出す。

ここに、俺が書いた小説の世界だわ。

☆☆☆

俺が昔に書いた小説。

タイトルは「ゲーム知識で無双できるかと思っただけで無理でした」

奇をてらってみようとした結果、エタツて書くのを辞めた小説だ。

内容としてはタイトル通り、ゲーム世界への転生であり、主人公はそのゲームのモブ

に転生する。

名前は音長盆多。おとながほんた

夫(おと)と凡(ほん)という意味を含ませた普通の名前。

ゲーム世界に転生を果たしたと知った主人公は何とか自分の力と知識で成り上がるうとするも、現実とゲームの違い、そして、主人公とは環境や境遇が違い全然上手くない。

しかしそれでも諦めることなく頑張るとい話だ。

まあ、言ってしまうえば、従来のゲーム転生小説の逆張りものだ。

制服に袖を通してながら、俺は思いつきり息を吐く。

「くっそ。こんなことなら、バリバリの成り上がり小説にすれば良かった。

安全かつ、確実に強くなれる方法とか設定すればよかった」

自分で作っておいてなんだがこの小説の世界観は結構シビアだ。

命を懸けることにはなるが、飛躍的なパワーアップが期待できる隠しステージ何てないし、危険を冒せば、有用なアイテムをゲットできる、なんてことは無い。

命を懸けて得られるものは「戦いが無いって幸せなことだったんだ……。」という実感だけである。

ばうあーあつぷう?地道に努力しろ。

あいてむう?店で買え。

基本的にこの二つで成り立っている世界でどうやって生きて行けばいいんだろうか？

ただ、今は出来ることをやらないと……。

俺は取り敢えず、この思考を脇に置き、母さん（仮）に制服姿を見せた。

母さん（仮）は涙を流しながら喜んでくれた。

その涙に俺の海よりも広い罪悪感が刺激され、少し気まづくなった。

☆☆☆

俺はその後、飯を食べたり、歯磨きを終え、学校に向かった。

学校に向かいながらも俺の懸念は更に増えていた。

一つはここが夢か現実か、という問題だ。

夢ならばいい。

せいぜい起きるまでこの世界を楽しませてもらうだけだ。

問題は現実の場合だ。

この小説がエタって書くのを辞めたという話を先ほどしたが、それはつまり、話の内容を最後まで知らないということでもある。

そう、俺にもこれから何が起こるのか皆目見当もつかない。

勿論、設定というはある程度決めている。

例えば、この世界は全部で六つの世界、天界、人間界、戦人界、獣人界、小人界、鬼人界に分けられている。

そして、この六つの世界は余り干渉しあうことがなく、独自の発展をしていたのだが、ある時に魔物と言われる別の世界の人間に瓜二つの容姿の怪物が姿を現したのだ。

天界では人間、戦人、獣人、小人、鬼人。

人間界では天使、戦人、獣人、小人、鬼人。

戦人界では天使、人間、獣人、小人、鬼人。

小人界では天使、人間、戦人、獣人、鬼人。

鬼人界では天使、人間、戦人、獣人、小人。

という風に、ただ、魔物には通常の生物とは違う特徴がある。

それは体をどす黒い瘴気のようなものが覆っており、決して喋らず、食事や睡眠を必要とせず、何らかの方法で同族と意思疎通を図るのだ。

しかも、とても賢く、罠に嵌められて殺される防人が後を絶たない。

そのため、魔法適性のあるものは若いうちから親元から離れ、訓練を積む。

国の命令であるため、親は泣く泣く子を見送るしかない。

母さん（仮）のように……………。

因みに魔法と言っても何も無い所から炎とか雷とかを出せる訳では無い。

勿論、天使、戦人、小人なら出来るだろうが、人には無理だ。

そのため、人間の場合はマジックチップという十字型の金属を使って魔法を扱う。

扱うと言ってもこのマジックチップには既に魔法が込めてあり、担い手はマジックチップを起動する魔力と解放された魔法を制御出来るだけの魔法制御能力があればいいのだ。

そんなことを考えながら、歩いていると丁度駅が見えてきた。

というか、歩きながら町を見ていて思ったが、夢にしてはリアルすぎる。

駅に関しても、ファンタジーと現代が混ざり合ってなんかいい感じだし……………。

夢なら良かったが全然そんな感じはしない。

俺はそう思いながらも、交通系ICカードを出し、駅の中に入る。

その後は特に語ることもなく電車に乗った。

電車の中には俺と同じ制服の人間がちらほらという。

泣く泣く親元から離れて行った子供達だ。

可愛そうに……………まあ、大元の原因はこの小説を書いた俺にあるのかもしれないが……………。

そこは……………まあ、許して欲しい。

俺も今は君たちと同じ境遇な訳だしさ。

電車で揺られていると、どんどん俺と同じ制服の子供たちが増えていく。というか、よくよく考えれば、防人魔法学校の服装って初めて見るわ。

俺、趣味で小説は書いてたけど、絵は描けなかったし。

何か……そう考えれば途端に感慨深くなるな。

そう思いながら、制服姿の学生達をジッと観察していると電車の中にいた生徒たちが続々と電車を降りていく。

そっか、ここが防人魔法学校の最寄りの駅になるのか、初めて知ったわ。

割とここら辺適当に書いてたからなあ。

俺はそう思いながら、他の生徒たちに続く。

ここら辺に関しては特に何のイベントもないって知ってるから気楽だわあ。

課題をすべて終えた休日くらい気楽だわ。

俺がそう思いながら歩いていると、後ろから歩いてきた生徒と肩がぶつかる。

「おっと」

「あつ、わり」

ぶつかった生徒は赤髪、青目で耳にピアスをしていた。

………恐らくは、ゲームの方の主人公、という設定の真道才君しんどうさいだろう。

そっか、イベントとかなくても普通にすれ違ったりはするよね。

だって、同じ学校の生徒だもん。

因みに学校だけでなく学科も同じだったりする。

俺らの学科は魔法剣士科。

その名の通り剣と魔法で戦うクラスだ。

☆☆☆

学校についてからは、校舎の綺麗さや、敷地の広さに感動し、学園長たちの話を話半分に聞き、そして、現在俺たちは教室でホームルームを行っていた。

「はい、次、音長君。自己紹介どうぞ」

「音長盆多。好きなものはアニメや漫画です。これから三年間よろしくお願いします。」

決まった。

いや、普通に無難な挨拶だけど、これでいいのだ。

無難に挨拶しておけば無難に友達が出来るから。

まあ、その友達が明日も生きているかは分からないんだけど。

そんなことを考えながらも周りを見渡す。

このクラスのメインキャラは二人。

一人はさつきも挙げた、ゲームの主人公という設定の真道才。

もう一人はメインヒロイン、という設定の剣<sup>けん</sup><sub>なまき</sub>麗<sup>れい</sup>。



彼らはそれぞれ、

「俺の名前は。」

取り敢えず、大切な奴らを守る防人になるのが目標だ。よろしくな」

「けんきょい剣風麗。最強の防人になるためにここで学べるものを学んでいくつもりです。よろしく」

と、まあ、中々に強キャラ感のある挨拶をしていた。

そんなんじや、友達が寄り付かないぞ!

と言いたいところだが、二人とも見目が良いからきつと友達には困らないんだろう。

良いな。

ワイもイケメン設定にしておけばよかった。

因みに、他のヒロイン、という設定の少女たちはそれぞれ、攻撃魔法科に一人、防衛魔法科に一人、回復魔法科に一人ずつ、後一応他の世界に一人ずついる設定だ。

まあ、他の世界のヒロインたちは設定だけしかないから名前も容姿も知らないんだけど。

あつ、話は変わるけど、この三つの魔法学科は魔法剣士科と違い、専用のワンドというものを使って戦う。

このワンドは現状三つまでしかチップを入れられない剣と違い、九つまでチップを入

れることが可能で、更に得意系統の魔法の強化率は剣を上回るのだ。

勿論、剣にも利点はある。

例えば、直接攻撃を仕掛けた際に相手の魔力を吸収する機能があり、これを利用し、初めから内蔵されている強化魔法のマジックチップを半永久的に使えるという点だ。

これにより、魔法剣士は魔物との白兵戦を可能とし、魔物たちから注意を引きながら戦うことが出来ている。

まあ、それでも死亡率は一番高い訳だけど。

「それでは、今日はここまでとする。魔剣の授与は後日行うのでお前たちもそれまでに戦う覚悟を決めておけ!!」

とのことで、ぼおっと考え事してたらいつの間にかホームルーム終わったわ。

俺は学生鞆を手を持ちながら、他の生徒の後について行く。

いやあ、自分の書いた小説の寮がどんな形をしているのかとかめっちゃ気になるわ。  
。

ドキドキワクワク。

「おおお」

悪くない。悪くないぞ。

いや、むしろ良い。

想像とは違うけど。

俺の想像だと寮自体は結構クラシックな感じを想像していた。

何て言うか雅な寮?イタリヤとかでヨーロッパ圏でありそうな感じ。

だけど、実際にはモダンな感じで現代風、もしくは近代に片足突っ込んでます感が

あった。うむ、作者的には少し思う所がないがこれはこれで大変結構。

俺は皆についていき、自分のネームプレートがついている部屋に入る。

どうやら寮は一人部屋らしく、他の生徒の名前は載っていないかった。

こ、高校で一人部屋って本当に良いんですか?

と、思わなくてもないが、魔法適性を持つ人間がそもそも少ないうえ、訓練途中にもバンバン人が減っていくから部屋自体は結構開いているのかもしれない。

こちとら命かけてるしね。

このくらいは好待遇でも許されるだろう。

俺は荷物を置いた後、ベットに座る。

いや、この後どうしようと思つて。

普通に学生生活をしていたら、全然死ぬくらいにはシビアだ。

というか、一番初めのイベントでうっかり死んでもおかしくない。

とはいえ、コソ練して圧倒的な強さを手に入れられるかと言えばNOだ。

そう言う風に作つたからな、俺が。

しかし、どうすれば良いのか……………。

悩んだ、悩みまくつた。

悩みまくつた結果、閃いた。

あれだ、師匠とか、物語のキーを握る存在的な感じで、主人公を導こう。

それで主人公に世界最強になつてもらつて、救つて貰えばいいんだ。

いや、そうじゃん。

元々、俺の小説のコンセプトは脇役転生して最強になろうとしたけど、主人公とは境遇も環境も違うから最強にはなれないよねっていうだけで、主人公なら脇役（小説の主人公）が考えた方法で最強になれるじゃん。

えっ、現実になつて勝手も変わってるんじゃないかって？

知らん知らん。

主人公補正で何とかして貰うしかない。

結局主人公が世界救つても自分おれが生きてなきや意味ないし、真道君には悪いが、背負わなくていいリスクを背負ってもらおう。

よし、方針も決まったし、どうやって、アプローチをかけるかだな。

我が名はピーマ……………いや、魔導師P  
だああああああ

☆☆☆

その日、俺、真道才は不思議な男と出会った。

「我が名は魔導師P。このピーマンの被り物とプロデューサーのPから取った素晴らしき名前を持つものだ。

お前に大切なものを守る力を与えるために現れた。」

その男はピーマンの被り物をして、俺に大切なものを守る力を与えると、胡散臭い事を言ってきた。

正直、こんな怪しい奴、無視しても良かったのだが、その後と言った言葉が俺をこの場に押し留めた。

「さあ、選べ、人間と戦人の混血よ」

それは誰にも言っていなかった俺の秘密。

最近少しだけ仲良くなった剣風にも、地元の友人たちにも言ったことのない俺の最大の秘密。

知られれば、後ろ暗い研究機関に捕まってもおかしくない。

だから、知っているのは俺と親父だけの筈……………。

それを何でこいつは知っているんだ!!

☆☆☆

決まった。

俺は階段の上から真道才に手を差し伸べるポーズをとる。

恐らく、日も良い感じに落ちてきて、逆光もこの演出の一助になってくれることだろう。

クツクツク。

なんかピーマンの被り物を見つけたときにピンと来たんだよな。

こういう、果物被ると不思議と強キャラ感とか不気味な感じも出るし、身バレ防  
止も出来て一石二鳥だ。

いやあ、きつと、真道は今頃、内心で「こいつっ!?!何者だ?」ってなってるだろうな。

主人公(偽)の為に用意してあげたイベントなんだ。

存分に楽しんでくれ!

「……………何が目的だ。」

うおおおお、めっちゃ考え込んで警戒心全開で話しかけられてしまった。

主人公にこんな対応させるなんて完全に主要キャラですわ。

まあ、真の主人公は私なんですがね？

「ふむ、先ほどの話を聞いていなかったのか？」

私は魔導師P、先ほども言ったが「そうじゃない！」ふむ、では何が聞きたいんだ？」「何で、俺のことを知っている。どうして接触してきた。別にこんな怪しい接触の仕方をしなくても良かっただろう？

……………だつて、お前……………

……………制服着てんじゃん。

「この学園の生徒だろ？」

……………確かにな。普通に生徒として近づいて信頼を勝ち取ってから、実はくつて感じで事情を話せばいいよな。

うん、それはそうだ。

そうだわ、普通に。

お前、天才か？



「何か言ったらどうなんだっ!」

ええええ。そんな剣幕で言い募られても……………。

想定してなかったただけだし、えええつと、えええつと。

何かあるかなあ、理由。

考えろ俺、何か、何か、ある筈だ。この場を切り抜ける突破口が!!

「それでは遅すぎる。遅すぎるんだ……………」

「!? どういうことだ?」

何か、何か言わなきゃと思って口を開いたら、切り抜けられたわ。

あ、因みに嘘じゃないです。マジで、一番初めのイベントは割と目前まで来てます。

いやあ、人間極限状態だと限界を超えるっていうけどマジだったんだね。

何とかかなりそうで良かったあ

「……………近々、魔物の群れがこの学校襲う。それまでにお前には強くなってもらおう必要があるんだ。」

「な、なに?」

ここで、演出の一環として目を伏せる。

あつ、そう言えば被り物してるから目を伏せても気づいてもらえないわ。

うっかり、うっかり。

「どういふことだよ、それ。それで麗や愛華（まなか）、千弦（ちづる）たちが、危険に遭うのか？」

あつ、メインヒロインたちは大丈夫です。

この一度目の襲撃は只の様子見みたいな所もんだし、そんな強くないから彼女たちはむしろ大活躍して学校の注目を集めるはずだ。

まあ、真道君にとって彼女たちの存在が大きなウエートを占めているのなら言わない方が良いでしょう。

「それは………言わないでおいた方が良いでしょうな。」  
俺にとつてね。

だって言ったら緊張感とか無くなるかもしれないだろ？

困るなあそれは。

あつ、でも最終的には君のためでもあるからね？

ほら、物語が進めば敵も強くなるかもだしね。そうなったら君の大好きなヒロインちゃんたちも命の危機に瀕するかもしれないじゃないか？

ま、そんな先のことは俺も知らないんだけどね。

「………わかった。お前の手を取ってやる。ただし！少しでも怪しいと思ったら斬る」

俺の言葉に悩んでいた真道君は決心をしたかのように俺の目を見てくる。

……………それはそれとして、今は怪しくないってことでOK？

いや、今茶化すのはやめよう。

大切な局面だしね。

「ああ、それでいい。私としても君がこの世界を救ってくれるのであれば他のことに口出しはしない」

と言いつつ、俺の命に関わることにはバリバリ口を出すつもりだから、そこんトコロしく。

「ふん、何を考えてやがるんだか。……………それで、俺は何をすればいい？」

「まず明日、キミは魔剣を配布される訳だが、その際に搭載する外付けチップは《  
と《 》だ。いいな？」

「あ、ああ、でもそれで大丈夫なのか？」

「俺を信じるんだろ？」

「分かったよ。信じるとは、言ってるねえけどな」

「俺からすれば同じようなものだ」

ふっ、話もついたら、スタイリッシュに立ち去るか。

……………いや、スタイリッシュに立ち去るってどうやるんだよ。

意味わかんねえよ。

一応窓ついているし、飛び降りる？

いや、足折れるだろ。ねん挫で済むかもしれないけど。

もつところ、一瞬目を離したすきに居なくなるとかしたいんだけど……………。

いや、全然目え離さないなあいつ。

どうしよう。歩いて帰るのはちよつとダサイよな……………。

「おい、才。そんなところで何してるんだ。」

よつしやああああああ。今だああああああ。

俺はスツと階段の折り返しの所で四つん這いになる。

完全に隠れた。恐らくあちらからは見えていないだろう。

見えてたら超ダサイ。

俺はその体勢を維持したままカサカサと移動を開始する。

「えっ、麗？ああ、変な奴と話してて、つていない」

よしっ。

これはスタイリッシュと言っても差し支え無いのでは？

完全にかっこいい立ち去り方だったわ。

クツクツク。

計算通り。

………因みにこの体勢で階段を上っている人って客観的に見てどんな印象を持たれるのかな？

☆☆☆

いやあ、にしても上手くいきましたなあ。旦那。  
って旦那なんてどこにもいないやないかあゝい。

でも軌道には乗ってきているな。

悪くない。悪くない。

悪くないと言えば、この親子丼も悪くない。

この世界に来る前の高校じゃあ、食堂なんて言ったことなかったし、大学も食堂なかったからめっちゃ新鮮だ。

つうか、もう一度高校生活を始められると考えれば割と悪くない？

いや、命を懸けなければいけない訳だから普通に悪いわ。

危うく騙されるところだった。

自分に。

にしても、俺は勿論ながら他の生徒も死ぬかもしれないんだよなあ。

例えば目の前にいる俺のフレンドとかも。

「ん、どうかしたの？」

音長君」

「いいや、ただ、三年間一緒に過ごせばいいなって思ってたさ」「ちよつ、不吉なこと言わないでよ。」

まあ、この学校は単位とかが理由で退学とかは無いからな。

退学になる場合は相当ヤバい問題を起こしたか、魔物との戦いで命を落としたかの二通りしかない。

どっちだとしても縁起が悪いことこの上ないな。

ま、それはそれとして、今はこのフレンドとの食事を楽しむか。

別に冗談で言った訳じゃないしな。

いや、出会ったばかりだけど彼は良い奴だし、問題を起こすようには見えないから、前者が理由でいなくなることは無いだろうけど。

魔物と遭遇してバイバイすることはあり得るからな普通に。

そうなつてくると、少なくとも大切な友達よりも、友達百人作つた方が良いのかな。

……………いや、友達百人作つても、腹の内は分からないし、恨みを買ってどきどきに紛れて『ぐざり』とかもあり得るから、信頼できる友達数人の方が良いな普通に。

「音長君、うんうん頷いてどうしたの?」

「いや、キミと友達になれて良かったなって思ってたんだ。」

「えっ?どうしたの急に」

急にとは失礼だな。

しかも、何だいその訝しむ顔は?

俺は常に俺の友人になってくれた子には感謝を述べているからな。

ほんとだぞ?

むしろくしやしてきたぜ。

こうなったら、ご飯をかき込んで、部屋に帰るしかない。

むしろむしろ、あつ、ここ、笑う所だから

「うわあ、今度はご飯かき込みだしよ。しかも、漫画でしか見たことのないかきこみ方だ

し……どうしたの?ちよつと、怖いよ?

それとも、君はそう言う人なのかな?僕は今、君と友人になったことを後悔してるよ」

むつきー。

許せん。許せんぞおおお。

そんなことを言つて許されるのは美少女だけ!!

フツメンの君なんてなあ。うっかり打ち首にされたつておかしくないからな?

ごつくん。

「ご馳走様。先に帰ってるよ。」

「うん、お大事にね」

いや、元気だからな!!

それはそれとして、体は大事にするよ。

ありがとう。

因みにこの後普通に仲良く風呂に入った。大風呂だったからね。それで分かったことなんだけど、彼はどうやら素で毒舌らしい。

これから、仲良くやっていけるか不安になってきたぜ。

☆☆☆

次の日、なんともうはや魔剣をくれるらしい。

パチパチパチ。

知ってたけどね。

普通ならちよつと早いかなって思うかもしれないけど……まあ、それも当然なのかもしれない。

だって、一刻も早く実践に遅れる防人を育てないといけない訳だからね。

そう考えれば、速いに越したことは無い。

むしろ、当日に渡されなかっただけ、温情なのかもしれない。



あ、それとマジックチップの配布は後日になるよ。

どのマジックチップが欲しいかを記入用紙に書いて提出しろって言われた。

俺は普通に両方防御系だ。

先生は防御と攻撃両方持つてる方が良いとか何とか言ってたけど、そんなことをすればリスクを増やすだけ。

戦闘は他の人間に任せて、守りに徹した方が良い。

特に、俺の場合はマジックチップが届く日、つまり、というか何というか、この日に襲撃を受ける訳だけど、バリバリ真道君に張り付いて守ってもらうつもりだから、防御特化で良いのだ。

あつ、一応言っておくと全然タンクとかやる気ないよ。

流れ弾防ぐので精一杯だろうしね。

本当頑張ってくれよ、真道君！

君だけが頼りだ。

あつ、因みに魔剣の形状は刀だ。

これは個人的にかっこいいからって言うのもあるけど、物語的には魔剣は刀身から魔力を吸収し、肉体強化のマジックチップを発動するという設定だから、自ずと自前の魔力で肉体強化を発動する際も同じ手順を取る必要がある。

そうなった際に両刃だと格好がつかないし危ないから、片刃の剣になった、てな感じ。つまり、刀の峰の部分に触れて肉体強化を出来るようにしたってことだね。

どう？

カツコいいし、中々いいアイデアだと思わない？

「おいつ！音長！何サボっている。貴様だけ追加で素振り百回だ」

ひええええ。素振りサボってるのばれて、更に追加された。

最悪だ。

因みに剣風さんと真道君は涼しい顔で素振りをこなしていた。

流石は代々魔剣士の家系である剣風さんと戦人とのハーフの真道君だ。

……それに、俺の友達でかなりの毒舌家な毒ノ森君どくのもりも滅茶苦茶素振り頑張ってる。

どうせ、殆ど意味なんてないのに……。

でもそれって、きっと生きるのに一生懸命ってことなんだろうな。

……俺も死にたくないって思うなら、多少はガンバラなきゃだな。

どれだけ努力しても強キャラには勝てないだろうけど、この努力が生きるか死ぬかを分ける可能性は十分にあるんだもんな。

よしっ、ちよつと頑張ってみるか!!

あつ、それでも真道君が希望ってことは変わらないから、修練を怠るんじゃないぞ。

ま、今のところはそんなことにはならないか。

滅茶苦茶頑張ってるし。

ただ、ヒロインとイチヤコラするばかりで修練を怠つたら、「エツ」な場面の時にピーマンの被り物して出てきてやる。

☆☆☆

魔剣を使つての素振りの時間、音長という生徒が教師である私からは見えづらい場所でサボっていた。

こういう生徒は例年いる。

国を守る立場であるにも関わらず、学生気分が抜けていない生徒というやつだ。

だから、私はその生徒に注意を促し、ついでに罰則を与える。

すると、音長という生徒は考えを改めたかのように真剣に素振りに取り組む。

ようやく、自分がこの国と、そして魔力を持たない市民を守る希望であると理解したらしい。

にしても、学生気分の抜けていない生徒を一声で改心させるとは私の教師としての腕前には恐れ入るな。

まったく！

戦えつて?.....いやあ、それはちよつと

☆☆☆

素振りが無事終わった。

素振りの途中、何故かとても不名誉な勘違いをされた気がしたけど、気のせいだろう。

読心術とかはマスターしてないしね。

仮にあつたら、有利に進めるのになあ。

いや、日常生活を送るうえでは不便極まりないし、いらないか。

ていうか、めっちゃ疲れたわ。

いや、疲れたという割には心の中ではこの通り、ぴんぴんしてる感出てるけど、もう

ぜえはあが止まりませんわ。

これだけ、頑張つても強敵が現れれば、殆ど描写されることなく散つていくモブなん

だろうなつて思うと悲しくて仕方ないね。

取り敢えず、この後はシャワールームでシャワーを浴びれるっていうのが唯一の救い

だよな。

このままじゃ風邪引いちゃうところだったよ。

まったく。

うおおおお

シャワールーム、ボディソープとシャンプー使い放題なんかい。

後、シャワールームで貰った体洗うタオル？

めつちや泡立つですけど。しかも、いつの間にか制服も用意されてた。

これ、新品ですよ。良いんですか？

話変わるけど冬は何か暖房？

ちよつと違うみたいだけど、部屋を初めから暖かく保つ機能があるらしい。

すげえええ。

後、体操着とかの洗濯物は専用の棚に置いておけば向こうで洗ってくれるんだって、

いや、凄すぎない？

更に更に、洗濯物は個人で分けて洗ってくれるんだってさ。

良いね。

食堂も無料だし、任務に出るようになれば給料も出るらしいし、最高だね。

いや、命かけなきやいけないから最低だわ、やっぱ。

設備自体は充実してるし、学費無料だけど、根本的に俺たちは学ぶ者ではないんだろ

うなあって感じがする。

だからこそその好待遇。

ふう。シャワーも浴び終わってすつきりしたし、コーヒー牛乳でも飲むか……………  
え、そのコーヒー牛乳はって？

いや、無料ですけどなにか？

☆☆☆

あれから、まあ色々あった。

えっ、何か急に話飛んでないって？

いや、うん、色々あったんだけどさ、聞く？

俺の防人訓練の授業を如何に真面目に受けていたかとか、毒ノ森君と他愛のない話をしたとか。

正直さ、色々はあったんだよ。うん、色々は、みんなもさ、毎日いろいろあるじゃん。ただ、その中で話すべきことってどれくらいある？

……………そんなないと思うんだよ。

そんな感じ。

普通に授業きつくないとか、授業どんどん訓練の時間増えて殆ど訓練場にいるよね、

とかそんな感じ。

いや、ほんとどうなってるのこの学校。

全く、座学ないやん。

走り込みと、素振りと打ち込みと、魔力操作と模擬戦ばつかだよ！ほんと。

語る事なんてないよ。マジで、真道君と剣風さんの無双タイムだよ。

序盤の方は俺たちモブにも、「お前たちは立派な防人になれる」って言っていた先生も最近ほとんど真道君と剣風さんにしか話しかけてないよ。

あ、一応言つて置くけど、それでモチベーションが下がって適当に授業を受けている、なんてことは無いよ。

俺も毒ノ森君も。

結局は巡り巡って、自分のためだからね。本当に。

冗談抜きで命かかっているからさ。

流石に、学生気分であらたらとは出来ないよ。

それでも、あっさり死ぬかもしれないんだけどね。

むしろ、たらたらやっていた人間がひよっこり生きてるなんてこともあるかもしれない。  
い。

その位には俺らは無力だ。

無手の人間が身体を鍛えた結果、熊に勝てるかっていうのに似てるよね。

実際、俺と毒ノ森君は頑張っているけど成績自体は中の上くらい。

因みに、一、二位は三位以降を引き離してダントツの成績を残している。

言わなくてもわかるかもしれないけど、真道君と剣凧さんの二人だ。

この二人には三位の左藤君は手も足も出ずにすぐ負けている。

一応言っておくと、左藤君が弱い訳じゃない。

マジで隔絶してるんだ、あの二人。

先生も左藤君に今年じゃなかったら主席も夢じゃなかったって言ってたしね。

だから、まあ、話すことは無い！

基本的に真道君と剣凧さんと関わることもないし、学科の違う他のヒロインは言わずもがな。

魔導師Pの出番も今の所ない！

無いんだけど、流石にそろそろ魔導師Pも真道君をプロデュースしなくちゃいけないらしい。

「お前たち！：ようやくお前たちのマジックチップが届いたぞ！

他の学科よりは遅れてしまったため、心配していた者もいただろうが、安心しろ、そ



れは例年通りだ。

なんせ我らが魔劍士科は唯一、外付けのマジックチップが無くても戦えるからな」

一応肉体強化のマジックチップは使っているのに、物は言いようだなあ。

確かに、他の科は外付けのマジックチップがないと戦えないけどさ。

というか、ワンドには外付けのマジックチップしかないから当然なんだけどね。

余談だけど、そう言った事情もあり、他の科はワンドと同時にマジックチップが配布される、つていう設定になっている。

まあ、今はあんまり関係ないけどさ。

へドントドント

へブーブー、オシラセシマス。オシラセシマス。ゲンザイ。ナニモノカガ侵入中。ナニモノカガガガガ。テイセイ。テイセイ。シンニユウシャ判明。マモノ。雑兵級。種別、偽天使。カズ、700

おottoと皆の顔が真っ青になっちゃったよ。

因みに、解説しておくとして偽天使っていうのは天使型の魔物のこと、これが鬼人型なら偽鬼人、戦人型なら偽戦人ってなる。それ以外の種族の姿をしてても全部同じ、あくまでも本来の種族とは一切関係ないよって意味でこの名前が使われてるんだ。

sonでもって雑兵級っていうのは一番弱い魔物のこと。

一つ上の学年なら他の学科の人間とちゃんとパーティを組むって言う前提で対処可能。

一体ならね。

700は………無理！

だって、大体この学校の生徒の数と同じくらいいるからね。

一人一体ずつじゃないと、全員無事に生き残れないよね。

ていうか、まだまだ、絶望するには早いしなあ。

一応、教師もいるけど、教師はその場の指揮で手一杯になるし、ここ、結構被害出るんだよなあ。

「いいかつ！私の指示に従い。全員、学生ホールに移動する。いいな。」

そう言う生徒は皆ほとんどホールに向かって移動する。

因みにホールはこの学校の最後の砦であり、学校にある様々なギミックを作動することが可能になっている。

まあ、時間稼ぎなんですけどね。

それでも、現状は国の防人を待つしかない状況。

それしか希望がないから仕方ないんだ。

みんなホールでも元気だな。

えっ、お前は向かわないのかって？

それは勿論、私は主人公について行かなければいけないのでね。

俺は皆から少し離れた場所で懐に隠していた。ピーマンの被り物を被る。

よゝし、ではいくぞ。

多分、主人公は他の生徒たちとは別行動をとる筈。

彼、戦人で耳が良いから聞こえてしまったんだよね。

悲鳴を上げる女の子の声。

「つくそ、確かこつちから。」

「どうした？迷子か」

ほくらねっ。知ってました。

作者です。

「お前は.....魔導師P」

「ふん、お前の考えていることはわかる。一年の防御魔法科の近くにある女子トイレからだ。」

「！そうか、ありがとう。」

「別にいい。それより私もついて行こう。まだ、何かありそうだな。」  
「わかった。助かる」

そんじゃあ、行きますか。

一応、まだここら辺には偽天使は来てないから、スムーズに進める。

これが、もう少し道に迷われると偽天使が湧いて来るって設定だったから良かったね。

俺がいて。

あつ、でも偽天使が学校に湧いてるのも元を正せば作者である俺のせいだった。

ゴメンね。

まあ、大丈夫。全部何とかするよ。

真道君が。

てなわけで、俺の助言のお陰で一階の防御魔法科に一番近い女子トイレの前まで敵と遭遇することなく来ることが出来た。

ただ、なんと、なんと、そこには三体の偽天使に囲まれる温実愛華<sup>つつまいあな</sup>。防御魔法科に所属する真道君のヒロインがそこにいたのだった。

なんだってー!!

いやあ、びっくり、びっくり。

「な、なんで、愛華がっ!!」

おお、君もびっくりだったかい？

真道君。

「今は、そんなことを言っている場合じゃないだろう。」

俺がそう言うと言道君は弾かれたように魔剣にセットしている《スパークバインド》を発動する。

名前の通り、雷属性の拘束魔法だ。

これにより、温実<sup>つづみ</sup>さんを狙っていた偽天使たちは動きを止める。

そこを刀身から魔力を通し、自らの体に肉体強化を施した真道君が一刀両断。ヒュー。かっこいいい。

いやあ、偉いぞ。ちやあんど、《スパークバインド》を申請して。

この魔法は初期の拘束系の魔法の中では断トツの拘束力を誇る。

というか、雷系は基本強いという設定。

ただ、吸収持ちもいるから、そう言う相手には逆効果なんだけど.....。

まあ、今回の敵には耐性持ちはいないから大丈夫。

暴れまわれ。

俺らを相手に無双した経験を活かすんだろ。

「よかった。怪我はないか!!愛華。」

「う、うん。大丈夫。才が来てくれたから」

うわあ。君ら、近くにピーマンの被り物をした不審人物がいてもイチヤコラできるタイプなんだね。

俺には理解出来ないよ。

ていうか、それ以前にここ、戦場!

敵はまだまだ来るんだYO

「……感動の再開も良いが、今は気を引き締めろ。次が来るぞ」

「えっ?あ……あの、あなたは……」

「愛華、一応俺のツレ。……細かいことは後で説明するよ」

どうも、ヒロイン差し置いて、ツレの座を頂いた魔導師Pです。

今の気持ち……ですか?

ええ、ええ、まつ、あたしとかれなら、当然かなって♡

「な、なんだ?!急に寒気が!!敵の攻撃か?」

あつ、その、すいません。

一応、味方側のつもりです。はい。

「落ち着け、目に付く範囲に敵はいない。一度深呼吸するんだ。」

「そ、そうだな。すまん助かる」

.....良いんだよ。

というか、こつちこそ、なんかすまん。

ま、気を取り直そう。

俺がそう思っていると倒した魔物から溢れていた瘴気が真道君に向かって集約されていく。

「オツ!!オツ!!」

「う、うああああああああああ」

「落ち着け、レベルアップだ」

二人ともびっくりして、でっかいリアクションしてるけど、これ、ただのレベルアップなんよ。

レベルアップまたの名を抵抗力上昇。

倒された魔物は基本的に倒した相手に取り憑こうとする傾向がある。

だが、逆にその瘴気を浄化し、吸収することで人は魔物の魔力を取り込むことが出来る。

因みに抵抗できなくても大丈夫。

死ぬだけだから、だからこそ、魔力を持たない人間は魔物との戦いに参加できず、魔力を持っていても、体を鍛えていない、もしくは鍛えていても適正レベルに到達していない人間はレベルアップ時に死ぬことになる。

防人が急速に強くなることを封じているのだ。

誰がそんなことをつて？

それは勿論私です。

いや、こんなことになるつて知ってたら、もつと強くなりやすい作りにしてたけどね。

あつ、俺らがそんな風にワイワイしてたら、追加の偽天使が現れた。

数は十七体。

ワイワイしてる暇はないよ。皆、気を引き締めていこう。

「クツソ、偽天使が十七体もいるのかよ。魔導師P手伝つてくれ」

「いや？」

「はっ？」

「……………」

……………えっ？、いや、え？

テツダウ、テツダウ。手伝う？

私があなたを？



え.....無理です。

普通に。

死んじやうよ、ど、どうしよう。

なのに、なのに、どうして真道君は「いや、お前、手貸せよ」って顔をしてるの。  
温実さんも「なんで、手伝わんの」って顔してるし

「今は、一刻を争うんだ。つべこべ言わず手伝え!!」

ド正論だ。ド正論が飛んできた。

ですよ。そうですね。

この流れ、普通に手伝う場面ですよ。

しかも、こんだけ只者じゃないですオーラ出してたら普通そうなりますよね。

でも、俺、本当はそんな大した奴じゃないんですよ。

くつ、これが身分不相応な役回りを演じた奴の末路なのかよ。

俺にも遂に破滅が訪れた訳だ。

.....いや、諦めちや駄目だ。

だって、人生を一生懸命に生きるってそう言うことじゃん。

ここで諦めたら多分死ぬ。

それが分かる。そう言う世界だ。

だから、諦めない。何があっても生き抜く。すうはあ。

「お前たちには強くなってもらう必要がある。」

「だからっ!!今は……………お前たち?」

「そうだ。真道才、つつままなか温実愛華。お前たちに、だ」

「あまり、話は読めないんですけど。才が言っていたみたいに今は一緒に戦うべきだと思います。」

「じきにわかる」

「……………何を言ってるやがる。」

「……………」

「ちつ、愛華、取り敢えず二人で戦うぞ。そんな奴気にしてたら、魔物に学校が滅茶苦茶にされちまう」

こ、これで良かったのかなあ。

一応先送りには出来たけどもっと上手く立ち回れたんじゃないかって思わずにはいられない。

結局できたことって、先送りだけだな。

信頼関係もかなりガツタガタになってしまった。

因みに温実さんと真道君の信頼関係は抜群だ。

偽天使の攻撃を温実さんが防御魔法で防ぎ、真道君が偽天使に突っ込む。仮に温実さんが防ぎきれなくても、真道君には自前で防御魔法が使える。

マジックチップの《マナシールド》だ。

天使は魔法の扱いには最も長けた種族だけど、物理防御と物理攻撃には難がある。

その弱点をついた連携だ。

更に厄介な相手などは《スパークバインド》で動きを封じる。

この三要素と真道君たちのポテンシャルも合わさり、スムーズに十七体もいた魔物たちは倒された。

「よしっ、倒し終えた。愛華、みんなが心配だ。

学生ホールに向かおう」

温実さんはその言葉にコクリと頷く。

あのく、私は？

あつ、一応、確認してくれたチラツと。

警戒されてるとかではないよね。心配してくれたんだよね？

まあ、取り敢えず、そんなこんなで校舎内を走りだす。

今は緊急事態だからね、何時もは走らないよ。

走っている間にも当然だけど、偽天使は湧いてくる。

それを真道君と温実さんは見事な連携で倒していく。

偽天使の弾幕のような魔法の雨を温実さんが防御魔法で防ぐ。

流星は一人で三体の偽天使相手に凌いでいただけはある。

まあ、今、目の前には少なくとも三十体以上はいる訳だけど。

とはいえ、彼らも魔法を撃った後は多少次の魔法を撃つまでのリキャストタイムが必ずやなため、そのタイミングで真道君が突っ込む。

一応、相手もそれを予期して魔法を温存していた奴もいたみたいだけど、これも温実さんが遠隔から防御魔法を発動し、防ぐ。

魔法の重複発動。

マジックチップを扱う防人にしか出来ず、その防人の中でもほんのごく一部の者しか扱えない希少技術。

それを現在彼女は使っている。

だから、遠隔で防御魔法を発動している温実さんを狙っても無駄だ。

しつかりと自分のことも守っている。

因みにこの遠隔発動も希少技術だ。

こっちは一応、他の種族でも使えるけど。

とはいえ、偽天使も中々デキる。

時間差で発動できるように待機していた者同士が同時に魔法を発動し真道君に張られた防御魔法を破壊する。

ただ、ここで、真道君は直ぐに自前の防御魔法《マナシールド》を発動。

そして、真道君の《マナシールド》を割った頃にはまた温実さんの防御魔法が飛んでくる。

防御魔法が飛んできた、真道君は《スパークバインド》を使い敵を捕縛、次々と斬っていく。

因みにマジックチップを使った魔法はリキャストタイムを必要としない。

即発動、即連射可能。

ただ、消耗品だからそれをやったら、直ぐに丸裸。

これを防ぐために通常はかなり出し惜しんでから使う。

まあ、そうやって、出し惜しんだせいで死んじやうケースもあるから一概に良いとは言えない。

何より、一流の防人はマジックチップの魔法を小出しにして使う。

そうなるとう威力は当然下がるんだけど、そこを、自分の魔力を上乗せして威力を上げ

るといもう一つの高等技術でカバーする。  
今、目の前の二人がやっているようにね。

あ、それと、現在、俺らは真つすぐ学生ホールに向かっているんだけど、このルート最短だけど最難関のルートだ。

代わりに一番、経験値が稼げるルートでもあるけどね。

真道君と温実さんも多分、十レベルはとくに超えてるんじゃないか？

えっ、俺？

全くレベルアップしてませんか？何か？

育ち盛りの一レベルですよ？

そんなどうでもいいことを考えていると、偽天使たちが急に突貫をかけてきた。

あつ……、これ、ヤバイやつ。

「お前たち、今すぐ、攻撃を止めて、防御に専念しろ！」

「はあ？何で、お前の言うこと聞かなきゃならないんだよ！」

「良いから、頼む！」

俺は誠心誠意、頭を下げる。

すると、真道君は優しいから、なんやかんや、俺の指示に従って、防御に専念してく

れる。

突っ込むんで来る敵を倒さないように峰で弾いたり、温実さんの防御壁の中に隠れた  
り。

そうして、少しした頃。

〈ドンツ〉

という衝撃が辺りに広がる。

それに対し、真道君は咄嗟に床に剣を差し、温実さんを腕に抱き、踏ん張っている。

俺、俺は……………吹っ飛ばされた。

うん、これはこれでヤバイやつだ。

あれ……………：俺つてボツチなのでは？

☆☆☆

飛ばされて、飛ばされて、飛ばされて。

気付いたら、完璧に真道君たちとはぐれてる。

つまり、ボツチ!!

うん、やばいね。

すつごくヤバい。普通に死ぬる。

強いて良かった点を上げれば吹き飛ばされながらもしつかり着地出来たことと、あの修羅みたいな最難関コースから外れられたくらいだね！

それ込みで一人になるのは不味いんだけど……………。

だってほら周りには偽天使がうようよいるしき。

うん、これでも多少はマシなんだよ？

少なくとも偽天使が三十体とか普通に現れるような場所では無いしき。

それでも、ここら辺は五体くらいで行動してるみたい。

正直、五体の偽天使を相手には出来ないし、三十体くらいで行動している偽天使がう



ようよいる元のルートには戻れない。

でもここにおいても危険なだけだし、どうにかここから移動しないとね。  
宛はあるのかだって？

一応なくはないよ。

ホールに辿り着くことはほとんど不可能になったけどね。

でも、吹き飛ばされたおかげでその場所は割と近い。

というか、何故か現在校舎の外に立っている。

多分、空からアイツが降ってきた際に壁も一部壊れて外まで吹っ飛ばされたんだと思う。

そのおかげで、割と安全な場所に移動できた。

こっから目的地である備品室までは校舎に入って突き当たりを曲がれば直ぐだから、そこまで遠くない。

むしろ、めっちゃ近いまである。

因みに一年の教室は二階にあり、学生ホールは四階、三階と五階はそれぞれ二年と三年の教室になっている。

勿論、それ以外にも諸々の設備はあるけどね。特に四階はどの学年も移動しやすいから色んな施設が密集している。

何だったら、別棟とも繋がってるしね。

まあ、今はあんまり関係ないんだけど。

重要なのは備品室が近いってこと。

そして、備品室には俺らに支給される筈のマジックチップが置いてある。

一応、小説の方だと『備品室に向かう』を選ぶと被害が増える代わりにマジックチップを入手することが出来る、と説明している。

勿論、このマジックチップは戦闘後に返さなくちやいけないから一時的なモード選択に近い。

それで、小説の主人公（真）はこの備品室のマジックチップを利用したレベリングを行おうとして、失敗する。

それというのも、いくらマジックチップを手に入れても所詮は戦場に出たこともない訓練を始めたばかりのぺえぺえだ。

上手くいくはずがない。

現段階で高等技術を使いこなす真道君たちとは違うんだ。

あつ、余談だけど、この時に主人公が選んだチップは《マナシールド》と《スパークバインド》つまり、現在の真道君のチップ構成だ。

真道君がこのイベントに挑むに辺り、この構成が最強だからね。

主人公（真）もそれに倣い、この構成にしたんだけど彼が使う《スパークバインド》は天使の動きを数瞬止めるので精一杯だった。

《マナシールド》も彼の者より脆かった。

それはなぜか……………。まあ非常に簡単な話だけど、魔法解放時のロスだ。

俺らは魔法解放の際に必ずと言っていいほどロスを出す。

しかも、素人だから、それはもうかなりの量を。

だけど、彼は出さない。それどころか完全に制御してみせ、魔法を小出しにし、自前の魔力で強化し、通常のマナチップ一枚分と同等以上の威力にする。

だからまあ、そこをしつかり計算に入れないと簡単に足元を救われるぞって話だ。

これにより、主人公（真）は生死の境を彷徨ったのでした。まる

俺は同じ道を辿らないためにそこも計算に入れ、しっかりと防御で固めるつもりだ。

半永久防御でイベントが終わるまで凌ぐ。

これしかない。これで無理なら諦めるしかない。

いや、絶対あきらめないけど。

そう思いながら、校舎に入り歩いていると後ろから偽天使が出て来た。

にゅつと、もう奇襲をかけるとかではなく、偶々見回りしてたら見つけたあ、みたいな感じで。

基本、浮いてるから足音とかもしないんだよなあ。こいつら。ただ、前からじゃなくて良かった。

備品室の方から来てたら絶望してたかもしれない。

それはそれとして俺は全力で走る。

それはもう、今までの人生で一番速いと言っても差し支え無い程に。

ただ、偽天使たちも鬼ごっこに興じているわけじゃない。

バリバリ魔法を撃ってくる。

それでも数は三体、今までで一番少ない数だ。この区域は重要視してないってことなんだろう。

まあ、生徒なんてほとんどいないしね。

俺は奴らの攻撃を《マナシールド》で防ぐ。

俺の《マナシールド》は奴らの攻撃を二発は耐えてくれた。ただ、それと同時に魔法の盾は壊れてしまい、三発目は防げない。

一応、チップ構成は《マナシールド》《マナシールド》だから、もう一回張れなくてもいいけど、一発だけなら気合で避けられそうなので気合で避ける。

〈ドントッ〉

目論見通り相手の魔法を避けることに成功する。無属性の魔法弾だから、何とか避け

られた。

それでも、普通に弾丸くらいの速度は出てたし、肉体強化を施してなかったら今頃避けられずにひき肉になってたと思う。

それでも、雷魔法、光魔法と比べれば無理ゲーではない。

雷魔法とか光魔法を避けられるのは主人公（偽）陣営と鬼人と戦人と獣人だけだからね。

授業でも、雷系統とかの超速魔法は「予兆を察知したら防御しましょう」が基本だ。

だから、一応偽天使たちは良心的と言っても良い。

リキャストタイム時に魔法だけじゃなく、羽も止めてくれたら更に良心的だ。

まあどうせ、もう追いつけないだろうけど。

なんせ既に曲がり角が目前だ。そして曲がり角を曲がれば備品室はすぐそこ……。

「あれっ？」

声に漏れるくらいヤバイ事態が目の前で起こった。

うん、現れた、曲がり角からひよっこり三体の偽天使たちが。

……………そう言えばあいつらコミュニケーションをとっていても声には出さないんだった。

もう完全に魔法をぶっぱする気満々でいる。

これ……………《マナシールド》で防いでも多分死ぬ。

というか足止めしたら、両サイドの偽天使から魔法放たれて終わるよな。

と、なると、うん。

スライディングじゃあ!!しかも頭からのね。

俺はズズズつとヘツスラで偽天使の足元を潜り抜ける。

こいつらが浮いてて良かった。……………初めて良かったって思ったわ。

しかも、咄嗟にヘッドスライディングで回避したから、目の前にいた偽天使はそのまま魔法を放ってしまい、俺を追っかけていた偽天使に誤射していた。

俺はその隙に備品室に飛び込む。

備品室は偽天使のせいでドアが開いており、普通に入れる。

ここは小説と同じだ。

そして、俺は急いで《マナシールド》の入ったボックスを二箱同時に取り出し、懐に入れる。

すると、マジックチップが置いてあった棚は上から降りてきたシャッターによって塞がり、取り出せなくなる。

これはマジックチップ泥棒が現れたときの処置だ。

因みに本来なら、備品室のドアも締まり、そっちもドアを覆う様にシャッターが下

がってチップ泥棒を完全に閉じ込めにかかる。

まあ、今はその機能は壊れてるからそんなことにはならないんだけど。

俺は柵が塞がれていく様子を横目にボックスの中を開ける。

そして、自分の魔剣に入れてある空になったチップを取り出し、新品のものを装填する。

装填し終わり、よしいくぞ〜っと思っていたら備品室の外から、偽天使が魔法弾を放ってくる。

俺は何とかローリングでドア付近の壁に移動し、その攻撃を凌ぐ。

奴らは羽が邪魔でこの部屋に入ってこれないだろうし、ドア付近であればドア周りの壁が邪魔でかなり攻撃がしづらい筈だ。

ただ、奴らに常識は通用しない。

ドアの所からひよっこり顔を出してくる。手に魔法弾を構えながら。

俺はひよっこり出て来たその偽天使を刀で『グサツ』と刺す。

向こうもお返しとばかりに魔法弾をぶっ放してくる。

一応、《マナシールド》を展開したけど、この至近距離だと防ぎきれず、吹き飛ばされ、後ろの柵（と言うかシャッター）に思い切り背中を打ち付ける。

それだけじゃない。

俺が背中を打ち付けた衝撃で怯んでいるともう一体の偽天使もドアの隙間から腕だけだし、こちらに向けて魔法弾を撃ち込んでくる。

俺はそれをローリングで横に移動することで何とか避ける。

避けるが、魔法を使わず待機していた二体の偽天使がそこに追い打ちをかける。

それを再度《マナシールド》を展開して防ぐ。

これが、《マナシールド》ダブル構成の強み。まあ、魔法を小出しに出来ればいらないんだけどさ。

俺が敵の攻撃を防ぎ終え、一息つこうとするも、魔法弾を構える二体の天使が目に飛び込んでくる。

???

いみがわからないよ。

え、どうなってるの？

だって、リキャストタイムあるだろ？君ら。

いや、落ち付け、何かからくりがある筈だ。奴らは雑兵級。出鱈目なこととはしてこない。

まず、ドアからひよっこり出てきて魔法を撃った奴と、その後、腕だけ出して魔法を撃った奴。



ドアから離れた所に撃ち込んできた奴が二体。

……………うん、つまり、残りの二体はまだ、待機してたってことか。

いや、なにそれ、そんなのあり？

数が多いんだからもつと慢心してかかって来いよ！！

しかも、二、二、二で別れられたせいで、もうリキヤストタイムに希望を見出すことも出来ない。

知ってか知らずか、あの戦国時代における第六天の魔王と同じ戦法を取ってきたって訳だ。

俺は敵の攻撃を横に跳び、何とか避けようとする。

「あッ」

避けようとしたんだけど、思いっきりわき腹が抉られた。

ついでに足にも少しかすった。

痛いなんてもんじゃやない。声にならない声が出た。痛すぎて声かすれた。

それでも、相手は構わず撃ってくる。こっちも急いでチップを交換する

どう考えても、間に合わない。

痛みに怯んでさえなければ、何とかなつたかもしれないけど、今更そんなこと言っても仕方がない。

というか、まともな喧嘩もしたことない人間に痛みを耐えろとか、無茶ぶりがすぎる。でも、絶対諦めたりしない。こんな所で諦めたら生き残るために利用した真道君に申し訳が立たない。

いや、まあ、申し訳が立たないっていうのも、完全にエゴなだけだよ。

つまり、こんな所で死ぬなんて死んでも御免だつてこと。

ここまで頭回して、すつごく悩んだのに、ここで終わりなんて悔しいしね。

じゃあ、どうやってこの場を切り抜けるのかだつて？

受けるしかないよね。魔剣でさ。

まあ、只受ける訳じゃない、逸らすように受ける。

右手は従来通り柄を握り、左腕を峰に着ける。それで左腕からはありつたけの魔力を込める。

今まで以上の肉体強化を施す。

〈ガギギイイイイ〉

車に引かれたのかと思うくらい重かった。正直、逸らすようにしたけど、どのくらい効果があったのか分からない。左腕に峰が深々と刺さっている。

というか、骨に到達してないか、これ？

ただ、思いっきり吹っ飛び、天井にぶつかり、シャッターにもぶつかりながらも、そ

れでも生きてる。左腕も思う様に動く、めっちゃ痛いけど。  
なら大丈夫だ。

とてもゆっくり流れる時間の中で、俺はマジックチップを交換する。  
ゲフッ。

思いつき尻を打ちつけた。

それと同時に、時間の流れが正常に戻る。

危ない、完全に自分の人生を振り返るターンに突入してた。

つと、危ないのは偽天使たちの存在もだ。

俺が着地すると同時に魔法弾が飛んでくる。それを俺は《マナシールド》で防ぐ。

防いだ後は直ぐに、マジックチップを交換する。

交換しながら、ドア目掛けて走る。

その間も敵は攻撃を仕掛けてくるが、それをもう片方にセットしている《マナシールド》で防ぐ。

そして、ドアを潜り抜けた俺はドア付近にいた偽天使に斬りかかる。

偽天使はサツとそれを避ける。

うん、まあ、偽天使って敏捷はかなり高いからな。

雑兵級だから目で追えないとか、追いかけられたら直ぐに捕まるってことはないけ

ど、俺程度じゃあ、攻撃は当てられない。

ひらひら躲されて終わり。

真道君、剣風さんなら追い付いて、斬り捨てられるんだけどね。

まあ、俺は二人じゃないから、自分らしい方法でこの場を切り抜ける。

つまるところ、逃げの一手。

正直、初めは、備品室に籠城でも良いんじゃないかって思ってた。

部屋に入ってこれないし、ドア付近の壁に張り付いてたら、爆発系の魔法を持たない

あいつらは攻撃しづらいだろうから。

でも、実際は避けるスペースも少ないし、こつちがじり貧になっている。

これだったら、逃げ回って撒いた方がマシだ。

いや、偽天使はそこら辺に居る訳だから、撒けないか。

それでも、持ち場を大きく離れてまで俺のことは追ってはこない筈だ。

なんせ、今頃、防人部隊がこつちに向かっているはずだから。

奴らもそれは分かっている。だから、防人部隊がどんな方法で侵入してきても直ぐに情報を伝達できるように持ち場を離れることは絶対にしない。

つまり、学生ホール付近に近づかなければ精々、少人数の偽天使に追われるだけで済む。

今みたいに。

それからは、偽天使との命を懸けた鬼ごっこが始まった。

いや、隠れ鬼かな、時に職員室の机の下に隠れたり、教卓の下に隠れたり。

ていうか、教卓の下に隠れたときは偽天使たちが備え付けられているロッカーに魔法弾ぶっパしててビビった。

もし隠れる場所にロッカー選んでたら死んでたわ。

ていうか、どこ行っても先回りされてすげえ怖かった。

ボックスに入ってたマジックチップも空になったわ。

怪我也ヤバイ。太ももとか挟まれたし、無傷だった方のわき腹も挟られた。

他にも擦り傷とか諸々。

一応肉体強化の応用？魔剣士科は直ぐに授業で習うから基礎か？で出血は直ぐに止めたからいいけど。

普通にヤバかった。

あ、でも、追いかけてられる途中、一階に戻った時に備品室で魔法弾ぶっパしてきた偽天使の内一体を倒した。

まあ、味方の誤射でダメージ受けてたやつだけ。ほら、ヘッドスライディングで避けた際に味方の魔法弾に当たった一番初めに追っかけてきた奴。

いやあ、階段で待ち伏せしてたから、飛び降りながら斬り捨ててやったぜ。

上手くいって良かった。

まあ、そんなこんなで、何とかかんとか凌いでたらあいつらは退却していった。真道君がやってくれたのだろう。

あつ、そう言えば《エンチャントスパーク》は習得できたのかな？

一応様子見にいくか。

ていうか、全身クソいてえ。

## 俺の原点

☆☆☆

俺は俺自身と愛華が吹き飛ばされないように踏ん張る。

一体何が起こってやがる!!

俺は事情を知っていいそうな魔導師Pに顔を向ける。

「おいつ、これは……………」

しかし、そこに魔導師Pの姿は無かった。

あいつどこ行きやがった。吹っ飛ばされたか？

いや、あいつに限ってそれは無いだろう。

緊急時なものにも関わらず一切混乱することなく対処する判断力。

他人に指示を出せる視野の広さ。

それに、愛華の悲鳴に気付き、位置を正確に把握してみせた身体機能。

恐らく奴は国が抱える上位の防人。

もしかしたら、その中でも最強の上位五人、護懐の一人かもしれない。

なんせ、俺の出自を知ってるのは親父の元同僚の護懐の人間か、国を運営しているお偉いさんしかいない筈だからな。

そんな奴がなんであって疑問に思ったこともあつたが、恐らくはお目付け役みたいなものだろう。

俺がより良き防人になれるように……………。

それはそれとして緊急時くらいは手を貸せよとは思つてしまう。

人の命がかかつてるっていうのに。

奴の姿勢には少し不満を持つてしまうが、今はそれどころではない。

とんでもない衝撃に襲われ、ついでに天井も壊されたことで先ほどまでは土煙が立っていたが、ようやくそれも晴れる。

そして、気づく。

今まで見てきた雑兵級の偽天使とは比べ物にならない程の偽天使が目の前にいることを。

恐らくは高さ五メートルはあるだろう。

そいつは現在、羽を繭のようにたたんでいる。

空から落ちてきたことを考えれば衝撃に備えて畳んでいたんだろう。

ついでに、分かっちゃいたが、奴に向かつて瘴気が流れ込んでいる。



恐らくはギミックによつてか、生徒によつて倒された魔物の瘴気が流れ込んでいるんだらう。

ここは学生ホールの目の前だしな。

通常、魔物つていうのは倒した相手に取り付こうと瘴気を飛ばすが、ある条件下においてはそれが覆される。

その条件とは自分よりも上位の魔物が近くににいる時だ。

この時、倒された魔物は倒した相手ではなく、より強力な魔物に力を分け与えようと瘴気を流す。

この現象を位階ステージ上昇と呼ぶ。

アイツが倒さないで防御に専念しろって言っていたのはこのためか。

仮に俺と愛華が天使を倒していたら今とは比べ物にならない程強化されていたことだらう。

高速で接近する敵にいち早く気づくとはな。

本当にアイツが戦闘に参加してくれたらと思わずにはいられない。

いや、今は俺に出来ることをしよう。

「愛華ツ!! 援護を頼めるか!!」

「うんっ！でも気を付けて！あの魔物の魔力量、足軽大将級みたい」  
「！そうか、わかった」

まさか、足軽大将級が出て来るとはな。せいぜい足軽小頭級だと思っていたんだが。これは、気を引き締めなくちゃな。

俺がそう考えていると、横から雑兵級の偽天使が攻撃を仕掛けてくる。

とはいえ、もう雑兵級なんて怖くはない。

初めの頃は、受け流すか、《マナシールド》で防ぐ以外の方法だと無傷で且つ次の行動に支障をきたさないように立ち回ることは出来なかった。けど今は、魔法弾を簡単に斬り捨てる事が出来る。

それに、位階ステージアップ上昇出来ないように、雑兵級が倒れないギリギリを見極め、斬りつけることで相手の魔力を吸って大幅に肉体を強化することも出来る。

今の俺からすれば、雑兵級は脅威ではない。

それはきつと愛華もだろう。

愛華の防御壁は既に雑兵級では割ることも出来ない程に強化されている。

抵抗レベラアップ力上昇の恩恵と戦いの中で魔力操作などの技術が大幅に上がっているのだ。

とは言え、流石に足軽大将級はそう簡単ではないだろう。

俺がそう考えていると、足軽大将級が魔法で槍を生み出し、俺に向かって飛んでくる。

速いッ、が対応できない程じゃない。

むしろ……………。

「偽天使の魔力で肉体強化を施している俺の方が、今のお前よりも速い！」

そう、本来の速度なら、俺の方が防戦一方となっていた。

しかし、偽天使の魔力を吸って肉体強化を施しているため、今は俺の方が圧倒的に速い。

足軽大将級は俺の攻撃に防戦一方になる。

それを見ていた雑兵級は援護とばかりに魔法弾を撃ってくるが、愛華の防御魔法でそれは防がれる。

ナイスだ愛華!!

ただ、今は防戦一方になっているが、奴は雑兵級じゃない。他の魔法も使えるはずだ。俺の読みは正しく、足軽大将級は俺から距離を離すと、左手を槍から離し、こちらに向けてくる。

そして、離れた手から三メートルはある極太のレーザーを撃ってくる。

レーザーは愛華が俺の為に張ってくれた防御魔法を砕く、俺はそれと同時に自前の《マナシールド》を展開し、レーザーの範囲内から離れる。

しかし、愛華は避けていなかったようでレーザーが愛華の防御魔法に当たってしま

う。

俺は一瞬息を呑むが、愛華の防御魔法はレーザーを弾き愛華を守っていた。

「凄いぞ、愛華！」

「ありがと、才。でも、今のでマジックチップを三つ消費しちゃってる。」

愛華は空になったマジックチップを交換しながらそう言う。

「どうやら、いくら愛華と言えど今の攻撃はそう何度も防げないみたいだ。」

「なら…。」

「《スパークバインド》」

俺は足軽大將級に《スパークバインド》を使い、動きを止める。

しかし、相手も只でやられるつもりは無いのか、雑兵級をけしかけ、俺が足軽大將級に攻撃を仕掛けるのを阻んでくる。

それを俺は、向かってくる雑兵級を倒さない程度に斬りつけ、逆に魔力を吸収し肉体強化に充てていく。

あまりにも、出てくる数が多かったため、手こずったが、それでも何とか目前まで辿り着く。

「これで、終わりだあああ」

俺は《スパークバインド》による拘束が解けていると踏み、再度《スパークバインド

》を放ちながら、足軽大将級に斬りかかる。

〈ガキイイイイイン〉

しかし、それは、阻まれてしまった。

足軽大将級の周りを半透明な黄色の防御膜が覆っていたのだ。

恐らく、無属性の防御魔法《ジェネリックシールド》だろう。

魔法、物理、両方を防ぐことが出来る魔法だ。

因みに無属性魔法は個人の魔力色によって色が変わる。

足軽大将級は防御魔法を展開しながら槍で攻撃を仕掛けてくる。

防御魔法の利点の一つは自分を防御魔法で守りながら敵には攻撃が通る点だ。

勿論、中にはそうじゃないものもあるが……………。

しかし、こうなつてくるとかなり時間を稼がれてしまう。

もう一度、あのレーザーを使ってこないと良いんだが…。

俺がそう思っていると、足軽大将級は槍で俺と打ち合いながら、魔法を発動する。

幸いレーザーの魔法ではなく、四発の攻撃光弾魔法のようだが……………。

それにしても、リキャストタイムが切れるのが早すぎる。

勿論、使用する魔法や実力によって、リキャストタイムの長さは変わってくるそうだが、

雑兵級と足軽大将級の間にごこまでの差があったとは。

俺はその攻撃を《マナシールド》で何とか防ぐ。

とは言え、節約しながら使ってはいたが、そろそろ《マナシールド》は空になる。

それに対し、相手はまだまだ、戦える。

どころか、槍と魔法壁で万全の備えだ。

恐らくは槍と魔法壁でリキャストタイムを凌ぎ、魔法で倒すというのが本来のこいつ

の戦闘スタイルなのだろう。

初めの方は舐められてたつて訳だ。

クソっ、どうする。

俺が内心でそう焦っていると愛華に声を掛けられる。

「オッ！受け取って。」

何だ？

俺はそう思い、飛んで来た何かを受け取る。

これは！

《マナシールド》のマジックチップ。

「良いのか！」

「うん、防御魔法科はマジックチップを多めに貰ってるから」

恩に着るぜ。

俺は愛華から貰った《マナシールド》と今まで使っていたものを交換すると、敢えて何時でも回避ができるように防御主体で戦っていたのを止め、反撃を開始する。

ただ、それでも、戦局は一向に動かない。奴の防御膜に罅を入れたと思つたら、直ぐに修復されるからだ。

しかも、現在は防御膜を二重に張っている。

出来るのなら初めからやればいいものを。

正直、まだ手札を隠していてもおかしくはない。だからこそ、早期決着をつけたい。

だけど、火力が足りない。俺のチップ構成は防御と拘束。

勿論、どちらも非常に役立つてくれたし、この構成じゃなかったらこんな早くここまで辿り着けなかっただろう。

だが、今、今だけは火力が欲しい。攻撃魔法か、付与魔法のマジックチップが………。《スパークバインド》を攻撃に転用できないか？

いや、無理だ。

拘束系の魔法が攻撃魔法に転用出来た話なんて聞いたことがない。

やっぱり、攻撃力を上げるマジックチップが必要だ。

現状を切り抜けるにはマジックチップが足りていない。

俺がそう考えていると、ふと昔のことを思い出した。

『ねえ、何でお父さんはマジックチップが無いのに、魔法が使えるの?』

『ん、それはな。お父さんが戦人だからだよ。戦人は自由に魔法が使えるんだぞ。』

『戦人ってすげえ!!』

『そうだろう、そうだろう。戦人は肉体、魔法どちらにも優れていて、その力でみんなを守るんだ』

『俺も、父ちゃんみたいな立派な戦人になるよ!』

そうだ、俺は戦人 真道正義しんどうまさはりの息子、真道才。

マジックチップが無くても魔法が使えて、すげえパワーでみんなを守る、正義の味方だ。親父が死んでから忘れていた小さい頃からの夢を思い出す。

思い出すと同時に手がパチリと静電気を帯びる。

いや、これは、静電気なんかじゃない。俺の魔法だ。意識して魔力を流し、魔法を操作する。

奴はまだ気づいていない。恐らく、気づいたら何らかの対策を取ってくる。一発勝負だ。

俺がそう思っていると、奴は四発の攻撃光弾を生み出す。

ここだッ!!

俺は天高く跳びあがる



「愛華！ 防御魔法を足場にしたい。頼めるか」

「うん、任せて。」

俺の指示に従い愛華が防御魔法を足場のように設置してくれる。

これで終わりだ。

足場を使い奴に向かつて急降下する。

仮に攻撃光弾を使ってきたても、《マナシールド》で防いで見せる。

その考えが見透かされていたのか、それとも偶々なのか。

奴は四つの攻撃光弾を集約させる。

これは……………。

「魔法改変！！」

愛華がそう叫ぶ。俺も同じ意見だ。

魔法改変。それは同系統の魔法でだけ可能な高等技術。一度発動した魔法を発動からそれ時間が経っていない時に限り、別の魔法に変更する技術。

こんな技術まで持っていたなんて。

俺はもう、ここから回避行動を取ることは出来ない。

奴が使うのは十中八九レーザー。

防ぐ手立てはない。

だがっ！それが何だ。

正義の味方は最後まで諦めない。俺がそう覚悟を決めたとき。

「魔法結界四重展開っ!!」

俺に四重の魔法防御が施される。それを為したのは当然愛華だ。

ただし、そうなってくると、愛華は無防備になってしまう。

つまり、彼女はこの攻撃にかけてくれたのだ。俺の勝利に賭けてくれたのだ。

なら、尚更負けるわけにはいかない。

「うおおおおおおおおおおお」

俺は雄たけびを上げながら、敵に突っ込む。レーザーは彼女の障壁が防いでくれてい

る。それでも、この至近距離だ。徐々にではあるが、罅が入り、割れていく。

それでも、最後の一枚、割れる前に、相手の防御膜に辿り着く。

なら、後は簡単だ!!

「エンチャントスパアアアアアアアアアアアアアアアアアク!!」

俺はそう叫ぶと同時に奴の防御膜ごと、奴の体を真っ二つに両断する。

そして、着地と同時に俺に掛けられていた防御魔法の最後の一枚が役目を終えたかの

ように割れる。

へズドンッ

奴の両断された体が崩れ落ちた。

それと同時に俺と愛華の体を瘴気が包む。

力が溢れる。

それは愛華も同じだったのか、無防備になった愛華に迫っていた魔法弾をただの魔力波で防いでしまう。

何だあれ？

ともかく、愛華が無事でよかった。俺も身を挺して、庇おうと足に力を入れていたが、自分の力で対処できたみたいだ。

そうだ！

早く、みんなの所に行かないと、俺はそう思い、愛華の方を向くと愛華も同じ気持ちだったのか、深く頷く。

俺たちは学生ホールまで走る。とは言っても、もうそんなに距離は無い。というか目前だ。

俺は勢いよく、学生ホールの扉を開ける。

どうやら、学生は入れるようになっていたようだ。

よくよく考えれば、何かしらのギミックが発動してもおかしくなかったよな。

「みんな、無事か？」

俺は声を掛けながら周りを見渡す。

どうやら、まだ、誰も怪我はしていないようだ。

壁が半壊になっていたため、心配したが、無事なようで安心した。

俺がほっと息を吐くと学内放送が流れる。これは魔物の侵入を教えてくれたものだ。

〈オシラセシマス。学園ニアラワレタ、マモノハ行方をクラマセマシタ。〉

その知らせに学生ホール全体が歓喜に包まれる。

魔物は基本的に転移系の移動手段を持たない。ただし、住処であるダンジョンへの帰

還だけは別でこの場合のみ転移を行える。

つまり、今回の戦いは完全勝利に終わったのだ。

あつ、そう言えば、魔導師Pの奴、結局どこに行ったんだ？

俺は魔導師Pを探すためにその場を離れ、廊下に出る。

まあ、神出鬼没なアイツのことだ、見つからないかもしれないけど。

俺はそう思いながらも階段を降りようとしたその時、声を掛けられる。

「その様子。無事に勝ったみたいだな」

「ああ、まあ……………」

俺は魔導師Pの言葉に返答しようとし、絶句する。

余裕綽々と言った様子を崩すことがないこいつが満身創痍になっているのだ。

見ていて心配になるほどの……………。

何故、立っているのか、何故、話せているのか、何よりも何故こいつはこんなにもポロポロになっているのか。

その様子は生前の親父に似ていて胸の奥がざわざわする。

親父もそうだった。人のため人のため、自分を蔑ろにし、死んでいった。

こいつも、もしかしたら……………。

「な、何で、足軽大将級と戦ってないお前がそんなにポロポロになってるんだよ。」

「……………」

「……………いたのか？足軽大将級以上の強敵が」

「……………ああ。」

「……………どんな奴なんだ？」

「……………偽鬼人と偽天使の複合だ。」

「なっ」

俺は言葉を失ってしまう。天使の特徴は魔法特化でスピードが速い。反対に鬼人は物理特化で魔法以外の能力が非常に高い。何よりその肉体は魔法を弾く。

つまり、偽天使と偽鬼人を組みあわせた魔物とはデメリットを打ち消し合った最強の魔物と言うことになる。

そもそも、二種族を複合した魔物なんて聞いたことも無かったが、こいつが言うのだから本当なんだろう。

そして、そんな強者相手にこいつはたった一人で挑んでいたんだ。

俺やこの学園を守るために……………。

「…もつと、もつと自分を大切にしろよ!!」

「……………してるさ、多少はな」

魔導師Pはそういう言う俺に背中を向け、立ち去ろうとする。

しかし、その直前、何か思い出したのか、こちらを振り向く。

「そう言えば、言い忘れていた。お前、良い顔をするようになったじゃないか」

その言葉に一瞬虚を突かれるが、俺は自然と頬が緩むのを感じる。

「まあな」

「原点を、自分の根幹にある信念を思い出した男の顔だ。」

一目見ただけでそこまで分かるなんて、やっぱりこいつは只ものじゃない。

「初めのチップに《スパークバインド》を選んで良かったか？」

「ああ、あんたのいう様に大切なものを思い出せたんだ。俺の願いを」

「そうか、それは良かった。」

男はそう言うのと今度こそ、立ち去ろうとする。

立ち去ろうとしたのだが、再度何かを思い出したのかこちらを向く。

「そう言えば、一つ言い忘れていた。俺のことは秘密でな」

男は口のあるであろう場所でも人差し指を立て、そう言っただけで去っていった。

まったく、あの男はどこまで先のことを見通していたのだから………。

親父に似た、自己犠牲の塊のような男、魔導士P。

また、どこかで会えるのだろうか？

☆☆☆

七百人もの魔物に襲われたこの事件は後に英雄の誕生と呼ばれるようになった。

当時学生の身分にも関わらず、真道才、温実愛華はその勇気と力でもって学園に現れ

た足軽大将級をたつた二人で撃破。

これにより、偽天使たちは学園への攻撃を辞め、退却を余儀なくされた。

学園の校舎自体は大きく損壊したものの、生徒、職員はたつた一人を除き死傷者は出

なかった。

そのたつた一人もお腹が痛いという理由で学生ホールに避難することなく、トイレに

こもっていたそうだ。

また、この生徒も重傷ではあったものの、近くにいた回復魔法士の手によって直ぐに治療され、後遺症もなく、その後の学園生活を送ったという。



ヒロインがいないって?遅くなつてすまない……  
ヒロインと接点?いやなんで?

☆☆☆

あの事件から、今日で二週間が経った。

俺はこっぴどく先生たちから怒られ、反省文を書かされた。

最悪だ。

あと、先週から授業が再開した。正直あんまり時間が経ってないだろって思うんだけど。

ていうか、休みくれ!!反省文と説教でまるまる潰れたんだが!!

うーん、ゴミ!

いや、それは言いすぎだし、そもそもこんな状況だからこそ、ゆつくりと育ててる時間が無いのも分かる。

後、たった一週間で校舎の修復及び設備の復旧が終わった。

うん、凄いね。早いね。流星は国が力を入れてるだけはある。

ということ、何のアクシデントも起こらず無事授業が再開したのだった。まる

因みに先週から新たな授業が始まった。

どんな授業かって？ダンジョンに入っただのレベル上げだ。

そう、あのRPGで定番のダンジョンだ。

まあ、ダンジョンとは言っても、あくまで六つの世界を繋ぐための転移門に突如魔物が湧いたものなんだけど。だから、宝箱とかは置いてないし、時々漂着してくる道具とかも基本的に国が預かって解析し、有用だと判断されれば、複製を試みられ、複製が完了すれば、オリジナルは上位の防人に預けられる。

そういうシステムになってるから、レアアイテムゲットで無双とかは出来ない。レベルアップと転移門に蔓延る魔物を減らすために行くのだ。

えっ？魔物と戦うのは早すぎないかって？

いやあ、その気持ちは分からなくはないんだけど、どうやら上層部の間では、一週間前の事件は何者かによつて作爲的に仕組まれたのではないかって考えられているんだって。

うん、知ってた!!

まあ、ことのあらましを完全に把握しているわけでは無いんだけどさ。

一応、設定は色々考えてたし、そこら辺と言うか、裏にいる奴については薄々勘づいている。

つまり、知っているのだよラスボスの正体を、ね。

とは言え、割とふわっと作ってるから、そいつが何の目的で動いてるのは分かんないんだよね。

つと、話が逸れた。

つまり、上層部は前回の事件は何かが起こる前兆なんじゃないかって考えているわけで、その何かが起こった時に備えて今は少しでも戦力が欲しいって状況なんだよね。

あつ、勿論だからって、「はい、君らダンジョンでレベル上げてきてね。ばいばい」ってされる訳じゃない。

ちやんと、実践経験のある防人を呼んでくれている。

流石に、国お抱えの上位百人の中から選んでるわけでは無いけど、それでも、国にいる防人の中では三百位には入るんじゃないかって言われてる人たちだ。

通称 むめいのつわもの  
無名の兵。

まあ、本当に無名って訳じゃないけどね。皆からこんだけ評価されてるわけだし。

ただ、そんな彼らが俺らの護衛をしてくれるからあんまり危険はない。

勿論、主人公（偽）達は例外なんですけどね。

主人公たちと言えば、彼ら、真道君と温実さんが犠牲者ゼロでこの前の事件を解決したらしい。

いやあく、その話を聞いた時は目ん玉飛び出るかと思つたよ。

だって、本来ならどのルートを選んだとしても犠牲は出る筈だったしね。

勿論、彼らの選んだルートは険しい代わりに死傷者は少ないルートではあつた。

でも、少人数ながら死傷者は出る、その筈だった。

その運命を彼らは覆した。

つて言ううと大袈裟なんだけど、確かに予想外のことではあつたよね。

まあ、このことに関して推測だけど、彼らが予想以上に速く足軽大将級を倒したことが原因なんじゃないかって考えてる。

俺が書いた小説はゲームの中って設定だったから、ルートを選んだあとはどれだけ速く敵を倒そうと、結果は変わらない、と言う風にしていた。

でも、ここが現実であるなら、それはおかしい。

速く敵を倒せばその分被害は減って然るべきだ。

この世界は何故か、俺の想像する世界と齟齬があつたり、どれだけ見て回つても綻びが一切見つからない。そのことから、現実的に矛盾する部分は修正されているということだろうか？

いや、何か、それも違和感がある。

違和感は………あるが、うん、考えても分からん!!

だから、このことについては保留だね。

もつと判断材料がないと。

それよりも、問題なのは剣風さんを初めとしたヒロインたちがあの事件で一切活躍出来なかつたってことだ。

本来なら、あの事件で剣風さんとかも活躍して、その功績によつて主人公達と共に特別防人部隊に任命される。

この特別防人部隊っていうのは言うなれば、塾とかで言う特別コースみたいな感じで且つ、限定的ではあるものの本来の防人と同様の権限が与えられるというものだ。

詳細を説明すると、今の魔剣士科からは抜けて、国が抱える上位百人の防人から授業を受けることが出来るようになる。

また、ダンジョン探索に関しても、雑兵級かその一つ上のランクの足軽級ダンジョンであれば、防人の許可が無くても自由に出入りできるようにする。

更に、緊急時においては単独行動が許されている。

そう、彼、彼女らは特別防人部隊として様々な事件を仲間たちと共に乗り越えて強くなつていくんだ。

……………行くんだけど。

現状だとそれも行かない。

一応、真道君と温実さんは特別防人として任命されたけど。

残りのメンバーは一般の生徒扱いだ。

まあ、それでも剣風麗けんなきれいと穿間弓弦せんまゆづるに關しては大丈夫だろう。

あの二人は真道君經由で仲良くなっており、一緒に組んでその才能をいかんなく發揮してくれている。

問題は問題はツ！！

回復魔法科の癒羽希カルミアゆうきかるみあ、君なんだよおおおおおおお！！

「…ど、どうかしましたか？音長さん」

「いや、何でも無いよ。」

ああ、ああ、すまない、考えることが多すぎて言い忘れてた、今俺たちはダンジョンにいる。

☆☆☆

何故、俺らのパーティーに癒羽希カルミアが入ってきたのか、それについて話すには少しだけ時間を遡る必要がある。

先ずは、そうだなあ。遡りすぎな気もするけど、パーティー決めの話からしていこう。この時はまだ、癒羽希カルミアはいなかった。

初期メンは魔剣士科の俺、同じく魔剣士科の毒ノ森君、攻撃魔法科の柵加君、防御魔法科の未裏さんだった。

そんなでもって、俺らを担当してくれたのが女性の防人弧囉子さんだ。

弧囉子さんが担当することになった経緯としては男子三人、女子一人の構成だったから、お目付け役というか、まあ、未裏さんの護衛役と言うか、そんな感じで配属されたらしい。

因みに柵加君と未裏さんは毒ノ森君が連れて来た。

正直、彼のどこにそんなコミュ力があるんだと初めの頃は思ったんだけど………こいつ、どうやら外面は良いらしい。

そう言えば、俺も毒ノ森君のファーストコンタクトはすげえ好印象を抱いてた。

この世渡り上手め!

まあ、そんな感じで割とスムーズにパーティーメンバーは集められた。

しかも攻撃魔法科では柵加君、中の中くらいの成績を収めており、未裏さんも防御魔

法科で中の上くらいの成績を収めていた。

そこに、同じく中の上くらいの成績の毒ノ森君と、この前の事件で一体の雑兵級を倒したことで、恐らく一レベル程上がり、ギリギリ、上の下と呼んでもいいかもしれないくらいの実力になった俺がいる。

だからまあ、ダンジョンでのレベリングもかなり順調に進んでいた。

勿論、もつと順調に進んでいる組もある。

筆頭は剣風さんと穿間せんまさんの二人だろう。

いや、二人構成のパーティーがなんで筆頭になれるの？と思わなくもないけど、もう主要キャラってだけで何か納得してしまう。

そういうもんかって。

それで、その頃はそこまで気にしていなかったんだ。

……癒羽ゆき希カルミアがこの二人と一緒に居なかったことに……………。

正直、別のパーティーでも評価されるだろうと思っていたからさ。

あつ、因みに癒羽ゆき希カルミアはその名の通り、ハーフの女の子だ。

身長が低く、人形のような金髪ポブカット美少女。

ついでに言うとか剣風麗はクール系な見た目の黒髪ポニテで男勝りな美少女。

穿間せんま弓弦は赤髪ツインテの勝気な美少女。ツンデレ属性もちだ。



温実<sup>つつま</sup>愛華<sup>まなか</sup>はロングの栗色髪に泣きぼくろのある美少女。何がとは言わないがとてもでかい。

つてな感じになっている。

そんな、金髪ロリがなんでもうちにいるかって話だけど。

何か、たらい回しにされてきたらしい。

いや、確かに当時そんな噂が流れてきてはいた。

何でも、補助魔法しかセットしない回復魔法士がいるってさ。

うん、その噂を聞いた時は俺も思ったよ。いや、他のマジックチップもセットしたらって。

勿論、補助一辺倒で構成する回復魔法士もいるけど、場合によっては様々なマジックチップをセットする。

というか、自分のパーティーに何が欠けているのか、どの魔法をセットするのが正解なのかっていうのを考えるのもダンジョン攻略の基本だ。

だから初めは皆、自分の得意魔法しか入れてなくても、ダンジョン攻略の授業からは他の魔法も入れていく。

それをやらない生徒などそうそういない。

けど、確かに彼女は序盤、絶対に攻撃魔法をセットしなかった。

いや、セツトできなかつた。

その時点で気づけつて？

いや、だって、小説ではそんなに問題にならないんだよこのことは。

今回、歴史が変わって真道君たちと組めなくなつたことで起こつた問題だね。

せめて、劍風さんたちと組んでくれればな。

一応、言つて置くと彼女は優秀だ。非常に優秀だ。

補助魔法だけでも十分にやつていけるほどに。

ただ、考えて欲しい。

こつちが火力が欲しいなつて考えていても、絶対に攻撃魔法を入れない奴。

お前、本気でやつてんのかつてならない？

嫌じゃない？命がけで戦つてゐるのに変なこだわり出されたら。

しかも、人によつてはぶりっ娘みたいつて印象を持つ人もいるよね、補助魔法しか使えませんか。

つまりそう言うことです。

勿論、彼女は容姿も優れているから、男のパーティーなら、それはもうちやほやされたことだろう。ただ、彼女が入つたのは女の子だけで構成されているパーティーだつ

た。

そりやそうだよね。

ダンジョンなんて完全犯罪出来る場所で異性と入ろうとする胆力のある人間の方が珍しい。

うちの未裏さんの方が珍しい手合いなのだ。普通は男女混合で組もうなんてしない。毒ノ森君、君は一体どんな手を使ったんだい？

いや、今はいいか。その話は。

話は戻すけど、癒羽希ゆうきさんもその例に漏れず女生徒だけで組んだって訳。

それで、攻撃魔法のチップをいれないことが原因で他のパーティーに移った。

移ったパーティーも女性パーティーだったんだけど、そこも同じ理由で移った。

それを何度か繰り返して、遂には全女性パーティーからは追い出されたから、一人とはいえ女性メンバーがいて、担当の防人が女性で且つそこそこ安定していたうちのパーティーに来たって訳。

えっ？

剣風さんの所はって？

彼女の所は二人パーティーで安定してるとは言えないし、何よりも二人で組んでいる理由が、「他の生徒だと私たちの成長速度についてこれない」って理由で断っているんだ

よ？

入りたいと思う？

そんなところ。

つとと、危ない危ない。

敵が攻撃してきた。

「音長君！ぼーつとしないで、敵がいるのよ」

防人の人に怒られてしまった。

俺は直ぐに刀身から魔力を通し肉体を強化する。

敵は戦人型の魔物だ。

戦人型の魔物は魔法と体術どちらも使ってくるので、パーティーの連携を学ぶ上では

非常に効率のいい敵だ。

俺は目の前に出て来た、戦人型の魔物の拳を剣で受ける。

それにより、奴の表皮は切り刻まれる

奴が剣を持つていれば話は別だが、こいつは雑兵級の魔物のため、魔法で武器を生み

出すことは出来ない。

それでも、俺達よりは圧倒的に強いいため、本来なら防人の人がフォローをしてくれる

のだが、今の俺たちには必要ない。

「魔剣士さんたち。《フィジカルオーガ》です。」

そう、なんてたって、今の俺達には回復魔法士枠のヒロインがついているのだから。俺は自前の魔力の肉体強化とも、魔物の魔力を吸つての肉体強化とも比べものにならない程の強化を受ける。

その力でもって毒ノ森君と共に完璧に偽戦人の猛攻を防いで見せる。

更にその隙に癒羽希さんは未裏さんにも魔法をかけていく。

「《マジックブースト》」

それは攻撃魔法を強化する付与魔法。

これにより、未裏さんの攻撃魔法は大幅に強化された。

「《ストーンニードル》」

未裏さんはその強化された魔法攻撃でもって偽戦人を刺し貫く。

うん、めっちゃ強い。

補助魔法だけでもいい気がしてきた。

まあ、仮に彼女自身が攻撃魔法を発動したら、こんなに手間はかからないんだけどね。というか、ありがたいけど、これ、完全に宝の持ち腐れだ。

どうか、剣風さんたちとくつつけなきゃ。

☆☆☆

そうして暫くして、今日の探索は終わった。

結果としてはかなりの魔物を倒せた。

多分、学年でトップテンに入る位にはダンジョン攻略における俺らの成績は優秀だ。ゲームヒロインがいるのだから、当然の結果ではあるけど。

ただ、さつきも言ったけど彼女が俺らの所にいるのは宝の持ち腐れだ。

………保身第一主義の俺がこんなことを言うのはおかしいって思うかい？

でも、別に何もおかしいことでは無いんだ。

だって、このまま俺らの所にいるより、主人公たちと一緒に行動し、立ちほだかる脅威を打ち倒してくれた方が俺としてはありがたいからね。

主人公の利益が巡り巡って俺の保身に繋がるって訳よ。

それにまあ、他のパーティーが彼女を簡単に切れた理由でもあるんだけど、俺らには現在、防人の人がついている。

つまり、安全は保障されていると言っていい。

勿論、防人の人も三年間ずっとついてくれるわけでは無いんだけど、少なくとも一年の間はついてくれる。

だから、そんなに困らないのだ。

ダンジョン攻略の授業は別に高難度ダンジョンに潜れとか、深部に辿り着けて訳で

はないから、防人の人が離れた後は浅瀬でぴちやぴちやしてればいいしね。

「なあ、この後みんなで打ち上げいかね!」

棚加君がダンジョンを出て、学校に帰っている途中、そんなことを言ってくる。

主に癒羽希さんに視線を向けながら。

いや、本人は多分、気づかれないようにチラ見しているつもりなんだと思うけど、うん、バレバレ………って言うのと流石に可哀そうだけど、うん。うん。

バレバレだ。

癒羽希さんもそれを感じ取ったようで若干頬が引き攣っている。

まあ、そんな状態だし、返答なんて分かっているようなものだ。

「えっと、ごめんなさい。寮で授業の復習をしたいので」

「あ、そつかり。それなら仕方ねえよな。……三人でいく?」

「悪いけど、僕はパス。この後、未裏と図書室で勉強するから」

「そゆこと、じゃ、私と毒ノ森君は帰るから」

「あ、そつかり、じゃあ、今日はお開きだな」

「え? 何で? 俺はまだ返答してないんだけど?」

「へっ? あ、ああ、そうだな、でも、ほら? 他の奴らは用事があるみたいだしさ。」

「そうだね。じゃあ、二人で行こうよ。折角だし、親睦を深めようか」

俺はそう言って、棚加君を引きずっていった。

本当なら一年生の間だけ、月に一度無料で使える学内レストランに入ろうとしたんだけど、棚加君が思った以上に抵抗するもんだから、結局、食堂でご飯をして解散になった。

しかも、最後別れるとき、「今日はとっても充実してたね。棚加君？」って言ったら、引き攣った笑みを返された。

いやあ、失礼な人だなあ。まったたく。

そんな反応されると傷ついちゃうよ。

つと、まあ、おふざけはこのくらいにして、俺は売店を目指す。

理由としては簡単だ。魔導師Pとして活動する時に被っている被り物のスベアを調達するためだ。

前回の事件で分かったことなのだが、怪我は勿論、戦いをする上で服も破損する。

一応、服に関してはダンジョン攻略の授業が開始された際に耐久力の高い戦闘服を支給されたけど、自前のピーマンの被り物は普通の被り物と遜色ない耐久性をしている。

だからまあ、仮に被り物が破れた際に変えとなる被り物が必要だと感じただのだ。

感じたから、来たんだけど……………。

「すいませ〜ん。前にあったピーマンの被り物つてありますか？」



「えっ、ああ、ごめんねえ。あの被り物、今、売り切れなんだよ。あの特別防人の子が  
買い占めちゃって。」

はっ?

何で? 何で買い占めてるの。

というか、どっちさ、買い占めたの。

「いやあ、嬉しいねえ。元々コアなファンは付いていたんだけど、特別防人の子が買っ  
てくれたら知名度も上がるってもんさ。しかも、「この、被り物で俺もきつと………」。  
なんて言いながら熱い視線を向けてたんだよ。」

いやあ、作ってる身としては嬉しいもんさね!」

しんどおおおおおおお、お前かあああああああ

!!!!!!!!!!!!!!

「ふっふっふ。安心しな。わたしや、あんたみたいなコアなファンのことも蔑ろにする

気はないさ。じゃっじゃ〜ん。パプリカの被り物だよ。しかも、赤と黄色！両方あるのや。」

「あつ、じゃあ、両方下さい。」

「毎度あり〜。」

ピーマンの被り物は無かったけど、まあ、いつか。

別にピーマンにそんな拘りないし。

すれ違ってるって分かっていても言えないことってある  
よね

☆☆☆

俺と毒ノ森君は現在、魔剣士科の授業を終え、ダンジョンに潜るために、待ち合わせ場所の

学生ホールへと向かっていた。

学生ホールは緊急時には生徒たちの避難場所となっているが、通常時には生徒たちの憩いの場となっている。

むしろ、多くの生徒が利用し、場所を把握しているからこそ、いざと言う時の避難場所に指定されていると言っている。

「おいおい、あいつらって確か……………」

「ああ、癒羽希のおこぼれ貰ってる奴らだよ。」

多くの生徒が利用する場所なため、学生ホールへの通路は多くの生徒が通る。

「いやあ、恥ずかしくないんかね？実力者入れて自分たちの成績上げるの」

「……………癒羽希さん、可哀想。」

そうすると、こう言う心無い言葉を、俺たちに聞こえるか聞こえないかくらいの声量で言ってくる奴らもいる。

いや、俺達と癒羽希さんの実力が見合っていないのは事実だけどね？

以前、癒羽希さんがたらい回しにされているのは本人が攻撃魔法のマジックチップを入れていないからだ、と話したが、真相は違ったのかもしれない。

確かに表向きは攻撃魔法のマジックチップを入れていないことだったのだろう。

噂はそう流れてきたし、本人も加入時に攻撃魔法を使えないことを謝ってきた。

だけど、本当の所はこういう風に陰でコソコソ言われるのに耐えかねて、癒羽希さんを脱退させたのかもしれない。

まあ、因みに陰でコソコソ言ってる奴ら、全員実技の成績は大したことがなかった。

そのため、ダンジョン攻略では余り者同士で組んでるようだ。

正直、仮に癒羽希さんがいなくてもダンジョン攻略の成績はうちの方が高い。

ただ、俺は大人だから、彼らの言ってることを負け犬の遠吠えとして、切って捨てない。

彼らの言うことを真摯に受け止め、そして、こう思った。

いや、成績を良くする努力をしない君たちにそんなことを言われても、全然響かん。

むしろ、命が懸ってるのに何でそんな余裕なん？

少なくとも、もっと強くなる努力した方が良いよ。

せめて、授業だけでももっと真剣に受けよう？

別に剣風さんとか穿間さんに潜ってもらえるか頼んだら？とかは思わんし、されたらこつちが困るんだけどさ。

「……まったく、好き勝手言ってくれろ。」

「毒ノ森君。気にしちゃ駄目だよ。」

俺はあんま響かなかったんだけど、毒ノ森君は結構参ってるみたい。

彼って口は悪いけど、結構、情に厚いし、まともな感性してるよね。

未だに俺の友達でいてくれてるしね！

俺は彼の背中をぼんぼん叩く。元気出せよ。

別に否定的な人ばかりじゃないんだ。

むしろ、安定した実力のパーティーは割と俺たちのこと認めてるよ？

俺達も頭下げてでも女性メンバーに入って貰えば良かったりつか、あそこが取って無かつたらうちが取れてたかもってさ。

ただ、どうやら、みんな否定的な声ばかりを意識してしまってるらしい。

ダンジョンでは今まで通りのパフォーマンスを発揮できてるし、癒羽希さんに当たった

りもしていない。

それでも、癒羽希さん大好き人間だった棚加君まで参つてるとなるとちよつと困るよねえ。

後、癒羽希さんに関しても何故か思い悩む素振りがある。

今までもこんな風な雰囲気になって、脱退を言い渡されたのかもしれない。

うゝむ、困ったなあ。

凄く困った。

何に困つてるのかだつて？

いやさ、……………みんなとはダンジョン攻略を通して絆も深まったし、心の底から困つてるなら力になりたつて思つてるんだよ。

でも……………俺も命かかつてるからさ。

ぶつちやけ、癒羽希さんには剣風さんと穿間さんのパーティーに入つて欲しいって思つてるんだよね。

うん、つまり、誠に遺憾ながら、俺も癒羽希さん脱退派ではある。

☆☆☆

最近、皆さんとってもピリピリしています。

ようやく、今のパーティーの方たちとも打ち解けて、頑張るぞー!! って思ってたのに。この嫌な感じにはとつても、とつても、馴染みがあります。

私を皆さんが、追い出すときの雰囲気です。

私がパーティーを組んだ方たちは皆さんとつてもいい人たちでした。

攻撃魔法のマジックチップを入れようとしないうちに私を受け入れてくれて、「癒羽希さんのお陰でスムーズに抵抗力上昇が上がるようになったありがとう」、「癒羽希さんが後ろに控えてくれるから、勇気を出して戦える。ありがとう」そう言ってくれます。

なのにある時を境に、その人たちが突如、私をパーティーから追い出します。

やっぱり、攻撃魔法を入れない私を徐々に疎ましく感じるようになったのでしょうか？

私は………私は、攻撃魔法を使うべきなのでしょうか？

ワンドをギュツと握る。そして、攻撃魔法を使う自分を想像する。

怖い、怖い。

魔物を傷つけるのが怖いんじゃない。

自分が変わってしまうのが怖いんだ。

私のおばあちゃんは皆から救恤の戦巫女と呼ばれていた。

そんなおばあちゃんが私は大好きだった。そんなおばあちゃんみたいになりたいと思っていた。

だけど、おばあちゃんは私の頭を撫でながら、「私みたいになるんじゃない。」そう言った。

私は納得いかなくて、何度も何度もそんなこと言うのって尋ねた。

『おばあちゃん。何でおばあちゃんみたいになったらダメなの？おばあちゃんはきゆうじゅつのいくさみこでしょ!!』

『……………そんないいもんじゃないよ……………その肩書は……………。』

『かつこいいもん!!私なるもん!!』

『……………いいかい、カルミア。救恤の戦巫女つてのはね。敵を殺せて味方を癒せる。そう言う意味を込めて呼ばれるようになったもんさ。』

『そんなの知ってるもん!!敵をやっつけて味方を助けるんでしょ!』

『まあ、いいから、最後まで聞きなさい。……………私はさ、いつの間にかその肩書に反して敵を殺す事ばかりを考えるようになったんだ。』

『なんで?』

『知っちゃったんだよ。敵を殺すことで、救える数の方がよっぽど多いってね。』

魔物を一人殺せば、その魔物が殺そうとしていた人、殺すかもしれない人たちを救え



る。ただ、人を癒して救える数は、癒した人間ただ一人。

魔物を殺すのは一瞬なのに、人を癒すのには時間がかかる。それに、場合によっては助けられないかもしれない。

回復魔法を以てしても。

そうして、私は敵を殺すことに傾倒していった。

間違ったことだなんて思っちゃいなかった。………ただ、ある日ね、回復魔導士のテントに子供が運ばれてきたんだ。

魔物に襲われた子がね。

その子は一度、私たち回復魔導士の下に連れてこられた。

その時は息もあつた。

………私は当時、攻撃魔法士としても上位の実力者であつたから、その子を他の回復魔導士に任せて、敵を殺しに行った。』

『その子は………死んじゃつたの?』

『………ああ、死んだ。………私なら間違いなく助けられた。………いいかい、カルミア。私は回復魔導士は魔物を殺したらおしまいだと思ってる。

心に潜む怪物に魅入られちゃうんだ。だから、あんたが………本気で回復魔導士として活躍したいなら攻撃魔法は使わないことだ。』

『……………うん。分かった』

おばあちゃんと交わしたその約束は、未だに私の脳裏に焼き付いている。

私は怖いんだ。攻撃魔法を使うようになって、敵を殺すことに重きを置くようになった、そうしていずれ、大切な人を見殺しにしまっうんじゃないかと、怖くてたまらないんだ。

……………でも、このままだとまた、追い出されてしまう。

私は、私は攻撃魔法を使うべきなんだろうか？

分からない、分からない。どうするのが正解なのか分からない。

「……………大丈夫？癒羽希さん、顔色があまり良くないけど……………」

「いえ、大丈夫です。私は全然問題ないですよ。元気もりもりです!!」

「そう？…ならいいんだけど」

どうやら、私が考え込んでいたから未裏さんが心配してくれたようです。

しつかりしなくちやいけませんね。

私は前を向いてずんずんと歩いていきます。

その時、偶々、考え込んでいる様子の音長君が目に入りました。

だから私もさつき気を使ってくれた未裏さんの真似をして声をかけてみることにし

ました。

「音長君！どうされましたか？」

「……………ん？いや……………仮に癒羽希さんが回復魔法のみで戦っていくのなら別のパー「つてめえ!!おとながああ!!それ以上言ったらぶっ飛ばすぞ!!」……………ごめん、ごめん、冗談だよ。」

音長君が別のパーティーへの移籍を提案しようとした所で、棚加君が怒りながら止めにかかります。

ただ、棚加君は怒りを抑えられない様子で未だに音長君の胸倉を掴んでいます。

……………私が原因なんだから、私が止めなくちゃ!!

「あ、あの「やめろ!!」一人とも、みつともないぞ!!」

私が声を張ろうとした所で、毒ノ森君が二人を止める。

「……………すいません。癒羽希さん、君は僕たちにとつてかけがえのないパーティーメンバーだ。」

是非、これからも僕たちと共にパーティーを組んで欲しい。」

毒ノ森君が頭を下げながら、私にパーティーに居て欲しいと頼んでくる。

「……………はいっ！勿論です。」

「ありがとう。……………それと、音長君、次、似たようなことを言ったら冗談でも許さない。」

……その時は、君がパーティーを脱退する時だと覚えておいて欲しい。」

「……………わかったよ。すまなかつたね、癒羽希さん」

「い、いえ！私は全然気にしてませんので！」

……………私のせいで、皆さんの関係が壊れちゃうのは嫌だな……………。

その後のダンジョン攻略は皆さんいつも通りの力を発揮し、弧囃子さんからも「いつも通り安定した立ち回りが出来ているわ。私が離れるのも時間の問題かもしれないわね。」と言って貰った。

でも、このままで本当に良いのかな？

私がいなくなれば全部丸く収まる。

本当はそうするのが正解なんじゃないのかな？

今ままでそうしてきたみたいに……………。

もう、何が何だか、分からないよ。どうすれば正解なの？

どうすれば、良いの？……………攻撃魔法が使えれば良いの？

そうすれば、音長君も私をパーティーメンバーとして認めてくれるの？

おばあちゃん。私、どうすれば良いのか分かんないよ。

☆☆☆

ふむ、それとなく剣風さんのパーティーとくつつけようとしたら棚加君にめっちゃ怒

られた。

毒ノ森君からも注意を受けた。

解せぬ。

いやあ、癒羽希さんさえ納得させられれば、後は魔導師Pとして真道君辺りに接触して、何とか癒羽希さんを剣風さんのパーティーに入れられるように取り計れたのになあ、残念。

さてさて、一番簡単なプランAが失敗してしまったし、プランBを………考えなきゃだよなあ。

勿論、俺としても円満に別れられるように取り計らうつもりだ。

癒羽希さんやうちのパーティーメンバーとはぜひぜひこれから仲良くしていききたいしね。

にしても、普通ならこんな過剰な反応されなと思うんだけどなあ。

だって、俺らと彼女では実力が釣り合っていないのはみんな分かってるだろうし。

あつ、勿論彼女が上で俺らが下って意味ね？

そう考えると、やっぱり、外野の野次のせいかなあ？

個人的にはどうでもいいけどちよつと邪魔くさく感じて来たなあ。

まっ、勿論だからって彼らに危害を加えたりはしないんだけどね！

人の恨みつて怖いし、彼らにだって、肉壁とか囮とか彼らにしかできない重要な役目があるからね！

取り敢えずは皆の機嫌を損ねっちゃったから、ご機嫌を取らなくちゃ。

特に、癒羽希さんには誤解を生むようなことを言ってしまったしね。

彼女の力を高く買っていることを伝えないと！

その上で、どうにか、こうにか、君の実力的に剣風さんたちと組むのが良いよつて教えなくては。

………本来ならこんな出来事無かつたんだけどなあ………。

いや、そんな考えをしてはダメだ！！

多くの生徒が生き残ったことを喜ぼう。

戦力が増えれば、俺の死亡率も下がるしね。

俺はそう決意を固め、寮に帰った。

寮に帰った後は毒ノ森君と柵加君に謝った。

「ごめん！！二人とも、ダンジョン前であんなこと言つて。」

「いや………僕も言い過ぎた。はあ………他人に強い言葉を使つちやうのは僕の悪い癖だ。」

「その………俺もすまん！お前が悪い訳じゃないのに、カリカリして、当たつちまった。」

「……………二人とも……………ううん、陰でコソコソ言う人たちの話を聞いて、確かに俺たちの班と癒羽希さんじゃあ釣り合いが取れてないかもって思っちゃったんだ。

それで……………あんなこと言っちゃって……………」

「……………音長君の言いたいことは分かるよ。でも僕は、癒羽希さんがこのパーティーに居たいと言っている間は居させてあげるべきだと思う。」

「ああ、俺も毒ノ森の意見に賛成だ。」

「……………そうだよね。二人とも」

うん、そうだよね。

俺としても剣風さんたちとパーティーは組んで欲しいけど、無理矢理組ませてやる気が無かったら意味ないし……………どうにか、円満に移籍して貰わなくちゃ。

命がけの戦いに安定なんて無かったのかもしれない  
.....。

☆☆☆

というところで、俺が毒ノ森君と棚加君を怒らせた日から一日が経った。

鉄は熱いうちに打って言葉もあるし、他人に謝るのつて日が経てば経つほど、なんとなく言い出しづらくなるから俺は朝のホームルームの前に早速癒羽希さんに謝りに行くことにした。

俺ってば偉い。

やはり、こう言う所で前世の経験が生きているよね！

いや、前世っていうけど前の世界の俺って、死んでるのかな？

色んな事がありすぎて考えるのを放棄してたけど、そもそも、ここに来る前何してたのかも覚えてないんだよな。

まあ、いいか。

今重要なのは癒羽希さんにあつて、謝ることだからな。

「すいませ〜ん、癒羽希さんいますか？」



俺が回復魔法科の教室の前で癒羽希さんと呼ぶと、俺の存在に気づいた癒羽希さんがトコトコと小走りしながら、こちらに駆け寄ってきた。

しかし、その顔は少しだけ不安そうだ。やはり、変に勘違いをされてしまっているのかもしれない。

「やあ、癒羽希さん、少し時間貰っても良い？」

「は、はい、ホームルームまでなら………」

そう言う俺と癒羽希さんは場所を移し、人気のない廊下へと場所を指す。

……………

一応善意のつもりだったんだけど、人気のない場所に着いた癒羽希さんはとてもびくびくしている。

いやあ、少し込み入った話だし、人気のない場所を選んだけど、人前とかの方が良かったかな？

うむ、外野がどう動くか分からないから何とも言えん。

正直、良い予感はないんだよなあ。

少なくとも、剣風さんのパーティーに入れたい俺からすればあまり利にはならないだろう。

というか、折角ここまで移動したのに、ここから更に場所を移す必要はないか。

面倒だし……………。

「あく、昨日はごめん、癒羽希さん。」

「い、いえ。元々私が攻撃魔法を使えないのが悪いので……………」

「違う、違うんだ。昨日、あんなことを言ったのは君が攻撃魔法を使えないのを非難したかった訳じゃない……………。むしろ、逆なんだ。」

「……………逆？」

「ああ、君のお陰で俺たちはここまでこれた。癒羽希さんがまだ加入していなかった頃より、何倍も強くなれた。」

「……………音長君」

「ただ、だからこそ、惜しいと思ってしまったんだ。……………きつと、癒羽希さんは剣風さんのパーティーでもやっていける、そのくらいのパテンシャルを持っている。」

彼女たちと同じ、百年に一度の、世界すら救えるほどの天才だ。

だからこそ、俺らと一緒に居たら、君の才能が埋もれてしまうんじゃないかって思ってしまったんだ。

だけど、君自身の精神面を全く考えられていなかった……………すまない、癒羽希さん。」

「……………音長君、音長君がそこまで私を評価してくれていたなんて知りませんでした。」

……………けど、私は音長君が言うみたいないな凄い人じゃないです。

色んな事に悩んで踏み出せなくて、ずっととうじうじとその場で足踏みをしている臆病者です。

だから、そんな過大な評価をされてしまったら、今度はプレッシャーで動けなくなっちゃいます。えへへへ」

俺が如何に癒羽希さんが替えの効かない人材かを説いたら、癒羽希さんは卑屈な自分を隠すように、いや誤魔化すように笑った。

きつと、彼女にこれ以上言葉を尽くしても無駄だろう。

「そっか、変にプレッシャーをかけることを言っでごめんね。お詫びにココアあるんだけど……いる？」

「えっ、良いんですか？」

「うん、元々癒羽希さんに渡す気だったし……。癒羽希さん、待ち合わせのとき良くココア飲んでるから、もしかして好きなのかなって思ってたんだ。」

「あ、ありがとうございます。ココアは大好きなんです。」

「なら、良かった。」

俺は癒羽希さんにココアを渡すとその場を去る。

因みに、別に彼女が良くココアを飲んでるから、ココアが好きなんじゃないかって考えたわけでは無い。

ていうか、知ってた。

うん、設定にココア好きは入れてたからさ。

むしろ、それでココア飲んでるのが目に付いたまでである。

……………ま、本当におなごの行動から相手の趣味嗜好が分かれば、俺は前世童貞ではなかったのさ……。

とはいえ、これで、癒羽希さんに謝ったし、一応未裏さんにも謝っておくか。

という訳で、昼休みに未裏さんの下へ来た。

「ごめん、未裏さん。昨日はあんなことを言っただけでパーティーの足並みを乱して」

「私は別にいいわ。あなたが口にしていなければ、みんなが心のうちに貯め込んでいた不満は別の形で爆発していたと思うし。……………ま、カルミアには謝った方が良いとは思わうわ。」

……………というか、あなたって意外と律儀ね。」

「ははは、そうかい？」

「親しき中にも礼儀あり、俺は皆に礼を失しないようにいつも気を付けているんだけどな。」

「……………そ。……………良いわ、確かに謝罪は受け取ったから、それじゃあね。」

「ああ」

彼女は何が良いんだ？

まったく、いいたことはもつとはつきり言つて欲しいよ。

「……………最後に一つだけ言つて置くわ。

誰かに好かれるには他人に嫌われる覚悟が必要よ。それが出来ないで、表面上だけ他人に合わせるあなたは何時まで経つても一人ぼっちよ」

「…そっか、肝に銘じておくよ」

未裏さんは立ち去る前に一度振り返つて俺に忠告のような真似をしていった。

正直、彼女が何を言いたいのか全く分からなかったよ。

☆☆☆

まつ、そんな一幕もあつたけど、気を取り直して、皆に謝り終えたぞおお！

やつた〜

いやはや、これでようやく、毒ノ森班も完全復活☆

つて感じだね。

いや、一時は冷や冷やしたけど、皆メンタル持ち返したと思うし、後はどうやって癒羽希さんを剣風さんのパーティーに入れるかだよ。

ムムム、と唸りながらも俺たちはダンジョンに向かう。

悩みどころだよ。

はてさてどうすれば良いんだろう？

説得は出来なかったし、今は取り敢えずタイミングを探す以外に無いか。

絆を深めていけばいずれは心を開いてくれるかもしれないしね。

『……………最後に一つだけ言っておくわ。』

誰かに好かれるには他人に嫌われる覚悟が必要よ。それが出来ないで、表面上だけ他人に合わせるあなたは何時まで経っても一人ぼっちよ』

未裏さんの言葉がちらつく。

……………ほんと、難しいことを言ってくれる。

俺がそんな風に悩んでいると雑兵級ダンジョンまで着いた。

俺たちが通っている戦人型魔物の雑兵級ダンジョンは学校の直ぐ近くにあるため、実はそんなに遠く無い。

むしろ、ダンジョンのある場所に学校を建てたと言っても良い。

俺たちはそこで少しの間、防人の弧囉子さんを待つ。

とは言っても、弧囉子さんは時間にキツチリしているため、俺たちが到着してから五分くらいでダンジョンの前で落ち合えた。

「おはよう、全員集まっているわね？」

「「「はい」」」

「よろしい、では今日もダンジョンに潜るわ。」

ただ、その前にあなた達に伝えて置くことがある。」

「伝えて置くこと、ですか？」

毒ノ森君が俺たちの気持ちを代弁して、疑問を口にした。

「ええ、現在あなた達の通う防人魔法学園の生徒がダンジョンで行方不明になっているわ。しかも、あなた達と同学年の、ね。」

「えっ？ですが、僕たちには防人の方がついていますよね？一体何で……………」

「……………防人の中にも行方不明者が出ているのよ」

「「「えっ？」」」

これは不味い。非常に不味い。

二つ目のイベントが始まった。

『悪食変性・ブラッド・オブ・エボリューション』

主人公たちという百年に一度の天才が同時にこの世界に生まれたことを受け、相手側が取った対抗策の一つ。

いや、元々計画自体は進んでいたから、急遽前倒しになった、と言う方が正しいだろう。

そして、相手が取った新たな策。新たな魔物。

それこそが、今回投入された獣人型の徒大将級魔物、ウエアウルフである。

このウエアウルフは戦闘能力こそ通常の徒大将級と比べれば、数段劣るものの奴が持つ固有魔力波が非常に厄介なのだ。

というか、一連の強化魔物事件は全部こいつが犯人である。

……えっ？

そもそも固有魔力波ってなんだよって？

説明しよう、この世界には二通りの異能が存在する。それこそが魔法と特殊魔力波。

そして、種族もまた進化の過程で、魔法が使えるようになったもの、特殊な魔力波が使えるようになったものに別けられる。

魔法を伝える種族は前にも話した通り、天使、小人、戦人。

特殊魔力波を扱えるのが、鬼人、獣人、そして一部の人間。

魔力波を伝えるものに関して一部の人間と答えたが、これを説明するには魔力波とい



うものについて少々、説明しなくてはならない。

魔力波とはその名の通り魔力の波であると共に、魔力を魔法という形に加工せず外に放出することで、外界に影響を与える技術のことでもある。

この魔力波という技術自体は魔力を持っていれば誰もが扱える。

しかし、殆どの使い手がそよ風を起こす程度しかできないため戦場では殆どや役に立たない技術と言われている。

勿論一流の使い手であれば魔力波を出した場合、草木を揺らすこともあるが、そんなのはごく一部だ。

魔法を使える種族は勿論、魔力を持つについても魔法は扱えない種族からしても無用の長物だった。

しかし、魔法を扱えない種族が過酷な自然界を生き抜くには何らかの武器が必要だった。

他の獣たちを打ち倒せるような武器が。

そんな中、魔法を扱えない種族はこの無用の長物と化していた魔力と言うエネルギー、そして魔力波と呼ばれる技術を変質、進化させることで自然界を生き抜いた。

人間もその種族の一つだ。

ただ、魔法が使えない他の種族が住む世界と比べ、人間界は資源に富んでいた。

そのため、時代が進むにつれ魔力波や魔力と言った厳しい世界で生き抜く術は徐々に失われていった。

勿論、資源に富んでいたからといって、争いが全くなかった訳ではない。

人間同士での争い、他世界にいる別の種族たちからの侵略。

脅威はあった。ただ、人には科学があった。

また、それを発展させ、魔法すら解明してみせた。

そうして、特殊魔力波と言う過酷な世界で生き抜く術は徐々にその意義を失い、不要な機能として切り捨てられた。

ただ、その名残だけは、まだ人の体に残っている。

そして、外から流れ込んでくる穢れた魔力と強い力に対する欲求によつてのみ目覚めることがある。

その人間の願いの一助となる、自分だけの魔力波、固有魔力波を。

因みに、獣人や鬼人は自分だけの固有の魔力波の他に同種族なら誰もが扱える特殊な魔力波もある。

身体強化とか、遠吠えで相手にデバフかけたりとか、色々出来る。

まあ、ごちゃごちゃ言つたけど、詰まる所、種族スキルと固有スキルのなやつ。

で、人間は種族スキルこそ無いけど、固有スキルに目覚める奴がいるよつて感じ。

更に言うところ、この章のボスとなる獣人型の魔物には噛みついた魔物にレベルアップの機能を与える、という魔力波が宿っている。

勿論、俺たちの抵抗<sup>レベルアップ</sup>力上昇とは少し違う。

噛まれた魔物は魔力持ちを食らうことによつて力を増すのだ。

つまり、人を食らえば食らうほど強くなる。

不幸中の幸いとして魔物同士で食い合うことはしない。

魔物の絶対数を減らしたくないから。

とは言え、それでも十分脅威、いや、食い合つて強化されるより絶対数が多い分、俺達、防人の卵や未熟な防人たちからすればこつちの方が脅威だ。

「……………みんな、気を引き締めていこう」

毒ノ森君の言葉に俺たちはコクリと頷く。

強化された魔物は本来の等級よりも強い、それどころか雑兵級の魔物が足軽大將級に片足突っ込んでいても何ら不思議ではない。

絶対に油断してはいけない相手だ。

俺はそのことを胸に刻み、何時もより慎重にダンジョンに入った。

それから、暫くたった。

うむ、今のところ異常はない。

まだ、レベルアップ可能な敵もそこまで増えていないようだ。

通常の雑兵級の魔物を俺たちはいつも通り、処理してく。

いつも通りの強さの敵に他のメンバーも幾分か表情が柔らかくなっている。

まあ、当然だよな。強力な防人すら殺す、じゃなかった。

ゴホン、ゴホン。

強力な防人も行方不明になっているって言われてガツチガチになってたもんね。

超強力な魔物が徘徊してると思っていたら、思った以上にいつも通りで拍子抜けし

ちゃうよね。

「今のところはいつも通りだよな」

「ああ、だが、何があるか分からない気を引き締めていこう」

毒ノ森君は気が緩みかけた柵加君にそう告げる。

………確かに、声に出したのは柵加君だったけど俺も気が緩んでいた。

命大切っていうからにはこう言う所で油断しちゃいけないよな。

気を引き締めなおさないと。

「前方、敵が来るわよ。」

俺が気を引き締めなおしたタイミングで未裏さんが敵影を発見する。

俺は武器をしつかりと握る。

敵の手には魔力塊が浮かぶ。

雑兵級の魔物が覚えている魔法、魔法弾だ。

「「マナシールド」」

俺と毒ノ森君、未裏さんが《マナシールド》を展開し、敵の攻撃を防ぐ。

こういった場合は基本的に防御魔法士が単体で結界を張ることが多いのだが、うちでは前衛の魔剣士と防御魔法士のどちらもシールドの展開を行う。

勿論、この方法では効率良く狩りをすることはできない。

ただ、効率よりも安全をとっているうちのパーティーでは敢えてこの方法を取っている。

「奴の動きを止めるぞ。音長君」

「了解」

俺と毒ノ森君は突っ込んでくる敵の前に立ちはだかる。

そして、剣でもって奴の拳を受けようとする。

『ガキン』

俺と毒ノ森君の剣は敵が魔法で生み出した二本の剣によって防がれてしまう。

「なに？」

あり得ない。

雑兵級が使ってくる魔法は魔法弾のみ、他の魔法は使っていない。

なのに、何故敵は別の魔法を使える!!

それだけじゃない。魔法弾を放つてからのインターバルが短すぎる。

普通の魔物じゃない！

「弧囃子さんー！」

「分かってる」

俺は弧囃子に助けを求める。

確実にこいつは強化種だ。

間違っても俺達、見習いが相手をしていい敵じゃない。

弧囃子さんも瞬時にそれを判断し、敵に突っ込む。

これで終わりだ。

いくら強くても上位の防人である弧囃子さん相手は分が悪いと判断し逃げ出すはず。

逃げ出さなかったとしても、弧囃子さんレベルの防人に癒羽希さんのバフが乗れば絶

対に勝てる。

俺はそう考えていた。

敵は問題なく倒されると、だけど、俺がそう思った瞬間、敵は笑った。

そして、スツとその場から消える。

いや沈んだ。この魔法は!!

「シャドーモールです!全員警戒」

俺の言葉に緊張が走る。

そして、お互い背中を合わせる。

幸い、《シャドーモール》という魔法は発動中に移動速度が遅くなり、何より発動中は息が出来ない。

弧灘子さんなら、直ぐにこちらに来れる筈だ。

「つがあア」

ただ、その予想は外れる。

棚加君の足を魔物の手が掴んだのだ。

「うわああああああ、助けて、助けてええええつえええ!!」

「《マジックブースト》」

「《フレイルムショット》」

「《アクアアロー》」

「《ストーンニードル》」

棚加君の叫び声を受け、癒羽希さんが未裏さんに魔法強化のバフをかけ、未裏さんはその場で、俺達は棚加君の下に駆け寄りながら、攻撃魔法を放つ。

それにより、地面が揺れ、魔物の苦しむ声が聞こえるが、マジックチップを変える手間を考えるとどうにも間に合いそうにない。

せめて、近くに攻撃魔法士がいれば、魔物の潜伏する影を攻撃し、棚加君を解放させられるのだが、肝心の攻撃魔法士である棚加君があつた状況だと手の打ちようがない。

というか、本来この状況はあり得ない。《シャドーモール》を使った際は速度が落ちる。

なのに、全く、落ちていない。

可能性は二つ、一つは敵の速度が俺の想像以上に速い場合、もう一つは

「弧隼子さんッ！気を付けて」

俺は後ろを振り向きながらそう言うが、弧隼子さんには聞こえていないのか尚も血相を変えてこちらに走り寄る。

だから、対応できなかつた。

このタイミングを虎視眈々と狙っていた背後から出てくる、強化種に。

そして、弧隼子さんは後ろから胸を二本の剣で刺し貫れた。

「撤退だ」



俺は足を止め皆に告げる。もう勝ち目はない。

逃げる以外に方法は、もうない。

「いえ、戦いましょう！ 棚加君はまだ生きてる。生きてるんだったら、戦うべきよ！」

涙を瞳に貯めながら未裏さんは戦うことを進言する。

こうなつてくると後は毒ノ森君の判断次第だ。

俺と未裏さんは毒ノ森君に視線を向ける。

毒ノ森君は刺された弧囃子さん、既に右手を残して全身を影に吞まれた棚加君に視線を向ける。

「……………撤退だ」

その言葉に俺は頷き、未裏さんは項垂れるように俯く。

癒羽希さんはまるで現実を受け入れられていないように呆然とそれを眺める。

俺たちの心は、志は完全にバラバラになつていた。なつていたが、バラバラであつても俺たちは何とかダンジョンから脱出することが出来た。

いや、恐らく、棚加君と弧囃子さんを手に入れたため、十分と判断され、見逃されただけだろう。

所詮、奴らからすれば見習いの防人なんて何時でも捕食できる相手なのだから。

# 反省も後悔も大切だけど、そういつたことが許されない 状況もある

☆☆☆

ダンジョンを出た俺たちは喋ることもなく、学校へ向かって歩く。

誰も喋る気力なんてなかった。話せる精神状態ではなかった。

俯きながら、無力感に苛まれながら、歩いていった。

それは俺とて同じだ。

俺は所詮、只の端役<sup>モブ</sup>、皆を守れる英雄ではない。

そんなことは分かっていた。分かっているにしても、歯がゆかった。

それに、実感が伴っていないかった。今までなんやかんやで上手くいっていたから。

作者であり、物語の創造主という驕りがあった。

でも、なんてことは無い。俺は神じゃないのだ。

この世界の住人になっている今、俺はちっぽけな防人候補生でしかない。

人は死ぬ。物語を作っている時、当たり前のように端役<sup>モブ</sup>が被害に遭っていた。

犠牲になっていた。

物語を引き立てるスパイスとして。

そして、物語のように端役<sup>モブ</sup>たちが今日もまた犠牲にあつた。

棚加君が捕まり、弧離<sup>モブ</sup>子さんが死んだ。

それはとても悲しい事だ。

棚加君と過ごした何気ない日常が昨日のことのように思い出せる。

弧離<sup>モブ</sup>子さんが教えてくれたことが脳裏をよぎる。

でも、それ以上に、俺は自分が死ぬことが怖い。

体の震えを抑えられない。

やっぱり俺は物語の主人公のように慣れない。

肉体に宿る才能だけじゃない。

仲間に対する想い、恐怖を抑え込む勇氣、味方を鼓舞するカリスマ。

俺は何一つ持ち合わせていなかった。

結局、心の中で他人に対し優位を取ろうとする、浅ましく醜い心の持ち主は、只、物

語を引き立てる端役に戻るのが相応しかったのだろう。

いや……………もしそうなら、一番最初に死ぬべきだったのは俺であるべきではない

のか？

端役<sup>モブ</sup>であるにも関わらず、その在り方から脱却しようとした身の程<sup>この</sup>知らず<sup>おれ</sup>が死ぬべき

だ。

だったら、これは運命の強制力なんかじゃない、魔物の悪意が原因だ。勘違いしちや駄目だ。何かを為すのは意思の力だ。

神様でも運命でもない。

人が死ぬのも、人が生かされるのもそれは誰かの意思によるものだ。

もしくは、観測できる道理の上で成り立っている必然だ。

目にも見えず、抗うことも叶わない理外の力なんかじゃない。

現実として、俺は生きている。

なら、まだ足掻こう

足掻けば、それは仮定として現れる。

下を向くのはやめよう、未来に怯えるのはやめよう。

だって、俺は死にたくない。出来れば今いる皆にも死んで欲しくない。

その想いは今も変わっていないのだから。

俺はしっかりと前を見据える。

未裏さんは俯き、涙を流していた。

癒羽希さんは震える体を必死に手で押さえていた。

毒ノ森君も唇を咬み、手を強く握りしめていた。

みんな、今回の件で心に傷を負ったのだろう。

俺だけじゃない。それが分かった。

それも、きっと俺よりも深い、深い、傷を負った筈だ。

俺は毒ノ森君の肩を叩く。

「……………どうしたんだい？」

「着いたよ、学校」

そう、既に学校の目の前までついていた。

俺も含め、只々、ぼうつと歩いてきたため、気づくことが出来なかったのだ。

「……………ああ、そうか。じゃあ、取り敢えず今回の件を学園長に報告しないとな」

毒ノ森君は幽鬼のように、ふらふらと事務を指す。

うちの学校では死者が出た場合は生徒自ら学園長に報告する義務がある。

これは死亡者の連絡の際に間違った情報が流れないようにするためと、学園側は死者が出る現在の状況を重く考えている、と外部に示すための演出だ。

まあ、演出とは言っても、現在の状況を軽く見ているわけでは無い。

だからこそ、腕の立つ防人を派遣しているわけだし。

ただ、それと同時に学園側は多少の犠牲はやむを得ないとも考えている。

いや、国がそう考えている。

だからこそ、学生の内からダンジョンなんて命がけの場所に潜らせる。

現実問題として、そこまでしないと人間は魔物に太刀打ちできないから国が悪いとも言えないけど。

ただ、心ここに非ず、と言った様子の毒ノ森君を見ると心配になってくる。

そのため、面会の手続きに関しては俺が代わりにおこなった

いくら、死者の報告と言う重大な話とは言つても学園長という役職上多忙になってしまつたため、面会できるまでには時間が必要だと考えていたのだが、流星、と言うべきかそれから五分と経たず、学園長の下に通された。

学園長室は木材を使った非常に重厚感のある部屋であり、ソファには白髪の男が座っている。

男は白髪であることからかなり高齢であるだろうに、その体は今も現役であると言いたげな程遅しかった。何よりもその顔には無数に傷があり、歴戦の戦士であると否が応でも理解させられる。

「……………ふむ。まずはお疲れ、つと言つて置こう。」

「……………いえ」

毒ノ森君は学園長を目の前にしても、尚、弱弱い様子を隠そうとはしない。いや出来ないでいた。

学園長にもそれが分かったのか、俺たちを見回し、ピタリと俺で視線を止める。

「分かった、済まなかったな。君は少し休んでいてくれ。それで、代わりにその君、名前は何？」

「音長盆多です」

「分かった。何が起こったか教えてくれるか？」

「はい、俺たちは雑兵級ダンジョンに潜っていたのですが、そこに《シャドーモール》を使う魔物が二体現れました。また、一体に関しては《創剣》も使用していました。」

とはいえ、魔物たちが二体同時に襲ってきたわけでは無いです。接敵時は一体だけが俺たちの前に姿を現し、もう一体は《シャドーモール》で潜伏していたようです。」

「ふむ、では片方が囷として君たちの前に現れた、ということか？」

「はい、初めに姿を現した敵は俺と毒ノ森君が抑えにいったのですが、敵が《創剣》を使った時点で雑兵級でないと判断したため俺たちは担当防人の方に助けを求めました。」

「……悪くない判断だな。」

「ありがとうございます。しかし、相手はそれが狙いだったよう担当防人の方が俺た

ちの下に辿り着いた時点で《シャドーモール》を発動し、陰に潜伏。我々が潜伏した魔物を警戒した所で、初めから潜伏していた別の個体が柵加君……うちの攻撃魔法士の体を影に引きずり込みにかかりました。

そして、それを見ていた担当防人は自分の目の前で《シャドーモール》を使った個体が攻撃魔法士を引きずり込もうとしていると誤認し、いえ、誤認させられ、が正しいのでしょうか。……そうして、誤認させられたことによつて背後への注意が疎かになり、無防備な背中から一突きされ、死亡しました。攻撃魔法士に関しても、助けようとはしたのですが………残念ながら」

「……分かった。

君たちのお陰で最近の行方不明騒動に関して色々分かった。

今日はゆっくり休むといい。」

俺たちは頭を下げると学園長室を出る。

そして、今日はもう流れ解散かと思ったとき、未裏さんが俺の胸倉を掴む。

「……………ねえ。何であんたは平気そうなの？」

仲間が死んだのよ？悲しくないの？」

「悲しいよ。……………ただ、悲しんでばかりもいられないだけだ。」

「あんたはツ!!そうやって直ぐ上っ面の言葉を吐く。本当はどう考えてるよ。何考えて



るのよッ!!

いえ、当ててあげる。あんたは仲間のことなんて考えてない。仲間の死なんてどうでもいいんでしょ? じゃなきや可笑しいわよッ!!

動揺一つ見せずに撤退を選択し、さっきだって淡々と報告を行った!!」

「それは、それが必要だったただけだ……………」

「…………それよ、あんた、必要なら機械にでもなるわけ? そんな訳無いでしょ?

人間なんだからッ!! 必要だからって出来るわけないッ!!」

「…………やめろ、音長君を責めても何も変わらない」

「…………それは」

「…………みんな疲れてるんだ。今日はここで解散としよう。」

毒ノ森君はそう言うとその場を歩き去ってしまう。

そして、俺達もその場で各々の寮へと帰っていく。

帰る際に未裏さんには睨まれたが、彼女も今日のことですべて不安定になってしまったのだ

ろう。

きつと、休めば良くなる。

良くなるはずだ。

皆の精神も俺たちの関係も。

## ☆☆☆

あれから俺たちは新しいメンバーと担当防人が決まるまで自主訓練を言い渡された。ダンジョンは非常に危険な場所であるため、当然と言えば当然だろう。

とはいえ、不幸中の幸いと言えるかと言われれば微妙だ。

それは毒ノ森君たちの精神面もあるが何よりも……………。

「あいつら、癒羽希さんに面倒見て貰ってるのに班員に死人出したらしいぜ？」

「ええっ？こわい。まあ、癒羽希さん以外大したことないんだから当然よね。」

前よりもやつかみの量は減ったが、それでも時折こういふ奴は現れる。

因みに量が減った理由は生徒自体が物理的に消えたからだ。

「そう言えば、死んだ奴って誰なんだろうな？」

「あく、棚加よ、棚加。あいつって女子に目が無くてちよつときもかったのよね。」

わたしも、何だか、性的な目で見られてた気がするし〜

「おいおい、安心しろ俺が守ってやるからっ、ともういないんだつたな。ははははは」

そう言つて笑いあう男女の組を俺は無視して歩き続ける。

しかし、隣にいた毒ノ森君はピタリと足を止めた。

そして、笑いあう男女の組の前で足を止めると、思いつきり拳を振りぬいた。

「ヴォハッ!!」

「きやああああ、あんた何すんのよ!!」

男が殴り飛ばす。それを目のあたりにした女は悲鳴を上げ、抗議をするも毒ノ森君の拳により吹き飛ばされる。

しかし、それでも毒ノ森君は止まらなかつた。

起き上がり殴り返そうとする男の腕を受け止め、一度引いてから再度押すことで相手のバランスを崩し、片足が浮いたところで地面に着いたままの足を払う。

そして、綺麗に転んだところにマウントを取り両手で交互に両頬を殴る。

それを見ていた女も初めは止めようとしていたが、毒ノ森君が止めようとした女を再度殴つたことで恐れをなしたのか、只々呆然と見ていた。

俺もこんな怖い毒ノ森君見たことが無くて止めることが出来ず、その場で立ち尽くしていた。

……………いや、マジで怖かつた。

完全に顔が般若のそれだった。

そんな混沌とした状況を止めたのは、その場を通りかかった教師だった。

「おいっ！お前たち何をしている」

教師に見つかつてからは早かつた。

あれよあれよと俺たちは何故か学園長の下まで連れていかれたのだ。

学園長は自前の顎髭に撫でながら鋭い視線をこちらに向けてくる。

「……うか、めつちや手入れされてるな、その顎髭。」

「……………毒ノ森班、一つ聞きたいんだが……………俺はお前たちに自主訓練を命じた筈だが、お前らにとっての自主訓練ってのは同胞を殴ることだったのか？」

「……………。」

「……………いえ、相手がこちらの仲間を侮辱してきたので殴ったまでのことです。不和を持ち込む人間の方が組織にとって有害だと判断したのですが？」

俯き続ける毒ノ森君に変わり俺は学園長に反論をする。

「成程な、だが、そこでボコボコの顔を晒してる奴らもオレ達からすりや、大切な生徒であり、未来の防人だ。その辺分かってんのか？」

「……………はあ、ならその防人が組織の害になる前で良かったじゃないですか。」

「ほら？俺たちは防人とかいう血生臭い職業に就くことが決まっていますし、むしろ、拳で語っているぐらいが健全じゃないですか？」

「あのなあ、てめえの考え方はふりいんだよ。今は生徒を大切に大切に育てるってのが潮流だぜ？」

「……………黙れよ」

俺と学園長が言いあっていると、俯いていた毒ノ森君が口を開いた。

しかも、地獄の底から聞こえているかのようなとても低い声で。

いや、低いっていか怖い声で。

学園長はその声に少しだけ口角を上げる。

いや、何が面白いんだよ！

「あ？何だつて？聞こえねえよ」

「……………うるせえつつつてんだよ!!さつきから聞いてれば体裁だけ整えやがって、何が今は生徒を大切にだよ!!」

なら、コソコソ言ってくる奴をまず黙らせるよツ!!ダンジョンなんて危険な場所に生徒を放り込むじゃねえよツ!!

昨日だって、仲間が死んで間もないのに平然と現状の報告とか頼んでたじゃねえかツ!!この狸爺がツ!!てめえの息の根から止めてやろうか!!」

そう言う毒ノ森君は学園長に殴りかかった。

うん、止める暇すらなかった。

あの学園長死んだわ。

俺はそう思っていたのだが、学園長はパシッと毒ノ森君の拳を止める。

そして、上機嫌そうに歯を?き出しに笑う。

「あつはつはつは。いいなあ、お前、最近の甘つたれたガキよりもその賢しいガキより

もよつぽどいい!! 根性入ってんじやねえか!!」

学園長は甘つたれたの部分でボコボコされた二人をちらりと見、賢しいの部分で俺の方をちらりと見た。

俺ってそんなに賢しいかな?

普通に愚直に頑張ってるだけなのに……………。

ちよつとシヨック

「いやあ、今日は良い日だ。うん、今回のことは水に流そう。

その賢しいガキが言ってみたみたいに拳で語らねえと伝わらねえこともある。

俺達、防人は特になつ! つーわけで解散!!」

そう言う俺たちは学園長を追い出された。それでも毒ノ森君は学園長に殴りかかろうとしていたから、俺は必死に毒ノ森君を寮まで引きずった。

というか、この後、授業が無いから良かったけど授業があつたら、このバーサーク状態を受けたのだろうか?

……………普通に死人が出そう。

俺でさえ手負いの獣みたいで怖かったのに。

ふう。

まあ、そんなこともありつつ、部屋に着いたら流石におとなしくなってくれたので俺は自分を癒すため甘いものを買いに売店に向かう。

売店では相変わらず、ピーマンの被り物が売り切れの状態だった。

というか、あの後、学園内で前代未聞のピーマンブームが巻き起こり、ピーマンは死地に赴く際の生還の御守りとして崇められるようになったらしい。

いや、マジか。

まあ、ピーマンの被り物しても正体がバレずらくなつたし、別にいいか。

「はい、お会計、950円だよ。にしても、そんなお菓子ばかりかって、ちゃんとも食べるんだよ?」

「はいよ〜」

俺は心配する売店のおばちゃんの言葉に返事を返すと、再度、男子寮へと引き返す。

売店自体は、四階に存在するため、校門までの道が見える窓も存在する。

俺は何気なく、それを眺める。

やつぱり、いるのかな?

学校抜け出して逢引きとかしてる奴。

ちよつと、まあそう言った下世話な好奇心もあった。





モブはモブなりに頑張ってるんです……………。

☆☆☆

私が攻撃魔法を使っていたら、棚加君だけでも救えたのではないか？

その考えがグルグルと頭を巡る中、私の耳にとある話が入ってきた。

その話は毒ノ森君と音長君が他の生徒に暴力を振るつた、というものだった。

それもつい先ほど。

あくまでも寮の談話室で話している女子生徒の話が偶々入ってきただけなので詳しいことまでは分からなかった。

ただ、毒ノ森君と音長君がそんなことをする人じゃないと私は知っている。

毒ノ森君は仲間を大切にし、他人を尊重し、どんな時でも周りを気にかけてくれていたのだ。

音長君は初めこそ厳しい人なのかと思っていたけど、話してみればとても気さくで、気づつかいの出来る人だった。

感情が表情に出ずらいから未裏さんを含め、勘違いされちゃうこともあるけど、音長君もすつごく良い人。

ココアを貰った日に、音長君の本心を聞いた日に、私はその確信を深めた。だから、真実を確かめに学園長の下まで足を運ぶことにした。

手続きは不慣れだったから、かなり時間は要したけど、待ち時間自体は少なく私は無事に学園長に会うことが出来た。

学園長はとつても怖そうな、ムキムキのお爺さんだ。

「つたく、お前たちは俺のことが好きなのか？ 毒ノ森班。今日だけで三人と対面で話すことになるとはな？」

「すいません。ですが、聞かせてください。毒ノ森君と音長君は本当に他の生徒に暴力をふるったんですか？」

「ああ、そう言ってたぞ」

「……………理由は、毒ノ森君たちはなんて言っていたのですか？」

「あ？ああ、仲間を馬鹿にされたからって言っていたな。」

私は本当に暴力を振るっていたことにショックを受けつつも、ただ、虐げるために振るったわけでは無いと知り、ほっとする。

談話室で噂されていた内容では、とある女子生徒にちよつかいをかけようとした毒ノ森君たちは女子生徒が自分たちを拒絶したことに激怒し、女子生徒を庇った男子生徒ごと暴行を加えた、という風に話が広まっていたのだが、実際はそんなことは無かったよ

うだ。

でも、誰がこんな根も葉もない噂を流したのだろう。

私は思考の海に潜ろうとする。

ただ、潜ろうとした所で、学園長に声を掛けられてしまう。

「そう言えば、俺からお前たち毒ノ森班に聞きたいことがあったんだ。」

「…………聞きたいことですか？ 私が答えられる範囲のことであれば答えますが…………」

「じゃあ、遠慮なく聞かせてもらうが、……………癒羽希、お前の成績を見て気づいたんだが、お前、既に相当の実力だろ？ お前の攻撃魔法でも柵加を助けられなかったのか？」

その言葉に私は言葉を詰まらせる。責められているわけでは無いのに、体が自然と縮こまってしまう。

「……………私は…………補助魔法で援護していたので…………。」

「援護？ 何で援護なんてするんだ？ 他の班員が攻撃魔法を放つよりお前が攻撃魔法を放った方が有効だっただろう、お前ほどの成績であればいざと言う時の攻撃要員として一枚くらいは攻撃魔法をセットしているだろうし……………毒ノ森の采配ミスか？」

「ち、違いますっ！ 私は攻撃魔法が使えないんです。私のせい……………」

私がそう伝えると学園長は得心が言ったとばかりに頷く。どうやら、毒ノ森君たちのせいでは無いと理解してくれたようだ。

「……………成程、じゃあ、結局、毒ノ森のミスじゃねえか」  
「はっ？」

「うん？だつてそうだろう？リーダーつてのは仲間の命を預かる身だ。なら、時には非情にならなきゃいけない時もあるだろ？」

仲間の信念や甘えなんてものよりも大切にしなければねえもんがある。

仲間の命だつたり、一般人の命だつたりとかな？

そんな立場に居ながらアイツはお前の事情を優先した。

克服するんじゃなく、お前の事情を受け止め行動した。

だから、つけが回つてきたんだろ。ま、お前に責任が無いかと言われるとそれも違うがな。」

毒ノ森君は悪く無い。その言葉が喉元まで出かかる。

私何か言われるのは言い、だけど、毒ノ森君のことを悪く言われたくない。

仲間のことを言われるのは我慢ならない。

私は学園長を睨みつける。

ギュツと拳を握る。

「悔しかったら、攻撃魔法を使えるようにしておけ、お前の甘えが仲間を殺すぞ。

つと、流石に生徒にこういうことを言うのは不味いのか？

最近は何んぞくせえんだよなく、こういうところ」

学園長はそれだけ告げると、「帰った帰った」と言い私を学園長室から追い出した。反論したかった。でも、きつと反論しても何の意味もないだろう。

私たちが私たちの選択の末、仲間を失った。

学園長にとってはそれが全てなのだろう。

『悔しかったら、攻撃魔法を使えるようにしておけ、お前の甘えが仲間を殺すぞ。』

見返すなら、私が攻撃魔法を使えるようになれば意味が無い。

それに、毒ノ森君のことは兎も角、私のせいで棚加君が死んだのは事実だ。

……………弧雛子さんも、私が攻撃魔法を使えたら、もしかしたら救えたかもしれない。

私は寮にある自室に帰り、申請はしたもののまだ一度も使ったことのない攻撃魔法のマジックチップを握る。

棚加君たちがいなくなってから、使おうとしたこともあつたけど、結局使うことが出来なかった。

使おうとセットしても最後の一步が踏み出せなかった。

自分が変わってしまうのではないかという恐怖が込み上げてしまって、一步を踏み出せなかった。

でも、仮にダンジョンであれば、ダンジョンで一人であれば最後の一步が踏み出せる

んじゃないだろうか？

私は現在あるマジックチップの中で一人で潜るのに必要なものとお守りとしておばあちやんがくれたものを持ち、ダンジョンへと向かった。

☆☆☆

うゝん、うゝん。

俺は自室でお菓子を食べながら唸っていた。

理由としては、まあ、お察しかも知れないけど、四階の窓から見た癒羽希カルミアの姿だ。

初めは、あれ？逢引きなのでは？

と思っていたんだけど、よくよく考えれば逢引きに杖を持ち出すのはおかしいような気がしてきた。

お菓子だけについて、流石に寒いか。

まあ、勿論、ワンドプレイとかいう高度なことをするのであれば話は変わってきてそうだが、そんなこともないだろう。

多分。

となると、後ありえそうなのはダンジョンってことになるけど、一人でダンジョンに潜ろうとするだろうか？

いや、普通にあり得ないだろう。

一人で入るなんて自殺行為だし、そもそも学校の方で学生はダンジョンに潜る際は教師もしくは担当防人からの許可とパーティーで入ることを規則として定めている。

更に、ダンジョン自体も分厚いドームに覆われており、ダンジョンの管理人にドームのドアを開けてもらう必要がある。

まあ、とは言え、ダンジョンに入る際の確認作業及び開閉は人の手で行われるため、適当に理由をでっち上げてしまえば中に入れないこともない……………。

元々、ドームは中に入る人を止めるためにあるんじゃないやなく、魔物を外に出さないようにするためだし。

いやいやいやいや、ゲームじゃないんだから、入ろうなんてしないよね普通。

ただの恋人とのワンドブレイでしょ！

まー、一応？一応、教師に連絡して、ダンジョンへの立ち入りログを確認してもらおうか。

俺は職員室に向かい、まだ仕事をしている教師の内、知っている顔、というか担任の教師に話しかけることにした。

ふと思っただけけど、教師って何時家帰ってるんだろう？

「すいませ〜ん。ダンジョンログで、うちのパーティーメンバーが潜ってないか確認し

て貰っても良いですか？」

「はあ？お前から自主訓練を言い渡されてただらう？」

「ん、そうなんですけど、さつき、ワンドを持った癒羽希さんが学校から出ていくのを見て……………まあ、独自のコネクションを持っていて、その人から教えを乞うているだけかもしれないが……………」

「あ、成程、分かった。ちよつと見て観るから少し待つてくれるか？」

担当の教師はそう言うとはかのアプリを開く。

いや

何かっていうかダンジョンログが見れるアプリなんだろうけど。

俺がぼおつとその作業を眺めていると、段々と教師の顔から血に気が引いていく。

……………おいおい、まさか

「……………おい。癒羽希の奴、今ダンジョンにいるぞ」

「……………マジですか」

「ああ、大マジだ。取り敢えずお前は待機だ。教師陣と緊急で会議をし、対策を練る」

「了解しました。」

いやいや、マジか。マジなのか？



普通そんなことしないだろ、癒羽希さん！

自殺行為だぞ!!

何で折角生きて帰れたのに、命をドブに捨てるんだ!!

クツソ、教師陣は対策を練るとか言っていたけど、対策を練って対処するまでどれだけ掛かるんだよ！

俺は自室に帰る。

出来ることなんてない。

そのため、俺は特別防人の真道君を頼ることにした。彼はダンジョンに自由に入る権利がある。

俺は真道君の部屋のインターフォンを鳴らす。

……………

鳴らす、鳴らす、鳴らす。

おくい、出てこくい、主人公の役目だぞ。

何度も何度も押したけど、奴は一向に現れることは無かった。

イベント中か？レベリングか？

……………俺に出来ることは本当に無くなった。

無くなったが、出来ることが無いなんて言って癒羽希カルミアが死んだら取り返しが

つかない。

……行くか？

ま、まあ、一人で死地に飛び込む馬鹿に一回説教しなきゃ気が済まないとは思ってた所ではあつたし？ レベルも上がっているからやってやれなくは無いかもだし？

いや、説教をするなら何で一人でダンジョンに潜ったか聞くのが先だな。

俺は近くにあつた赤パプリカの被り物を付け、制服を戦闘用の者に着替え、魔剣を腰に差す。

戦闘用の制服はデザインこそ、通常の者と変わらないが、動きやすさや耐久性が通常のものとは比較にならない。

まったく、何が悲しくて癒羽希さんの後を追って一人でダンジョンに潜らなくてはいけないのか。

俺はそれでもダンジョンに向かう。

命を大切にしない奴に対しては老若男女問わず正拳を食らわす。

魔剣師Pとして。

……いや、やっぱり行きたくねえわ。

行くけどさ。

☆☆☆

何時も通っているダンジョンの前に着く。

ただ、いつもとは違い、ダンジョンの前についてもドームの扉が開くことは無い。それもその筈だ。

いくら制服を着ていてもパプリカの被り物をしている人間を通すことは無いだろう。ただ、俺も中に入れて貰わなくては困る。

「……………中に入れて貰おうか？」

「ん、流石にお前みたいなの審者を入れるのはなあ？」

男は面倒くさそうに対応する。

パプリカの被り物をした不審者を前にしても動じた様子を見せない。

それもその筈で、ダンジョンの管理を任される防人は相当な実力者だ。

それこそ、無冠の兵クラスか、

もしくは防人の中でも上位百人の可能性もある。

ただ、それでも臆するわけには行かない。

「俺にはやるべきことがある。」

「ふうん、どんなこと？人の害になること」

「いや、誓って人類の敵になることは無い。」

「……………そっか、ま、ならいつか」

男はそう言うのと欠伸を嘯み殺しながら開閉ボタンを押してドームのドアを開ける。

いや、適当すぎるだろ!!

もうちよつと、何か、こう何かないの？

俺ももうちよつと色々考えてたんよ？

突っ込まれたことを聞かれた際の躲し方とか。

いや、楽に入れたからいいけど。

にしても、授業の際とか、顔パスで入れたのも実は異常なのでは？

思った以上に怠惰なのではこの管理人。

確かに、ダンジョンで死人が出てても管理人の責任にはならないけど……………。

ま、まあいいや、俺は気持ちを切り替え、ダンジョン内を見渡す。

今の所、敵はいない。

それを確認した俺はその場を走り抜ける。

え？そこは静かに隠密行動をするべきだろって？

いや、隠密行動をしたとしても見つかる時は見つかるから……………。

なら、走って、早期に癒羽希さんを見つけて、連れ戻した方が良い。

そう思っている、目の前に魔物が現れる。

相手も気づいているのか、こちらに手のひらを向けている。

完全に魔法弾の構えだ。

ただ、そんなものは関係ない。

止まったら負け、今はそう言う状況だし、実力的にもそうだ。

だから、

「初見殺しで行かせてもらおう。

《ディレクションナルライト》、それで《モメントアップ》」

俺は初めに指向性のある閃光を浴びせ、相手の視界を遮り次に瞬間的な全能力強化を行う《モメントアップ》を使い更に速力を上げた状況での全力疾走による、一閃を見舞う。

勿論、《モメントアップ》に関しては相手への一閃を見舞える距離で使ったため、その強化は魔剣の一振りにも乗っている。

これにより、相手の首を跳ね飛ばすには行かないまでも致命傷を与え、瘴気が俺の体に吸い寄せられる。

ち、力が溢れる!!

とはもうならないものの心なしか体が軽くなったような、なっていないような気がする。

……………うん、流石にそんな劇的に変わるような相手と戦ったら普通に死んでた。

通常の防人はしよっぱい経験<sup>まも</sup>値への奇襲でなければ一対一では勝てないのだ。

とはいえ、戦いに絶対はないので、マジックチップや状況次第では格上にも勝てるかもしれないが……………。

まあ、運よく勝つても、瘴気によって殺されるだけだろうけど。

世知辛えよ。

それはともかく、敵を倒しても振り返らずに走り続ける。

魔物を斬りつけたことによつて自前の魔力の他に敵の魔力が上乘せされ更に加速する。

また、走り続けながらもマジックチップの交換も忘れない。

構成はさつきと同じ、《ディレクショナルライト》と《モメントアップ》だ。

正直、紙装甲としか言いようがないが、大丈夫!!

止まらなければ魔法弾とか当たらないから。

俺がそう信じ、走っていると道の角から魔物が出てくる。距離的に魔法弾を撃つ前に仕留めるのは無理そうだ。

うん、めっちゃ、引き返したい。

引き返したいが、このまま突つ走つた方が安全な気もする。

この雑兵級ダンジョンの構造は普通に入り組んだ洞窟のような形をしている。

広さとしては横十メートル程。

まあ、運が良ければ避けられないこともない。

俺は覚悟を決める。

初めに《ディレクシヨナルライト》を使い視界を奪う。

これで少しでも安全性を高められた筈だ。

次に、《モメントアップ》を使う。

そして

魔剣を投げた。魔剣は魔物の胸にストンと刺さる。

えっ？完全に避ける流れだろって？

いや、他人の選択に委ねるとか性に合わないからさ。

だったら自分の行動に賭けるね。実際、相手は倒せたし、いいじゃん。

俺は肉体強化が残っている今のうちに走り、刀を抜きに行く。そして再度自らに肉体

強化をかけなおす。

因みに《ディレクシヨナルライト》と《モメントアップ》はこれで品切れだ。

いや、普通こんなネタチップをそんなにくつも持っているわけもないんですよ。だって、パーティーで戦うんだったら、もつと有用なマジックチップ山ほどあるし。

このチップ構成は正直、ソロ専用、しかも、闇討ち限定の。

俺は再度マジックチップを変える。

今度は《シャープネス》と《フィジカルオーガ》だ。

正直、癒羽希さんが使った方が効果が大きいし、めっちゃいいタイピングで魔法をかけてくれるから最近使っていなかったけど、四人パーティーの頃は俺もお世話になっていた《フィジカルオーガ》先輩だ。

後は、切れ味を上昇させる《シャープネス》。

この構成に関しては先程と比べれば幾分か丸い実用性ありの構成だ。

防御面はつて？ 防御に関して……………攻撃こそ最大の防御つてことで。

俺は先程、魔物が出た曲がり角を進むことに決め、走り出す。

それから暫く、うん、二、三分ほど、魔物が出ることは無かったんだが、遂に魔物が俺の前に現れた。

うん、二、三分もと見るべきか、二、三分しかエンカウントしない時間が無かったとみるべきか。



まあ、どっちでも良い。

そんなことより、敵の駆除だ。

残念ながら、距離的に一足で敵に近づくことは出来そうにない。

そして、まあ当たり前であるが、相手は魔法弾を構えている。

うん、さつきと同じ状況だ。

〈ドンっ〉

無慈悲にも相手の魔法弾は放たれてしまう。

当然だ。

目つぶしもしていないのだから。

俺はその攻撃を、斬る。

勿論通常状態では斬れなかった。《フィジカルオーガ》と《シャープネス》を使い、

能力を底上げしたから斬れたのだ。

……………魔法弾を斬るなんてあんまり見ない光景だと思うんだけど、相手は俺が魔法

弾を切ったことに動揺した様子を見せない。

それどころか両手のひらを少しの間隔を開け、合わせる。いや、手のひらと手のひら

が密着していないので合わせているとは言えないか？

まあそんなことは今は重要ではない、重要なのは相手が恐らくであるが、白刃取りを

しようとしていることだろう。

ならば、こちらは速度に特化した突きで応戦しても良いのだが、それでは少々不安だし、俺は飛び蹴りを選択する。

まあ、安牌な判断ではあるだろう。

斬りかかったら、白刃取りのリスクが高く。

突きに関しては、避けられやすい。

なら後は飛び蹴りしかないだろう。

勿論、飛び蹴りをした際に足を掴まれる可能性もゼロではないが、俺の体重に今まで走り続けたことによる速度も乗っているのでそれも難しいだろう。

受けるくらいなら、避ける方が楽だろうし。

俺はそう考え、相手を思いっきり蹴った。

相手としては俺が飛び蹴りを仕掛けるとは思っていなかったのか、思いつきり吹き飛ばされる。

そして、その隙を俺は見逃さない。

直ぐにマジックチップを取り換え、《アクアバインド》と《シャープネス》をセットする。

そして、直ぐに《アクアバインド》を発動し、動きを鈍らせる。

《アクアバインド》は《スパークバインド》と違い、完全に動きを止めることは出来ないが、耐性を持つものがおらず、更に《スパークバインド》よりも長時間機能する。まあ、その性質上、《アクアバインド》を使っても普通に殴り殺される可能性があるんだけど……………。

ただ、今回に関しては《シャープネス》と《フィジカルオーガ》の効果がまだ持続しているので大丈夫。

《モメントアップ》よりも効果は弱い（癒羽希さんのものを除く）が《フィジカルオーガ》は効果時間がモメントアップよりは長いという特徴がある。

まあ、一般的な長さなだけけど。

いや、そんなことはどうでもいい、俺は動きが鈍った（自前の肉体強化だけの俺と同じくらい）魔物を一刀両断する。

ふう、雑兵級恐れるに足らず。

ドヤア

ゴールが近くなると難易度が上がるのは主人公だけで良くない？

ふう、雑兵級恐れるに足らず。ドヤア

俺は空になった《アクアバインド》を抜き、《フィジカルオーガ》をセットする。

因みに、残りのチップは二十六。《フィジカルオーガ》が六、《マナシールド》が四、《アクアバインド》が四、《シャープネス》が七、《アクセラレーター》が五

多いと見るか少ないと見るかは人それぞれだけど、これ以上は持てなかった。

一応戦闘用の制服だから、マジックチップを入れるためのポケットも結構あるんだけど、パーティーで戦うことを前提としているから、これ以上は逆に邪魔になると考えたのだろう。

実際パーティーで戦うなら十分な量だし………ソロで戦うには正直少ないけど。私はそう感じました。

だって、一人倒すのに二つから三つ使っている。

つまり、単純計算で後9回の戦いでマジックチップが尽きるということだ。

二、三分に一回はエンカウントするのに、これじゃあ約三十分しか搜索できない。

しかも、片道切符という前提で。

ヤバ過ぎでしょ。

一応、闇雲に探すんじゃないなくて、魔物とエンカウントした道を選んで進んでるけど、果たして、癒羽希さんに会えるかどうか……………。

完全に運だ。

ついでに二体以上の魔物に追われたら詰む。

そう詰むのだ。

だから、こつち見ないで？

十字路を横断しようとしていた魔物が横断中に横、まあ俺の方を向き、ぴたつと動きを止めた。

二体同時に、仲良しかよ。

俺は即座に《フィジカルオーガ》を使用し、肉体を強化する。

相手は二体とも手をかざし魔力弾を用意する。

まあ、俺の予想だとこれは恐らく時間差撃ちだと思う。

なんてたつて凄いだと思つた所に魔法弾をぶち込むのが奴らの基本戦術だ。

だからこそ、俺は一撃目を《シャーブネス》を使い、斬つた。

そして、二撃目を受け流す。勿論、完全に受け流すことは出来ないが、それでも前の

時のように車にはねられたかのような状態にはならない。

多少バランスを崩しながらも、何とか堪える。

ただ、相手は残念ながら俺がバランスを整えるまで待つてくれず、接近し殴りかかってくる。

俺はバランスを崩しながらも相手の頸動脈を狙いながら魔剣を振るう。

相手はその攻撃をたいしたことが無いと判断したのか構わず殴りかかってくる。

これもまた、魔物の厄介な所だ。

自らを省みず敵を倒すことだけに全力を尽くす。

しかし、今回はそれが仇となる。

先程も言ったが、《モメントアップ》などの瞬間強化を除けば基本的にバフの効果はそこそこの時間続く。《シャープネス》もその例に漏れず効果は今もなお持続している。

だからこそ、この苦し紛れのように見える攻撃にも十分な脅威があったのだ。

それを、相手は気づかなかった。

俺が二撃目を斬るのではなく、受け流したから、選択を誤ったのだろう。

…まあ、もしかしたら普通にこちらを侮っていただけかもしれないが。

俺は一体目を半不意打ち気味に倒しながらバランスを整え、二体目と向かい合う。しかし、流石と言うべきか、二体目は多少こちらを警戒したのか、間合いを取り、様子を見る。

俺はその魔物の目の前でこれ見よがしに空になったチップを抜く。

相手はこちらがチップを交換しようとしていると察したのか、攻撃を加えようと間合いを詰めてくる。

勿論、出来るのならチップを交換したかったが出来ないのならばいい。

俺は抜いたチップを敵に投げつける。

相手はそれを咄嗟に右手でキャッチしてみせた。

そのため、更に魔剣も投げつける。

魔物は魔剣に関しても先ほどの要領で反射的に左手でキャッチしようとし、指が切り落とされる。

更そこから、地面に落ちる前に魔剣の柄を蹴り、相手の体に突きさす。

相手が動揺してくれたため、思った以上に綺麗に刺すことが出来た。

しかし、刺された魔物も最後っ屁とばかりに右手に持っていたマジックチップを投げつけてくる。

それにより、左肩とわき腹辺りに鈍い痛みが走る。

「ゴフツ!!」

ただ、戦闘にはまだそれほど支障はない。

俺は再度走り出す。

魔物が向かおうとしていた方角に向かつて。

走って、走って、はし、いや、そんな走れなかつたわ。

何故なら、敵が俺の走る進路上にいたからだ。数は三体

とはいえ、今回は俺に背中を向けている状態だった。

そのため、まずは《フィジカルオーガ》《シャープネス》を使い自らを強化し、空になったマジックチップを抜いて《アクセラレーター》と《アクアバインド》をセットする。

そして、後ろを向いている敵目掛けて《アクアバインド》を使いながら、接近する。

これが、真道君とかであれば三体の敵を一枚のチップで拘束できたのだろうが、俺は一体を拘束するので精一杯だ。

しかも、《アクアバインド》では完全に動きを止めることは出来ないため、その拘束した一体ですら、ゆっくりとこちらを振り向く。

それでも、奇襲であるため、こちらが圧倒的に有利、俺はそう考えていたのだが、俺はふとあることに気づく。



そのあることとは、奴らが、右手を隠しながら歩いているということだ。

そして、あちらが俺に気づき振り返ると共にその理由が分かった。

うん、右手に魔法弾を用意していたらしい。

詰まる所相手は俺の奇襲に気づいており、逆に俺を返り討ちにするため、魔法弾を用意し、待ち構えていたのだろう。

彼らの辞書に正々堂々という文字はないのだろうか？

勿論、俺の心の中の悪態なんて知ったこつちやない魔物たちはそのまま魔法を三連射する。勿論これも多少の時間差をつけてだ。

とはいえ、通常時ならいざ知らず、自らのバフをかけている俺は魔法弾を斬ることが出来るため、そこまで問題にはならない。

俺は三発の魔法弾を飛んでくる順に斬っていく。

ただ、俺が魔法を斬り終える頃には、三体の魔物は俺に肉薄してきており、このままではどう考えても対処は不可能。

そのため、俺は《アクセラレーター》を発動する。

この魔法はその名の通り自分の肉体を加速させる付与魔法だ。

これにより、敵の動きが途端にゆっくりとなる。いや、俺の意識と肉体が加速し、敵の動きがゆっくりになったように感じるのだ。

ゆつくりと俺に肉薄する魔物を一体ずつ処理する。

掴みかかろうとした魔物はその手を切り落としてから、返す刀で首も跳ね飛ばす。

後ろに控え、蹴りを見舞おうとしてきた魔物は逆に蹴りの為に上がった足を足場にジャンプし、すれ違いざまに頸動脈を斬る。

最後に一番後ろにいた魔物に関しては、喉を一突きし絶命させる。

三体の魔物との戦いは一瞬で終わった。

それと同時に《アクセラレーター》の魔法が解ける。

「っはあ、はあ」

体が鉛のように重い、体の節々が痛い。

脂汗が頬を伝う。恐らく骨に罅が入っているのだろう。

筋繊維に関してもかなりやられている。これは筋肉痛不可避だろう。

今の俺の状況から分かる通り、この《アクセラレーター》と言う魔法はとんでもない欠陥魔法だ。

通常の付与魔法は必ず、強化率に応じて肉体の強度も引き上げ、体への負担を減らすように作られている。

それは瞬間強化の代名詞である《モメントアップ》も同様だ。

しかし、この《アクセラレーター》にはそれが無い。

只々、速度だけを追求した魔法。しかも、《モメントアップ》同様、瞬間強化型の付与魔法であることが更に質の悪さを加速させる。

《アクセラレーター》だけに。

………まあ、冗談は置いておいて、《アクセラレーター》は言わば魔剣士の中では  
禁じ手に近い。

どうしても、倒さなければいけない敵が現れたときのジョーカー。

通常、自分よりも強い魔物が相手であり、更に周りに回復魔法士がいる時だけ使われることがある魔法だ。

因みに、魔物などにつけられた外傷ではなく、体を無理やりに動かすことよって起こる自傷であるため、回復魔法が専門でない防人が回復魔法のマジックチップで治すの  
おすすめできない。

実際に以前、自分で治そうとした魔剣士の骨が変な風にくつついたという事件があった  
そうだ。

何それ怖い。

そのため、俺も回復用のマジックチップは持ってきていない。

一応、体は問題なく動くから、良いよね。魔力持ちは体頑丈だし。

俺は敵を倒した後、マジックチップを交換し、再度走り出す。

どうにか、癒羽希さんの下まで辿り着きたいんだけど……。

こちら辺は敵が多い。

まあ、敵が多い場所の方が、癒羽希さんに会える可能性は高いんだけど、それにして  
も多すぎて、癒羽希さんの下に辿り着くまでに死ぬんじゃないかと思えてきた。

俺がそう思っていると、目の前にT字路が現れる。

左と右どっちに行くべきか、そんな風に悩む暇すら与えられず、右の道から魔物が現れる。

数は五体。

どう考えても多い。

というか、別に俺のことなんて気にせず真つすぐ進んでくれていいのに、敵は俺に気づくとこちらに腕を向けてくる。

俺はそいつらに《アクセラレーター》を使い接近する。

《フィジカルオーガ》と《シャープネス》に関してはまだ切れてないので、新しく使う必要性はない。

うん、付与魔法の効果が持続するとは言っても普通、次のエンカウントまで持たんだろ？

どんだけ敵多いんだよ。

俺はそう思いつつ、ゆっくりと動く敵に突っ込む。

勿論奴らは挨拶代わりに魔法弾を撃とうとしてくるが今回は俺の対応の方が早く、敵の腕を切り落とし、その腕を拾い敵の魔法弾目掛けてこちら（魔物の腕）の魔法弾を発射する。

奴らの魔法弾は手を起点にして発動するので、発射ぎりぎりに腕を斬るとこういう風に見えることも出来る。

そして、魔法弾同士が当たり、弾ける。

今回も魔法弾は時間差で飛ばそうとしたため、俺は一番初めに魔法弾飛ばそうとしていた腕を使うことで、相手の掌の前で魔法弾を弾けさせることに成功し、かなりのダメージを与える。

時間差で撃とうなんてしないで、同時に打っていけば、自分の放つ魔法弾から余裕を持って距離を取っていたらどうに、まあ、こういうこともある。

俺は怯んでいる敵に対し、更に追い打ちをかける。

まず、腕を切り落とした魔物の頸動脈を斬り、そのまま、敵の三発目の魔法弾の盾として使う。

更に、盾にした魔物で視覚が出来た所で盾にした魔物ごと二体目の魔物を串刺しにす

る。

そして、即座にマナチップを片方だけ交換し、《アクアバインド》で敵の動きを鈍らせ、真正面から三体目を叩き斬る。

只ここままでだった、ここで《アクセラレーター》の効果は切れたのだ。相手は魔法弾を飛ばしてくる。

しかし、こちらに避けるほどの余裕はない。

だから、使う。もう一度《アクセラレーター》を。

体中が痛いし、重いし、怠いし、気持ち悪いしで最悪だが、これしか方法が無いので仕方がない。

俺は飛んでくる、魔法弾を先ほど斬り伏せた魔物を引き寄せ盾にすることで防ぐ、ここでついでに腕を切り落とすことを忘れない。

別に腕フェチとかではないよ？

そして、盾にした魔物の体を足場に空に飛びあがる。

そこを又もや敵の魔法弾に狙われるが、先ほど切り取った腕を投げつける。

しかし、魔法弾をただの腕の投擲で相殺することが出来ず、腕の方が弾かれる。とはいえ、それは予想済み、弾かれた腕は俺の方に飛んでくる。

俺はそれを足場にし、更に跳躍。

先程も言ったがここは洞窟型のダンジョンだ。

だからこそ、天井が存在する。

俺は二度の跳躍により、天井まで跳ぶと、体を反転させ、天井を足場に急降下し、敵の首を落とす。

更にそこからもう一体に突きを放つ。

相手は咄嗟に後ろに避けるが、俺は最後に魔剣を離す。

これにより敵の喉元に魔剣が刺さり、最後におまけとばかりに掌底で柄を押し込み貫く。

……………五体、倒した。

俺はゆっくりと剣を引き抜く。

そして、時間もいつの間にか元の長さに戻っていた、それをこちらに向かってくる瘴気で察する。

……………正直、ちょっと横になりたい。

俺はその思いを抱きつつ再度走り出す。

きつと、多分、ゴールは近い。

☆☆☆

私は皆と通っていたダンジョンに向かった。

管理人さんにはほんの少しだけ怪しまれたけど既に学校には許可を取っているといい、中に入った。

罪悪感はあるけど、それでも私はもう誰にも死んで欲しくない。そう思っていた。

一人でダンジョンに潜り、命の危機に瀕すれば臆病な私も攻撃魔法が使えるようになるって思っていた。

だけど、手が震える。体が震える。

目の前にいる魔物よりも自分が変わってしまうことを恐れる自分がいる。

私は自分の張った結界の中で縮こまりながら震えていた。

それどころか、自分の身勝手にダンジョンに入ったのに誰かが助けに来てくれるなんて幻想を抱いていた。

いや、毒ノ森君たち皆が助けに来てくれる。そんな都合のいい妄想を、していた。

毒ノ森君に音長君、柵加君、未裏さん、弧囃子さん、皆で私を助けに来て、全部悪い夢で私を助けに来たって笑顔を見せてくれる、そんな都合のいい妄想を抱いていた。

しかし、どれだけ目を凝らしても目の前にいるのは三十を超えるほどの魔物たちだけだった。

私も、死ぬのだろうか？

私の防御魔法は自分で言うのもなんだけど、温実さんを除けば学年一の自身がある。



だけど、マジックチップには限りがあるし、防げる時間はせいぜい五時間かそこらだろう。

私はおばあちゃんがお守りにくれたマジックチップをギュッと握る。

ああ、こんな時でさえ、攻撃魔法ではなく、このマジックチップに縋ってしまう自分が嫌になる。

誰かに頼る浅ましい自分が嫌になる。

自分が変わりたくない、だから、誰かが代わりにやってくれるのを待つ。

何時になったら変わるのだろうか？

だけど、そう思いつつも、攻撃魔法のチップを使う気にはなれなかった。

自分のせいで仲間が守れなかったのに、変わろうとしない自分が嫌になる。

怪物になりたくない。

その思いがどうしても、どうしても、どうしようもなく、私の足を引つ張る。

なら、ここで消えるのも、ありなのかな？

また、毒ノ森君たちが侮辱されるくらいなら、これ以上皆の足を引つ張る位なら、誰かの為に怪物になることを受け入れられない人間は、いない方が良いのかな。

「ごめんね。みんな」

「……………お前はそこで何をしている？癒羽希カルミア」

そう思い、目を閉じようとした時、少し怖い声が耳に入る。

その声は少しだけ音長君に似ていて、私は目を開き、声の方を向く。

そこにはパプリカの被り物をして、血まみれの制服を着た傷だらけの人が立っていた。

うん。

うん？

「……………あ、あの、どちら様でしょうか？」

「……………俺は魔剣師P。取り敢えず、命の重さとか、ダンジョンは一人で入るな、とか、そう言うのを説くものだ」

私は、今、怒られているのだろうか？

良く分からないけど、取り敢えず

「……………その……………傷、治しましょうか？」

「……………ああ、頼む」

私は魔剣師さんの傷を治すことにした。

癒羽希カルミアは補助魔法だけでいいかもしれない

…………。

☆☆☆

癒羽希さんはダンジョン内にあつた大きな円形の空間にいた。

ここがダンジョンでなければ小さな広場と言つても良い大きさの場所だ。

そこで、何故か体育すわりをして縮こまっていたから、声をかけた。

本当に何がしたいんだこの娘は。

ダンジョンで体育座りで俯くなんて普通に自殺行為だぞ？

まあ、今はいいや、その後は俺の怪我に気づいた癒羽希さんが治療をするかと聞いてきてくれたため、俺はお言葉に甘えて、癒羽希さんの張った結界の中に入り、怪我を治してもらおう。

ああ、効くわ。

ここに来るまでのボスラッシュ、ならぬ雑魚<sup>モブ</sup>ラッシュによつて俺の体は正直ボロボロになつていた。

それが、癒羽希さんの治療によつて治つていく、ほんと、補助魔法だけで良いんじゃない

ないか？

この娘。

まあ、今はそんなことどうでもいいや、聞きたいことも山ほどあるけど、取り敢えずここから出るのが先決だしね。

「癒羽希カルミア、付与魔法のマジックチップは持っているか？」

「は、はい、《フィジカルオーガ》と《イモータルウオーリアー》を持っています。」

「なら、《フィジカルオーガ》を俺に使い。奴らを一扫して帰るぞ」

「わ、分かりました：《フィジカルオーガ》」

うおおお、漲る。

力が漲る。

ヤバイ、マジで、相変わらず何でこんな強化できるのか意味わからんくらい力が漲る。

まあ、いいや、俺は結界の中で自前の《シャープネス》を発動し、空になったマジックチップを抜くと新しく《アクアバインド》をセットする。

そして、結界の外に出て、予めセットしておいた《アクセラレーター》を使い、加速する。

加速した時間の中、俺は敵の首を落としていく。一体、二体、三体、四体、五体、六体、七体、八体、九体、十体、十一体、十二体、十三体、十五体、十六体、十七体、十

八対、十九体、二十体、二十一体、二十二体、二十三体、二十四体、二十五体、二十六体、二十七体。

俺は敵を、斬って斬って斬って斬って斬って斬って斬って斬って斬って斬って斬って斬って斬って斬って斬って斬って、次々と魔物を倒していく。

……………ただ、そこまでだった。

加速した俺は確かに敵を次々と屠ることが出来た。

しかし、相手とて無防備で倒されてくれるわけでは無く、何よりも数が多かった。

そのため、《アクセラレーター》の効果が敵を倒しきる前に切れてしまったのだ。

「クソっ！」

俺は舌打ちをする。ここから再使用するか？

その考えを抱く前に敵の反撃を受けた。

向こうとて、ただ攻撃を受けるだけのサンドバックなんかじゃない。

ずっと反撃の時を伺っていたのだろう。そんな奴らが、《アクセラレーター》が切れ、その変化に対応できていない無防備な俺を見逃すはずがない。

顔と腹に敵の拳を受ける。

幸いだったのは拳だったため、パプリカの被り物が破れなかったことだろう。

とはいえ、パプリカの被り物が無傷でも俺の体はボロボロだ。

いや、二発しか食らってないだろうが！と思うかもしれないが、二発で致命傷なのだ。むしろ、癒羽希さんの《フィジカルオーガ》があるから二発も耐えているだけで、本来なら二発目を食らった時点で倒れていても可笑しくない。

まあ、ここからダメージを受けたら、どのみち倒されてしまうだろう。

そして、これだけ怪我を負ってしまえば、《アクセラレーター》は使えない。

一度、癒羽希さんの下に戻るべきか？

俺の中でその考えが頭を過つたが、今、目の前にいる四体の魔物がそれを見逃すとは思えない。

ここで何とかしなくては……………死ぬ。

「?!、魔剣師さん、今行きます!」

「ツ来るな!!」

「え?」

「お前はそこでふんぞり返つてろ。こいつは俺が倒す。」

いや、そもそも、君に死なれたらここに来た意味が無いんよ。君なしじゃあ、ここから出ることも難しくなるだろうし。

「分かったら援護に集中しろ。」

俺はそう言い、敵に向き合う。

何かすげえ、強キャラ的なことを言っているが、これどうやって勝つんだろう？

現実逃避気味にそんなことを考える。

それから、刹那の攻防があった。

初めに一体目の魔物が拳を振るう。俺はそれを剣で受け、後ろに下がった。

そこに二体目の魔物が横合いから現れ、蹴りを放つ。俺は再度、剣で受けようとしたが、間に合わなかったため、出来るだけ後ろに跳び、威力を抑える。

そして、そこを三体目が魔法弾で狙撃し、吹き飛んだところを四体目が俺の首を鷲掴みにし、癒羽希さんの結界に押し当てた。

本来なら、癒羽希さんの結界は癒羽希さんが許可した人は通れるはずなのだが、恐らく、魔物が俺に接触している状態であるため、俺も中に入れず魔物の腕力で押し潰されようとしているのだろう。

十中八九相手はそれを分かっている。俺がこのまま癒羽希さんの結界で押し潰されてもよし、癒羽希さんがそれを恐れて結界を解いてもよし。

とても、悪辣な戦法だ。

しかも、こっちは抵抗しようにも、魔法弾を撃ち込まれた時に剣を落としてしまった。俺はそれでも悪足掻きとして、マジックチップを一枚取り出す。

勿論、マジックチップ単体で魔法を発動することは出来ない。

だから、このマジックチップは後ろに投げる。俺自身は通れなくても俺が投げたものは入るだろうから。

そして、俺の意図に気づいてくれたのか、後ろで魔法名を叫ぶ癒羽希さんの声が聞こえる。

「《シャープネス》!!」

それは切れ味を上げる魔法。

これを俺自身にかけて貰ったのだ。

通常であれば刃物でない人体にかけても大した効果は発揮しない。

しかし、ヒロイン設定の癒羽希カルミアがかけた場合は別だ。

俺は手刀でもつても敵の腕を斬り落とし、そのまま敵の胸を貫く。

まずは一体。

折角、癒羽希さんのいる場所まで連れてきてくれたので、結界内に入り、回復もしてもらおう。

ふう〜、効く〜。

「やっぱり行くんですか?.....明日になれば防人の人たちが魔物を倒しにくると思うので待っていても良いと思いますが。」

「……それまで、結界は持つのか?」



「……………それは。」

「では行つてくる。援護は任せた。」

その言葉を残し、俺は飛び出す。

それに合わせて、敵も動き出す。

相手は魔法弾を用意し、今にも打ち出そうとしている。いくら《シャープネス》を使っているからと言つて、こちらの手刀で魔法弾を防ぎきれほど甘くはない。

腕の方が折れるだろう。

正直このままでは勝ち目はない。

俺がそんな風に癒羽希さんが魔法を唱える。

《《ホーリーバインド》》

《《ホーリーバインド》》は《《アクアバインド》》と違い、敵を完全に拘束し、魔法の行使すら、阻む魔法だ。勿論、その代わりに拘束時間が非常に短いというデメリットもある。

これにより、相手は魔法弾を構えたまま止まる。

とはいえ、発動待機の状態にある魔法弾の行使をキャンセルすることが出来るわけでは無いので、急いで刀を取りに行く。

そして、俺が刀を手にとったと同時に、魔物たちの拘束が解け、魔法弾が飛んでくる。

ヤバイ、せめて《《シャープネス》》を魔剣に施したかった。

とはいえ、今から魔剣に《シャープネス》をセットしている時間はない。なら、後は受け流すしかない。

「《シャープネス》」

背後から魔法を唱える声が聞えた。

癒羽希さんの声だ。

一応、言つて置くと、俺が癒羽希さんに渡したマジックチップの数は一枚だ。

そのため、俺のような木端防人なら、一度の魔法行使しかできない。

しかし、以前にも話した通り、真道才を初めとした強者はマジックチップに込められた魔法を小出しにし、更に自前の魔力で強化することが出来る

当然ではあるが、ヒロイン設定を持つ癒羽希カルミアも例外ではない。

使つてもらうまで完全に失念していたけど。

………パーティー組んでいた時もやってたんだけど、やっぱりアクシデントの時つて頭が働かないわ。

まあ、戦局はこつちに傾いた。

俺は魔物たちが飛ばして来た魔法弾を手に持つ魔剣で斬り捨てる。

うん、自分で《シャープネス》を発動させた時と比べて切れ味が段違い。

とはいえ、相手もこの程度で臆したりはしない魔法弾を斬り捨てた俺に向かって、拳を振るう。

魔物の拳は俺の顔面を再度狙っているが関係ない、俺は魔剣で拳を斬り捨てる。

そして、相手の心臓を一刺し。

これで二体目。

俺がそう思っていると、刺された魔物は残っている腕で俺の腕を握ってくる。

どうやら、自分の命と引き換えに俺の動きを封じようとしていたらしい。

他の魔物たちもその時間を無駄にしないためにこちらに接近し、片方が拳、もう片方が蹴りを放ってくる。

ただ、彼らはどうやら忘れていているらしい。俺の体は現在、全身が刃物になっているというのを。

俺は捕まれた手とは反対の手で手刀を作り、敵の腕を斬る。

そして、魔剣を引き抜き、蹴りを仕掛けてきた魔物の足を魔剣で斬り、拳を放つてきた魔物には手刀を向ける。

魔剣は敵の足を綺麗に斬り飛ばし、手刀は相手の拳に刺さったものの、こちらの手も潰れてしまう。

「ツ！」

とはいえ、止まるわけには行かない。

俺は拳を放った魔物に《アクアバインド》を使い、動きを抑制し、斬る。

そして、片足を失いバランスを崩した方にも続けざまに留めを刺した。

「……………お、終わった？」

「ああ、終わり……………」

俺はそう言おうとした。言おうとして辞めた。

魔物が現れたのだ。ただ、その魔物は雑兵級ではなかった。

何でそれが分かったかという顔だ。

その顔に俺は見覚えがあった。

この前まで一緒に何気ない会話を楽しんで、戦いときは背中を任せたパーティーメンバー、柵加君の顔だった。

## それでも私は信じたい

この前まで一緒に何気ない会話を楽しんで、戦いときは背中を任せたパーティーメンバー、棚加君の顔だった。

しかし、棚加君と瓜二つであつても瘴気だけは隠せない。魔物が魔物である限りこの法則は絶対だ。

そして、棚加君の姿をした魔物ということは恐らくだが、相手はあの時の強化種だろう。

癒羽希さんもそれが分かったのか、即座に魔法を使う。

「~~ワ~~棚加君……………。いえ、《アースバリア》」

《アースバリア》

《シャドーモール》や《アースモール》を初めとした、地中や水中などに潜伏した魔物を炙り出したり、逆に地上に上がってこられないようにすることが出来る対抗魔法だ。

効果が限定的なため、雑兵級ダンジョンなどの使用魔法が限られる魔物を相手にする際はあまり使われることは無いが、恐らくこのダンジョンに潜るにあたって念のため用

意していたのだろう。

この魔法により、目の前にいる強化種は《シャドーモール》使うことは出来なくなつた。

更に、地面からズズズと、もう一体の強化種が現れる。

こいつは弧囃子さんの姿をしていた。

「二体か」

「やっぱり……………」

癒羽希さんは二体いたことに気が付いていた、いや、前回も二体で行動していたため警戒していたのだろう。

ナイスアシストだ。

俺は空になった《アクアバインド》を抜き、《マナシールド》をセットする。

更にもう片方のチップには《アクセラレーター》を選択する。

因みにこれが最後の《アクセラレーター》だ。

後、《アクアバインド》《フィジカルオーガ》《シャープネス》に関しては俺が使うよりも、癒羽希さんに使って貰った方が効果が高いため癒羽希さんに渡しておく。

「このチップはお前が持つておけ」

「……《フィジカルオーガ》に《シャープネス》、《アクアバインド》ですね。分かりました。お預かりします。

「……………《フィジカルオーガ》と《シャープネス》念のためかけ直しますね。」

「ああ、好きにしろ」  
一応、まだ、効果は切れていないが、戦闘中に切れないようにかけ直してくれるようだ。

「《フィジカルオーガ》《シャープネス》」

《フィジカルオーガ》と《シャープネス》をかけ直したし、現状の中で万全の状態を整えた。

「《アクアバインド》」

更に、癒羽希さんは魔物に《アクアバインド》を使い、動きを阻害する。

これ以上、出来ることは無いだろう。

俺は結果を出て敵に突っ込む。正直言えば、序盤で《アクセラレーター》を使い、敵を速攻で倒すべきなのかもしれないが……………切り札をここで切つていいのかと、ちよつと迷つてしまう。

勿論、それ以外にもこちらには凄腕の回復魔法士がついているため、長期戦にし、敵が消耗してきたタイミングで《アクセラレーター》を使い、倒すという思惑もある。

どっちの選択が良いのかは戦いが終わるまで分からないし、悪くない結果になることを祈るしかない。

敵は《アクアバインド》により動きが阻害される中でもこちらの動きに対応し、《創剣》を使い応戦してくる。

武器は以前とは違い、一振りの刀だった。

棚加君の記憶か何かに影響を受けているのだろうか？

俺がそう考えていると、もう一体の敵もこちらに接近してくる。

こちらも持っている武器は刀だ。

しかも、アクアバインドで動きを阻害しているのに………速い!!

初めから《アクセラレーター》を使うべきだったか？

俺がそう考えていると、光の輪が魔物の動きを捉えた。

「《ホーリーバインド》」

癒羽希さんが拘束魔法で援護してくれたようだ。

しかし、既に使用した魔法の効果が切れるわけでは無く、更に………。

〈バキツ〉その音共に魔物が《ホーリーバインド》の拘束から解かれる。

効果時間が極端に短いから仕方ない。

ただ、一端引くには十分な時間でもあった。



俺は相手を切り裂きながら、結界の中に入る。

そこで、癒羽希さんの様子が少しおかしいことに気づく。割と長い間一緒にパーティーを組んでいたから分かった変化だった。

「……………どうかしたか？」

「……………すいません。友達に、似ていたもので」

ふむ、成程、柵加君と弧囃子さんの姿をしているから動揺しているということか。

まあ、普通そうなるよな。

仲間の姿をしていて動揺するなっていう方が難しいか。

「……………それでも、あれはお前の仲間ではない。」

「……………はい、分かっています」

癒羽希さんはそう言いながらも、俯く。

……………道理の問題ではないから仕方がない。

俺は再度、柵加君の姿をした魔物に向かって駆け出す。

先程までは、どうにか長期戦に持ち込み倒そうと考えていたが、どうやら俺の実力で長期戦に持ち込むのは無理そうだ。

俺は《アクセラレーター》を使い、加速する。

敵がスローになる世界の中に入る。しかし、ここで俺は気づく。

相手との実力の差に。

勿論弱くはないと思っていた。

しかし、雑兵級ダンジョンにいるため元を正せば雑兵級の魔物であり、そこまで強くはないと踏んでいた。

しかし、この魔物たちは俺の動きを目で追っている。

そして追従してくる。

ハッキリ言って、《アクセラレーター》と癒羽希さんの《フィジカルオーガ》を付与されている状態で恐らく同速、もしくは俺が少し早いくらい。

そのため、こちらの攻撃にも反応される。

これでは勝負がつかない。

俺は何合も柵加君の姿の魔物と、弧囃子さんの姿の魔物を交互に相手にする。

剣を打ち合ったことによる火花がそこかしこで舞い散る。

……………このままじゃ、《アクセラレーター》が切れたと同時に殺される。

俺が内心で焦っていると、相手もまた、痺れを切らしたのか、弧囃子さんの姿をした魔物……………長いから魔物（弧）って訳すけど、魔物（弧）は今までとは比べ物にならない程の力で剣を振り下ろしてきた。

俺はそれを魔剣でもって受ける。

これにより、鏑迫り合いのような形になったのだが、鏑迫り合いになると膂力の差によつてこちらが押し込まれそうになる。

そこを癒羽希さんが《ホーリーバインド》を使い、敵の動きを封じてくれる。

俺は動きが止まった魔物（弧）の腕を斬り飛ばそうとする。

しかし、そこで、《ホーリーバインド》による拘束が解けてしまう。

更に魔物（弧）は一度身を引くことで、魔物（柵）と位置を入れ替わろうとする。

俺はそれを魔物（弧）の足を踏みつけることで防ぎ、その場に押し留める。

そして、動揺した所に再度剣をふるう。

完全に捉えたと思つたのだが、相手は強引に足を跳ね除け、後ろに下がった。

俺はそれによりバランスを崩す。

相手からすれば攻撃を繰り返す絶好の機会だ。

俺の背中に冷や汗が伝う。

ただ、いつまで経つても敵の攻撃は来なかった。

控えていた魔物（柵）が追撃を仕掛けてきてもおかしくないと思うのだが、

そう言つた様子は一切なかった。

どうやら、魔物たちは真正面からの、連携に関してはそこまで鍛えていないようだ。

まあ、《シャドーモール》なんて初見殺しを使えるので、今まで必要が無かつたのか

もしれない。

それに、剣術における連携は基本的に難易度が高い。

息が合わなければお互いが邪魔で百パーセントの力を発揮できない。

その点を踏まえれば、危なくなったらフォローに入るといふ魔物たちのやり方は技術体系が確立していない中では上手くやっている方なのかもしれない。

俺がそう思っていると、敵の動きが加速する。

いや、《アクセラレーター》が切れたのだ。

俺は迫ってくる魔物（柵）の攻撃を何とか受ける。

但し、魔物（柵）の猛攻は止まらない。

上からの振り下ろしや手首を狙った斬撃、はたまた、胴目掛けての薙ぎ払い、しかも、魔物（弧）が後ろで黒色の矢、《シャドーアロー》を放ってくる。

刀での連携を諦め、完全に後衛に集中することにしたのだろう。

戦いの中で魔物たちの連携が洗練されてしまった。

俺は後ろから弧を描き飛んでくる《シャドーアロー》を《マナシールド》で防ごうとする。

しかし、魔物（弧）の《シャドーアロー》は俺の展開する《マナシールド》を容易に貫通する。

そして、俺の右肩を貫く。

「っ!!」

しかし、例えば肩に大怪我を負っても敵は手加減なんてしてくれない。

魔物（柵）は刀を大きく薙ぎ払う。

俺はその攻撃を防ぐため魔剣を盾にする。

腕に鈍い衝撃が走り、宙を浮く。

どうやら、防ぐことには成功したがその余りの威力に癒羽希さんのいる場所まで飛ば

されてしまったようだ。

「大丈夫ですか!!」

「……………ああ、問題ない。怪我を治してもらえるか?」

「は、はい! あ、あのもし良ければ、こぼ、後ろの魔物の攻撃が飛んで来た際に結界を張

りましょうか?」

そ、そうすれば、もっと上手く戦え「お前はその状態で自分を守れるのか?」

……………そ、それは

「なら、良い。お前は自分の身を守っている。俺は俺で何とかする。」

癒羽希さんが防御魔法で援護しようかって言ってくるけど、俺はそれを断る。

前にも同じことを言ったが仮にそれで癒羽希さんが死んだら、ここまで来た意味がな

い。

頼むから自分の命を大事にしてくれ。

とはいえ、正直お手上げである。

というか、《アクセラレーター》がある状態でようやく互角だった相手に今の俺がどうやって太刀打ちするのかって話だ。

仮に癒羽希さんが《ホーリーバインド》を使つたとしても、直ぐに拘束を解いて、逆に俺が返り討ちに遭うだろう。

俺がそう思っていると、魔物（弧）はじつと己の手を見る。

本当にただ手をじつと見ている。

しかも、二体ともだ。

一体何をしているのか。

ただ、チャンスでもある。

向こうが何に考えているのか知らないが、今がチャンスだ。

傷の癒えた俺はそんなやけくそな思いで敵に突っ込んだ。

魔物（棚）に斬りかかる。

魔物（棚）はこちらの攻撃を刀で受ける。

俺は鏝迫り合いの形になったと同時に今度は一度距離を離し、突きを放つ。

相手はそれを間合いのギリギリを見極め、後ろに下がる。

俺は、そこで魔剣を離す。

これにより、魔剣は魔物が見極めた間合いの外まで範囲が伸びる。

魔物は一瞬だけ眉をピクリと動かすと、片手を刀から離し、人差し指と中指で白刃取りをする。

ここで押し切る!!

俺は掌底で魔剣を押し込みにかかる。

しかし、びくともしない。

こちらが全力で魔剣を押し込みにかかっているのに一切魔剣が押し込まれる気配がない。

臂力が違うとは思っていたが、まさかこれ程とは……………。

俺は魔剣の柄を握り、今度は魔剣を引く。

先程まで、押し込まれないように力を入れていた魔物は急に引く力が加わったことで体勢を崩し、それにより魔剣を離す。

俺はそれと同時に、今度は刀を横に倒した状態で突きを放つ。

先程までは刀身を縦にしたまま突きを放っていたが、こうすれば人差し指と中指で白刃取りをしようにも、指の方が斬れてしまうだろう。

取った!!

俺はそう思ったのだが、相手はこちらの突きをギリギリの所で半身をずらし避ける。しかも、いつの間にか後衛を務めていた魔物(弧)が《シャドーアロー》を用意し、こちらを狙っていた。

俺はその攻撃を今度は、魔物(柵)の陰に隠れることでやり過ごす。

魔物(柵)はその行動に苛立ったのか、直ぐに俺を蹴り上げる。

俺はその衝撃で、遠くまで飛ばされてしまう。

とはいえ、魔物(柵)から距離を取れたのは僥倖だろう。

更に、俺はそのままの勢いで、《シャドーアロー》の着弾点へ向かう。

そこには少しづつ形が崩れていく、《シャドーアロー》が刺さっている。

俺はそれを抜き、魔物(柵)に向かって、投擲する。

魔物(柵)はそれを斬りはらうつもりなのか刀を上段に構えた。

「《ホーリーバインド》」

しかし、そこで、癒羽希さんが《ホーリーバインド》を使い、動きを止める。

その拘束自体は直ぐに解かれてしまうが、その間にも俺が投擲した《シャドーアロー》は魔物(柵)に向かって弧を描きながら進む。

そして、魔物(柵)は急遽、刀を下げ、避ける方向にシフトする。



とはいえ、完全に避けることは出来ずに半身をずらし、致命傷だけは避けたようだ。致命傷は避けられたが、代わりに左肩に深々と《シャドーアロー》が突き刺さる。

俺はそれと同時に魔物が下げた刀の峰を足で踏む。

魔物(柵)は踏みつけられた刀を力任せに振り上げる。

俺はその勢いを利用し、天井まで跳び上がり、反転。

天井を足場に急降下し、魔物(柵)に斬りかかる。

そして、再度、刀と刀の衝突により、火花が散り始めた。

鏢迫り合いになった所で俺は魔剣を離し、未だ、敵に突き刺さったままの《シャドーアロー》を掌底で押し込む。

突然、手を離れたことで魔剣は後ろに飛んでいってしまうが、相手も《シャドーアロー》を押し込まれた痛みで距離を取ったので、こちらも魔剣を取りに行く。

どうなることかと思ったが、活路が見えてきた。

☆☆☆

その戦いに私は違和感を抱いていた。

はつきり言ってしまうえば、まるで大人が子供の遊びに付き合っているかのような、そんな茶番のような印象を受けたのだ。

魔劍師Pを名乗っていた彼はハッキリ言っていてしまえば、それほど強くない。

《アクセラレーター》を使った際は雑兵級を圧倒していたが今の彼はそれこそ、雑兵級四体を相手にして辛勝できる程度ということが先ほどの戦いで分かっている。

間違ってもこんな特殊個体を相手に二対一で戦っていい人ではない。

その彼が、目の前で雑兵級を超える二体の魔物相手に渡り合っている。

ただ、それは彼が戦いの中で成長しているわけでは無い。

いや、勿論彼も頑張っている。

空になったマジックチップを投げつけたり、相手の意識が刃に向かった瞬間、足払いを仕掛けたりと敵の意識の隙をつくトリッキーな戦いで魔物を翻弄している。

……でも、あの魔物たちなら力づくでどうにかできるのではないか？

私はそう考えてしまう。

もし、私の仮説が正しいのであれば、今互角に渡り合えているのは魔物の方に原因があるのではないか？

勿論、馬鹿な考えだとは分かっている、

それでも、私は他の魔物と比べてあの魔物たちは殺意が薄いように感じるのだ。

………仲間の顔をしているからそう感じるだけなのかもしれない。

そんなことは分かっている。それでも私はそう信じたかった。今日の前で起こって

いる奇跡を、只の奇跡として片づけたくなかった。

棚加君たちが私たちを守るために今も戦っている、そう信じたいのだ。

☆☆☆

俺は何とか敵の猛攻を捌き続ける。

本来ならあり得ないことだが、何故か生きている。

第六感でも働いているのではないか、そんな風な考えが頭に浮かぶ。なんかそう考えればそんな気もする。

「行きます。」

何か覚悟を決めた声が後ろの方で聞こえる。

一体どうしたのか、しかし振り返って何をしているか確認する時間など俺にはない。

それから、どれだけの時間が流れたか………というかマジで何してるの？

後ろで何が起こっているの？

なんかすごい大魔法とか発動している感じ？

俺がそう思っていると、遂に癒羽希さんが魔法を発動させる。

「《イモータルウォーリアー》」

その声は空間全体に響き渡るほど大きな声であった。

癒羽希さんの覚悟が分かる声。

とはいえ、その、癒羽希さんが使った魔法はそこまで特別な魔法ではない。

精神強化魔法だ。

まあ、この場ではありがたい。

確かに劣勢すぎて、心が折れそうになっていないと言えば嘘になる。

「たすかっ」

そこまで言いかけて気づく。

俺の精神には何の以上もない。

何の干渉も受けていない。

では、一体誰に使ったのか。俺は後ろを振り返る。

彼女は両手を祈るように握りながら、魔物たちを見る。

まさか、まさかっ !!

「お前は馬鹿なのか？!! 魔物に付与魔法をかけるなんて何を考えている」

精神強化とは言え、魔物に付与魔法をかけるなんてどうかしている。

ダンジョン、一人で潜った件と言い彼女は一体何を考えているのか。

俺がそう思っていると、魔物たちの動きが止まった。

頭を抱え、唸りだす。

蹲り、血涙を流す。

何が起こっている？癒羽希カルミアは何をした？

俺の知っている《イモータルウォーリアー》とは別の魔法か？

それとも、口に出した魔法名はブラフで別のマジックチップを使った？

何のために？

俺が混乱していると事態が動き出す。

「……………オ、オレハ、オレハ、コ、コロシタク、ナイ」

「……………ワタシ、ハ、タイ、マモリ、タイ、カゾク、ヲ、コドモ、タチ、ヲ」

魔物たちが声を出す。

言葉を発する。

あり得ない。

魔物が喋るなんて、強化種に食われたものの魂が宿るなんて、あり得るのか？

ただ、確かに目の前でその、あり得ないことがあり得ている。

「……………ウウウウ、ナンデ、ナンデ、コンナ、コト、二」

「ごめんなさい。私に、私に勇気が無かったから……………」

そう言いながら癒羽希カルミアは結界の外に出る。

肉体強化も付与魔法も使っていない、それどころか、杖すらも手放し、棚加君の頬をその両の手で触れる。

……………こいつはやはり、馬鹿、なのか？

仮にここで、棚加君が豹変し、襲ってきたら抵抗することすらできずに殺されるんだぞ？

何で動じないんだ。

何でそんな表情を浮かべられる。

「……………ソナ、コト、ナイ、ソナ、コト、イツテ、ホシクテ、オレハ……………」  
「……………棚加君は優しいんですね。」

そう言うと、ゆつくりと棚加君を抱きしめその頭を撫でる。

そして、次に弧囃子さんに視線を向ける。

その視線を受け、弧囃子さんは自嘲気味に笑う。

「……………マモル、ガワ、ノ、ワタシ、ガ、コンナ、ジャ、タヨリ、ナカッタ、ワヨ、ネ」  
 「そんなことは無いです。弧囃子さんがいたから、私は今こうしてここに立っています。だから、そんなこと、言わないでください。」

「……………アナタ、ハ、ヤサシイ、ノネ、アア、アア、ダケド、コンナ、カラダ、ジャ、ヒトヲ、ダキシ、メル、コトモ、デキナイ」

弧囃子さんは魔物となった自らの手を見ながらボロボロと涙を流す。

そんな弧囃子さんに癒羽希さんは近づいていく。

「抱きしめても良いんです。……………それでも、もしあなたが否と言うのなら、私が貴方を抱きしめます。瞳に溜まった涙は私が代わりに拭きます。」

癒羽希さんは弧囃子さんを抱きしめ、その両目の涙を拭う。

それから、暫くの時間が経ち、弧囃子さんが決心を決めた様子で顔を上げる。

「……………ネエ、オネガイ、ガ、アルノ。」

「……………オ、オレモ、ダ」

「……………なんですか？」

「……………オレヲ、コロシテ、クレ」  
ワタシヲ

その言葉に癒羽希さんは目を大きく見開くと、一度下を向く。

そして、再度顔を上げると、覚悟を決めた目つきをする。

「初めから、そのつもりです。

私は魔物となったあなたたちを初めて見たときから、この手で殺してやろうと思っていました。

恨んでくれても構いません、憎んでくれても構いません。薄情だと罵ってかれても構いません。それでも、私は魔物という存在が許せないんです。」

癒羽希さんの声には震え一つなかった。

ただ、何故だか、その声がとても空虚なものに俺には感じた。

「……………ソウ、ヤツパリ、アナタ、ハ、ヤサシイノネ」

「……………ユウキ、サン、ヲ、スキニ、ナツテ、ヨカッタ」

そう言う二人を前に、癒羽希さんは置いてきたワンドを取りに行き、マジックチップをセツトする。

「《ステインガールレイ》」

それはとても静かな声だった。

癒羽希さんが光の杭を生み出したと思ったら、次の瞬間には、目の前には胸を穿たれた二人の姿があった。

余りにも呆気なかった。



長い間、死闘を繰り広げた魔物の死体が転がっていた。

いや、棚加君がピクリと動いた。

生きていたのか。

「ハハ、ソウ、イエバ、サイゴニ、イイワスレテ、タ、コトガ、アツタ、ダカラ、シヌマ  
エニ、ヒトツダケ、ソコ、ノ、パプリカ、ニ」

「俺か？」

何だろう。

流石に既に死に体であり、危険も無いだろうと思い、無防備に棚加君に近づく。

すると、棚加君は俺の手を引き、自らの方に近づける。

不味いっ！！

反応できない。

だが、棚加君は何もしなかった。

ただ、最後に俺の耳元で。

「オトナガ、ユウキ、サンヲ、シンデ、モ、マモレ」

被りものをしていいるため、正体は分からない筈だが、確かに柵加君はそう言い、静かに息を引き取った。

「魔剣師さん、柵加君はなんて？」

「……いや、たいしたことじゃない」

俺はそう言つて言葉を濁す。

守れるかも分からない、約束を口に出すことは出来ない。

「そうですか………」

そう言うのと癒羽希さんは少し寂しそうな顔をする。

きつと、柵加君の最後の一言を聞きたかったのだろう。

俺がそう思っていると、癒羽希さんがマジックチップを交換し始める。

「……それは一体何をしている？」

「ただのおまじないです。おばあちゃんから教わった。

……《輪魂》」

俺の知らない魔法だ。

少なくとも、俺の設定にこんな魔法は無かった。

「これは、戦場で死んでしまった魂が再度転生できるようにするためのものなんです。て。

……まあ、おばあちゃん曰く、信憑性は高くない、気休めみたいなものだそうですね」

転生、俺はそんな設定は作っていない。

作っていないが、確かに、そうなってくれれば嬉しいと思う。

「……そうだな。きつと、また会える」

そしたら、あんな無茶な約束を一方的にしてきたことに文句を言ってやる。

一発殴つても良いな。

俺が癒羽希さんの方を向くと、彼女はどうかやら目を瞑り静かに祈っていた。

どれだけ、時間が経ったかは、時計が無いので分からないが、それから暫くし、彼女  
瞼を開ける。

「では、行きましょう。魔剣師さん」

「……ああ……いや、俺はもう少し残る。もう、お前一人でも大丈夫だろうしな」  
「そんなことは無いですが……いえ、分かりました。」

癒羽希さんは俺の提案を断ろうとするが、こちらが訳ありであると察してくれたのか、一人で帰ることを了承してくれる。

あ、あと、その……。

「……ああ、それと最後に、その、……マジックチップを分けてくれないか

？」

俺はそう言い、彼女に《フィジカルオーガ》と預けていた《シャープネス》そして、彼女が持っていた《ジェネリックシールド》を分けてもらい。

彼女が出てから暫くしてから、外に出た。

「目的は達せたのか？」

ダンジョンの管理人がそう言いながら話しかけてくる。

それに対し、俺は小さく頷くのだった。

☆☆☆

後に二代目戦巫女と呼ばれる癒羽希カルミアは学生時代に教師にも言わず、ダンジョンに潜ったことがあるそうだ。

この事件の詳細を彼女は余り語りたがらない。

しかし、この日の出来事が自分の考え方を変えたと彼女は良く口にしていた。

そして、彼女はこのような言葉を残している。

勇気とは、人を殺すことに非ず、人を生かすことに非ず、ただ、救おうと、守ろうとする意志である、と。

見つけ次第、地の底まで追っかけて○す

プロローグ……どっちかと言うとエピソード?

☆☆☆

俺達は今、一年の間だけ月に一度、無料で利用できるレストランの中にいる。

ミーティング、とかではない。

祝勝会でもない。

では、何をやっているのか、と言うと

「皆さん、今日までありがとうございます。」

癒羽希さんは瞳を潤ませながら、頭を下げる。

そう、送別会だ。

癒羽希さんは今日を以て毒ノ森班を抜けることになった。

事の顛末を語るには既に一週間前の出来事となる癒羽希さんが単身でダンジョンに突入した日、その後何があったかを語らなければならぬ。

とは言っても、俺も他の人から聞いた話だから、詳しいことは言えない。

けど、話によると癒羽希さんはダンジョン前まで来ていた教師や防人の人にこっぴど

く怒られたらしい。

……予想は出来ていた。

教師の人に癒羽希さんがダンジョンに入っていないか確認をとって貰ったの俺だし。だからこそ、敢えて時間を空けて一人でダンジョンを抜け出したんだしな。

俺のことは良い。ダンジョンに入ったことはばれていないし、何食わぬ顔で寮に帰ったので、特段語ることもない。

話は戻して、癒羽希さんに関してだけど、その後、一人でダンジョンから帰還する腕前を買われ、特別防人に、そして、一人でダンジョンに潜った責任を取らされ、毒ノ森班から真道班へ異動となった。

……まあ、ただの口実だ。

実際のところは剣凧さんや穿間さんが真道君たちと共にウエアウルフを討伐したことで特別防人に任命されたため、上層部が若い世代の台頭を感じ、戦巫女の孫である彼女も特別防人にした、といった所だろう。

期待を掛けられているってことだな。

それと同時に真道君のパーティーに攻撃魔法士、防御魔法士、魔剣士が既にいるから、

回復魔法士も欲しいという考えもあったのだろう。

ズズズと鼻をすする音が聞える。

「……寂しく、なるわね。でも、貴方と一緒にパーティーを組んで本当に良かった。特別防人になったけど、無理だけはしないでね?」

未裏さんは涙と鼻水を必死に堪えながら、癒羽希さんに話しかけている。

別に今生の別れってわけでも……いや、特別防人は今まで以上に危険も増えるだろうし、今生の別れかもな。

何より、授業とかも特別なものに置き換わるから、教室とか訪ねても会えないかもしれないしね。

あつ、毒ノ森君が未裏さんにティツシユを渡した。

あれが、デキル男って奴か。

そして、未裏さんにティツシユを渡した毒ノ森君は未裏さんに向き直る。

未裏さんのように泣いてはいないが、どこか寂しそうな顔だ。

「割と未裏さんと被る内容になっちゃうんだけど、君と一緒に戦えてよかった。君なら真道君たちと共にともっとと輝ける。

……でも無理だけはしないで欲しい。

「僕らは君が戦果を挙げるより、君が無事でいてくれる方がよっぽど嬉しいから」

「未裏さん、毒ノ森君……………ありがとうございます。毒ノ森班の名に傷をつけないように精一杯頑張つてきます！」

二人は強く強く、頷く。

「うん、何があろうと君が毒ノ森班つてことは変わらない……………」

ただ、君が気にするほど僕らの名前は大きなものでもないよ？だから、僕らの名前に、いや君自身の責任感に潰されないようにね？」

毒ノ森君はそう言つて穏やかに笑つた。

その笑顔にはやはり、寂しさが宿つていたが、それと同時にどこか誇らしげでもあつた。

うん、とてもいい話だと思ふんだけど……………こつち向くのは止めないか？

癒羽希さん。

毒ノ森君、未裏さんも君らもつられてこつち向かないですよ。

「……………あゝ、まあ、困つたことがあつたら相談に乗るよ。それに俺の出来る範囲のことであれば、力も貸す。」

「……………ふゝん、貴方がそんなことを言うなんてね」

「別に頼まれたから、少しくらいは力になろうと思つただけさ。」



少し訝し気な表情を浮かべる未裏さんに対し、俺はそう告げる。

「……………あんな、約束を守れるとは思ってないけど、それでも少しくらいは力になってつもいいかなと思う程度には俺にも情はある。」

「……………約束、ですか？」

「……………ああ、無責任クソ野郎とのね」

首を傾げる癒羽希さんい対し、俺は吐き捨てるように言った。お前のことだぞ棚加!!  
本当に、本当に厄介な遺言を残してくれたものだ。

「……………音長君は何でそんな無責任な人との約束を守るんですか？」

「……………それは。」

……………多分だけど、カツコイイって思ったんだ。

確かに自分は約束をほっぽり出した癖に、俺には無理難題な約束を一方的に押し付けて来てクソ野郎だけど……………それでも、アイツは変わらなつた。

どれだけ、絶望的でも、救いが無くても……………確かに輝いて見えたんだ」  
言つて気づいたけど、すごい、すごい、こつ恥ずかしいこと言ってるな。

うん、今のなし、無しにしようか。

「つて、言うのを昨日の内に考えていたんだ。

ほら、約束を守る男つてなんだかカッコいいだろ？

癒羽希さんに振り向いて欲しくてさ」

「……………ふふ、そうですか。一瞬本気にしちゃいました。

胸もドキつてしちゃたんですよ？」

おい、なんだい、その意味深な笑顔は!!

どっち、それ、どっちの笑顔？

魔性の女アピ？

それとも、私は分かってますよ、的な？

いやいやいや、そう言うのは良いからああああ!!

その後、送別会は恙なく終わった。

☆☆☆

送別会が終わり、寮に帰ろうとした時、未裏さんに呼び止められた。

「どうしたの？」

「い、いや、その、この前は言い過ぎたと思って……………その、ごめんなさい」

俺と未裏さんが最後にまともに会話をしたのは棚加君たちとパーティーに行き、棚加

君たちが魔物に捕まった日のことだろう。

「……ああ、別に気にしてないよ。お互い、切羽詰まっていたいしね。冷静じゃなかっただけだ」

「……でも、あんたに当たったのは事実。

だから、謝らせて。

ごめんなさい。

……それと、今日であんたが私の思ってるような奴じやないって分かった。」

「それは……どういう意味かな？」

「……私はあんたが、他人に合わせて、自分の本心は言わない。私たちを……いえ、人を信頼しないし、他人を大切にしない奴だと思ってた。」

……でも、今日のアんたの目には確かに誰かの期待に、約束に応えようと  
してた。

……目に熱が宿ってた。

だから、ごめんなさい。」

彼女が何を言いたいのか、分からないし、分かりたくない。

だから、俺は曖昧に笑って返した。

まったく、皆、人のことを買いかぶりすぎた。

俺はそんな大それた人間じゃない。

もしほんとに君らの言うような人なら、あの場で直ぐさま撤退を選ばなかったらう。

棚加君との約束を守るためにもっと躍起になっていただろう。

俺はそんな風にはなれない。直ぐに自分の命のことを考えてしまう。

直ぐに他人の命に見切りをつけてしまう。

棚加君や癒羽希さんみたいに自分の命を捨てて他人を守る献身なんて持ち合わせていない。

俺は只の臆病者だ。

彼らのような精神から滲み出る英雄性なんて持ち合わせてないんだ。

ただ、彼らの光に照らされて、その光に飛びついているだけ。

……………だから、どうか買いかぶらないでくれ。

☆☆☆

送別会の後、俺は自室に引きこもっていた

引きこもって何をしていたかと言うと……………ベットに寝っ転がりながら、

スマホをいじる、そんな風に過ごしていた。

特段何もやる気が起きない。

「はあ」

魔剣師とか魔導師では無く、音長盆多として、勘違いをされてしまった。それが殊更に居心地が悪い。胃の辺りがむかむかして気持ちが悪く感じた。

それと、何だか毒ノ森君と会うのも億劫になり、唯々、時間を浪費する。

普段なら見ない動画を再生してみたり、ニュースやゴシップ、SNSに目を通す。

適当にスクロールしているだけなのに不思議と飽きない。

どれもこれも新鮮な情報ばかりだからだろう。言ってしまうえば情報のバイキングつてやつだ。

俺はひたすら脳死でスクロールを続けていく。

いや、もう何分、こうしていただろうって思うくらい。

でも、画面がピタリと止まった。

俺の指が止まった訳じゃない。画面が一人でピタリと止まったのだ。

バグだろうか、俺は首を傾げながら、再起動しようとスマホを弄る。

しかし、再起動できない。

あれ？再起動も出来なくなった。

俺は頭にクエスチョンマークを浮かべる。なに、これ。そして、次の瞬間、画面が砂あらしのように荒れる。

えっ、えっ？

ベットから起き上がる。そして駆け出す。

ある場所に向かうために……………。

「……………いいいやああアアアアアアアアアア、毒ノ森君助けてえええええっ、スマホおかくなったああああアアアアアアアア」

俺が毒ノ森君の部屋の前でそう叫ぶと、毒ノ森君が思いつきり、ドアを開ける。

いたっ！

ドアに顔ぶつけた。

「……………びつくりしたあ。えっと……………、それでスマホだっけ？

実は俺のも変なんだよね。

砂嵐みたいになって使えなくなった」

なんてことだ。毒ノ森君も同じ状況になっていたなんて。

俺と毒ノ森君が話していると、さっきの俺の声に反応して、自室から出て来た男子生

徒が話に入ってくる。

「……………お前らも、なのか?」

俺も何だよ。

……あと、音長、お前声でけえよ。

普通に迷惑だわ」

まさか、よく分からん、男子生徒まで被害に遭っているなんて……………。

その後、談話室に集まったところ、他の生徒のスマホも同じ状況になっているらしい。

因みにテレビも駄目だった。

砂嵐が起こつて見れない。

生徒の一人が言っていたんだけど、凶悪なクラッカー集団が攻撃を仕掛けてきているのかもしれないだって。

ふくん。

これ、今こそ、雪白先生の教えを実行する時だよな?

見つけ出して、原型をとどめないレベルで細切れにしなくちゃ。

それで、被害者の人たちで、チーズとかハムとか、ミントを挟んでパーティーだ!

って、それは別のクラッカーか。

まあ、いいや、とりあえず、どうやって見つけるかだよな。

## ☆☆☆

部屋を灯すシャンデリア、新雪のように柔らかい絨毯。

いくらか分らない壺や絵画が飾られている部屋で四人の男女が円卓を囲んでいた。

「……それでは、一人、欠席者が出てしまいました。会議を始めましょう」

モノクルを掛けた金髪の女はそう言うと言と書類を全員に配っていく。

それを一人はじつくりと読み込み。

一人はパラパラと概要だけ頭に入れていく。

そして、最後の一人は欠伸をし、椅子に寄りかかると目を瞑る。

「……【不滅】、折角用意しているのですから、少しは見てくれませんか？」

「あつ？ だりいよ。俺の役目は敵を殺す事だろ？ こんな紙切れ読むことじゃねんだよ。

そう言ううちまぢました仕事はてめえらの役目だろ？」

【不滅】と呼ばれた男はそう言いながらニヤリと笑う。

女はそれに対し、分かりやすく舌打ちをする。

ただ、不快に思ったのはどうやら彼女だけではなかったようだ。

「……ふつ。先代の【不滅】が戦えなくなって、仕方なく代替わりをした若造が随分と偉

そうだな？」



「んだとツ【解毒】!!」

状態異常の回復しか能のねえてめえが俺に反論してんじやねえツ!!」

【不滅】と呼ばれた男は頑丈そうな円卓を素手で叩き割り、威嚇する。

しかし、【解毒】はその男の行動を鼻で笑う。

「おいおい、痲癩を起すなよ？」

大人だろう？

それにさっきの話も事実じゃないか、【無二】には勝てずじまいで【虚心】に関してもこの前の模擬戦じゃあ負けそうになっていたしなあ？

……あれ、【真理】が止めてくれてなかったら、負けてたんじやないか？

なあ、【虚心】からも言ってるやれ」

その言葉に一人縮こまり、じつと資料を読み込んでいた中性的な少年はびくりと震える。そして、肉食動物を前にした小動物のようにびくびくとした様子で顔を上げる。

「え、えつと、ぼ、ぼ、ぼ、ボクは皆さんと仲良くできたらなあって、お、お、おとおおお思います。はい！」

その様子はお世辞にも強者には見えなかった。教室の隅っこで静かに本を読んでいそう。

そんな印象を抱かせる。

彼らのやり取りを見ていた、【真理】と呼ばれた女は見かねて手をパンつと叩き、場を支配する。

【真理】は自分に他の面々の意識が向いたのを理解すると今回渡した資料の内容………つまり会議の本題に入る。

「…では、今回の会議の本題に入るわ。」

今回は政府から依頼された今起こっているクラッキング事件に関して説明していくわよ」

「………はあ!!んなもん俺らの仕事じゃねえだろ?他の組織にやらせとけよ!!」

【不滅】は今回の会議の内容に噛みついて来る。そこには【解毒】に痛い所を突かれた八つ当たりも若干ながら入っていた。

しかし、敢えてその点には触れず、【真理】は冷静に現状を説明する。

「貴方の言う他の組織が、お手上げ状態だから、私たちにお鉢が回ってきたのよ。」

「成程な………しかし、クラッキング………人でありながら、人の世に仇なすか、本当に魔物みたいな奴らだな」

【解毒】貴方の言いたいことは痛い程分かるけれど、どうやら今回は当たりみたい」

その場にいた男三人衆は同時に首を傾げる。

当たり、とは?

しかし、暫く頭を傾げていた【虚心】は何か考えついたのか、弾かれたように手を挙げながら立った。

「わ、わ、わ、分かりました!!。つ、つ、つ、つ、つまり、人間のような魔物でも、ま、ま、魔物のような人間でも、どっちも殺せつてことですね!!」

「……………ええ、そうよ」

「なんだ、簡単じゃねえか」

「ふむ、どうやら今回の仕事も楽そうだ」

余りにもキラキラした目で発言する【虚心】。

そして、残り二人の男どももそれで納得したため、【真理】は説明することを放棄した。

(……………実際、黒幕を殺すことには変わらないし…………………………良いわよね。

というか、問題は【無二】の方よ!!一応場所には検討は付いているし、一応部下に情報を持たせて向かわせたけど…………………………こんな状況だし、いつあの子に情報が伝わるかしら?)

その場にとても緩い空気が流れる。

若干お馬鹿な男衆、額に手を当てる女性。

まるで、大学のサークルのような緩さだが、それでも彼らは紛れもない強者だった。

あらゆる局面に対応できる国が抱える最終兵器、五本の指に入る防人の最高峰。

その名は護懷。

彼らにはそれぞれ別々の称号と役割が設けられている。

【不滅】

その者、何人も殺すこと叶わず

【真理】

その目、何人も欺くこと叶わず

【解毒】

その体、何人も侵すこと叶わず

【虚心】

その心、何人も揺るがすこと叶わず

そして、

長髪を靡かせた女は防人魔法学校の屋上でグツと伸びをする。

そして、大きく息を吸った。

「いやあ、久しぶりの母校。今はくるみると、何より、先輩の息子さんがいるんだよね!!

楽しみだなあ!!

……でも、うちの学校の屋上ってこんなにお洒落だったっけ？」  
女は無断で侵入した学園の屋上で首を傾げる。

【無二】

その技、何人も模倣まねすること叶なわず

真道君には女難の相が出ているのかもしれない……………。

☆☆☆

現在、俺は魔剣士科の教室で座学を受けている。

因みに、通信機器が使えないのは変わらず、だ。

しかも、うちの学校だけでなく、全国で同様のことが起こっているらしい。

交通網も混乱していて、徒歩以外の交通手段が現状ほぼないと言っても良い。

その状態で授業を行うのか？と思われるかもしれないが、うちの学校は全寮制であるため、まったく関係は無かった。

普通に寮長から、明日も学校に行くように言われた。

まあ、教師の寮は無いから、教師は学校に来ることが出来ずに一部の授業がダンジョン攻略に代わっていたりもする。

普通ならとんでもない大事件だけど物理的に生徒がいなくなることがあるのを考えれば多少は平和なのかもしれない。

……………いや、やっぱり、俺のスマホは返せ。

そんなことを思いつつも手は黒板に書かれた内容をノートに写す。

詰まる所、別段変化もない日常を過ごしている訳ですよ。

将来は防人になることが決まっているのに、通常科目の筆記テストがあるから仕方ないね。

因みに、基本的に個別授業である特別防人たちも座学だけは一緒に受ける。

俺としては座学なんて受けず、一生実技の訓練だけをしていて欲しいんだけど……………。

いや、そうなると思われ、もしくは原始の時代の荒くれものが生まれるか？

……………やっぱり、座学は大切だよね！

偉い人達ってやっぱり色々考えてるのかなあ。

ガラガラ

教室の扉が開く音がする。

誰かがトイレに行った訳でもないのに……………授業中であつても伝えておかなければいけない緊急の要件だろうか？

俺はそう思いながら、扉に視線を向けた。

………知らない女が立っている。

その女は整った顔立ちで子供のように無邪気に笑い、長い黒髪を編み込んでいた。

マジで誰だよ!!

不審者!!

「たのもおおおおお!真道才君はいるかあああああ!」

授業中なのに大声出すな!!

まあ、主人公の知り合いなら納得か………。

俺は一人でうんうんと頷く。

そして、真道君を見る。

ほら、呼んでいるぞ、主人公(偽)

因みに、早よ行けというのはクラス全体の総意であつた(教師含む)

☆☆☆

俺は目を白黒させ、腕を掴まれながらも、されるがままとなる。

一体何がどうなっているのか、何故こんなことになっているのか、俺自身、状況をあまり、理解できていない。

というのも、知らない女が教室に入つて来たかと思つたら、あれよあれよとここまで連れてこられてしまったのだ。



ただ、悪意を持つているようでもないし……………特別防人に関する事項を知らせに  
来た行政の人間だろうか？

それにしては随分と態度も服装もラフな気がするが……………。

…いや、服装に関しては、短パンに黒タイツ、白のTシャツにヒートテックという服  
装ではあるが、戦闘服か？

俺は、衣服から微かに漏れる魔力からあたりを付ける。

と、なると十中八九防人……………任務の協力要請？

俺は周りを見渡し、人の気配が無いのを確認して女に声をかける。

「この辺で良いんじゃないですかね？要件は何ですか」

女はその場でキョトンと首を傾げる。

人気がないとはいいえ、流石に廊下の真ん中では不味い話か？

「分かりました。では屋上に行きましょう」

俺は屋上までその女性を誘導する。

何か、内密で話したいことがあるのなら、あそこが最適だろう。

…まあ、雪白先生が使っていなかったら……………だが。

俺は屋上へと続く、階段を上り、屋上の扉を開く。

どうやら、誰も使っていないようだ。

「どうぞ、入ってください」

俺は女の中に入るように促し、女が入った後、扉を閉め、中に入る。

「それでは改めて、俺に何の用でしょうか？」

「ええ、急に言われても……………そうだなあ、あんまり深い理由とかは無いんだけど、強いて言えば顔を見に、かなあ？」

「は？」

俺は思わず素っ頓狂な声をあげてしまう。

わざわざ、授業中の教室に入って来た理由がただ、顔を見るため？

ふざけているかとも思ったが、眉間に皺をよせ、腕を組みながらうんうんと唸っている女がふざけているとも思えない。

……………真面目に言っている、と思っても良いのだろうか？

もし、仮に、そう仮定したとしたら、彼女は俺と密接な関係を持つ人物ということになる。

しかし、俺は彼女の顔に見覚えがない。

「……あの、お名前をお聞きしても？」

「ああっ！そうだった、そうだった。そう言えば、自己紹介がまだだったね。」

私の名前は弧毬信濃こまりのぶの。よろしくね才君」

俺はその女の顔には見覚えが無かったが、弧毬信濃という名前には聞き覚えがあった。

『父ちゃん、お帰り!!』

『おっ、ただいま、才。』

『今日はどんな魔物やつつけて来たんだ!!』

『ん、今日も魔物をやっつけてはないなあ。今、父ちゃん教育係やつてるからさ。』

こいつがまた生意気なんだよ。………ただけど、俺

に娘がいたらこんな感じになかって思うんだよなあ。生意気だけど、時々甘えてくるこ

ともあつてそんなところも可愛いし』

『また、その話かよ!!』

当時の俺はそう言って直ぐに、部屋に籠ってしまっていた。

俺には親父しかいなかったし、その唯一の肉親を取られてしまったように感じたの

だ。

その少女の名前が確か、弧毬信濃こまりのぶの。

親父が死ぬ前に何かあったら、助けてもらえ、逆にノブが困っていたら、助けてやれって言われた。

「弧毬さんですね。生前親父から可愛い後輩の教育係になったと話は何っていました。改めまして、真道才です。よろしくお願いします」

「……うん、よろしく！私も先輩から目に入れても痛くないくらい可愛い息子がいるって話は聞いてたよ！」

「ははは、そうなんですか。……それで、弧毬さんは親父の息子である俺に会いに来てくれたということでしょうか？」

「うん、今まで会いに来れなくてごめんね。防衛任務とかもあったし………私自身も気持ちを整理できなくて。」

「いえ、良いんですよ。俺自身、最近になって整理が出来ましたから」

「………そっか、それでもやっぱりごめんね」

俺としては、母方の祖母の下で暮らしたため、不自由体は無かったし、本当に気にしなくて良いのだが、何故かお互い無言になってしまふ。

弧毬さんはその空気を変えようと無理やり話を振ってくる。

「そ、そう言えば、才君は何の食べ物が好きなのかな？」

「えっ、そうですね……エビフライでしょうか？」

「エビフライ、良いよね！私も好き、プリプリの海老にサクサクの衣はさいきょう!!」

「ですよね！つとすいません。まだ、授業の途中だった……。すいません、俺は授業に戻ろうと思います。」

「あ、そっか、ごめんね。授業中に呼び出しちゃって、一目でも君の顔を見ておきたくて」「いえ、俺もあなたと話せてよかった。」

俺はそう言うのと彼女に頭を下げ、屋上を離れようとする。

しかし、俺は一度、振り返って弧毬さんに問いかける。

「弧毬さんは今は何をなされてるんですか？」

なんてことのない質問だ。ただの気まぐれと言っても良い。

だが、

「私？私は護懷をやってるよ。称号は「無二」。そうだ、ここで待ってるからさ、後で勝負をしない？才君」

俺の思考が止まる。

だって、その称号の前任者は親父だったのだから。

☆☆☆

うーん、真道君は今頃何をしているのだろうか？

俺は授業にもあまり集中できずに真道君のことを考えてしまう。

もしかして、これが恋!!

なんて、そんな訳ないんですけど。

しかし、マジで誰だったんだあの人、真道君を連れて行って、どうするんだ？

クソつ俺にもっと力があれば……………。

俺が何も出来ず真道君を連れ去られてしまった無力さに打ちひしがれていると、扉が再度開き、真道君が入ってくる。

おお、真道君無事だったか。

「真道、話は終わったのか？」

「はい」

「よし、席に着け。」

教師はそう言うのと授業を続ける。

生徒たちは何を話していたのか気になるのかちらちらと真道君を見る。

ただ、肝心の真道君は上の空で、授業の内容も生徒の視線も気づいていないように見える。

その後も真道君はどこか上の空で授業を受けていた。

因みにそんな真道君に意識を持っていかれていた俺も授業の内容をほとんど聞いていなかった。

あ、丁度いい所に毒ノ森君発見、ちよつとノート見せて貰っても良い？

☆☆☆

授業が終わり昼休みになった頃、上の空だった真道君は、いつもよく一緒にいる剣凧さんたちと少しだけ話し、教室を出て行った。

怪しい、とても怪しい、俺の名探偵としての勘が事件の香りがするって言っている。

「ごめん、ちよつと急用が出来た。」

俺は先程借りたノートを机の引き出しにしまうと真道君の後をつける。

「ええ、ほんとに今日どうしたの……………」

背後で毒ノ森君のそんな声が聞えた気がした。

真道君はどこか上の空のまま、歩く、歩く、歩く。

通常時なら、直ぐに気づくであろう俺の尾行にも気づいた様子はない。

それだけ、彼にとって、重大な何かが絡んでいるんだろう。

正直、俺としても他人の事情に深入りするのはどうかと思うが、彼には世界を救うという義務（俺が決めた）がある。

だから、こんな所でうんうんと悩まれても困るのだ。

俺は完全なる理論武装を身に纏い真道君の後を付ける。

流石に、女性関係の問題でないことを祈る。

特に、修羅場のなやつ。

でも、さつき教室に来たの女の人だったし、やはりそうなのか？

彼、一応主人公だし。

そう思いながら、俺は真道君の後をつける。

どうやら、彼は屋上に向かっていているようだ。

一応、雪白先生の模様替え？リフォーム？により現在は以前と比べて屋上で昼食を食べる生徒も増えたが、現在、真道君はいつも一緒にいる剣風さんとは別行動をとっている。

屋上、上の空、剣風さんと別行動。

……ふむ、成程、逢引きか。



俺はそう思いながら、ついて行く。全然人の恋路とか興味が無いけど、ほら、俺も真道君のサポーター（自称）として様子を見る必要があるかなって、流石にほんとに逢引きならコツソリ出てくから、さ。

そうしている間にも真道君は屋上への歩みを進め、屋上の扉を開け、中に入っていた

俺も外から中の様子を覗く。

するとそこには、教室に入って来た女の人と雪白先生がいた。

しかも、二人はサングラスをつけ、パラソルを差し、寝そべれるタイプのビーチチェアに腰かけている。

因みに手元にはドリンクも置いていた。

いや、うちの学校満喫しすぎだろ！

まあ、それは雪白先生にも言えるんだけど。

真道君は一瞬だけ、体が硬直していたが、直ぐに気を取り直したのか彼女に歩み寄る。きつと、真道君も驚いた顔をしてたんだらうな。こつからだと表情は見えないけど。あちらの女性（雪代先生じゃない方）も真道君に気づいたのか、サングラスを取る。

「やつほく、才君まっつたよ。」

「あ、ああ、それで、何で雪白先生と一緒に？」

「え、そりや、昔の同僚、しかも先輩が相手なら挨拶もするでしょ？」  
えっ？雪白先生と同じ職場の人なの？

なら教師だったってことか？

「なっ、なに？なら雪白先生も護懐なのかつ!!」

ええええええええええええええええ、雪白先生が護懐!!

ていうか、この人も護懐!!

マジで!!

# いくらなんでも圧倒的過ぎない? (修正)

☆☆☆

まさか、防人の中でも上位五人しかなれない護懐とかいうトップランカーに会うことになるとは……

しかも今日で二人、片方は元護懐だけど………。

世間って狭ええ。

ていうか、やつぱり、護懐って一応いるのか。

主人公の父親以外は設定も作っていなかったらいなくてもおかしくないと思ってたけど………。

うーん、やつぱりこころは補完されているってことなのか。

もしくは、俺がこの世界のことを思いつき勘違いをしているだけなのか。

いや、今はいいや、取り敢えず重要そうな話をしているから、そつちに意識を向けるか。

「それでさ、真道君ってこの後暇ある?」

「え………まあ、あるにはありますが。」

「そうですね。真道君は、特別防人なので、昼休み終わりのダンジョンに潜るかどうかも自己判断ですからね、実質この後はフリーですね。」

ふむふむ、この後の真道君の予定を聞くなんて、ほんとにデートっぽくなってきたな。

「だったらさ、勝負しようよ。今から!!」

「……っえ!!今からですか!!」

?

何か勝負する流れになった。

一体何がどうなってるん?

なんの勝負?

俺は頭に疑問符をいくつも浮かべる。

ただ、疑問符を浮かべていたのはどうやら俺だけではなかったようだ。

「勝負ってゲームをしようってことですか?」

「へっ?違うよ。戦おうってことだよ!」

「いや、なんで勝負するんですか?!戦う理由もないのに!」

「……っえ?急にそんなこと言われてもなあ。」

強いて言えば、ほら分かり合えるじゃん。戦った方がさ、お互いのことが。」

「ついや、戦わなくても分かり合えるでしょ。話し合えば……………」

「そう? 私と先輩は初めての挨拶の時に戦って分かり合ったけどなあ?」

最近の子はそうじゃないの?」

おつ、真道君がびくって動いた。

ムムム、お父さんの話題だったからだろうか?」

確か、真道君はお父さんみたいな人になりたいとかなんとか、設定があつたはず。

今のはお父さんの話を出されてついつい反応してしまったって所かな?」

無駄な戦いを好むタイプじゃないけど、お父さんの話題を出されたら……………彼にとつては無駄な戦いじゃなくなるのかな?」

「…分かりました。勝負しましょう。あくまでもお互い怪我をしない程度で。」

「やったあ! じゃ、ハンデとしてマジックチップは使わないであげる!!」

「はっ? 本気で言ってるのか? ……じゃなかった本気で言ってるんですか?」

護懐の人のセリフに真道君は目を白黒させる。

まあ、確かにこの世界の戦い、特に人間界ではマジックチップがものをいう。

それを考えれば彼が驚くのも無理はない。

ただ、この世界には魔法の他に固有魔力波というものがある。

彼女の能力が汎用性の高いものであれば、この申し出もそこまでおかしくはない。

まあ、俺もそこまで固有魔力波に詳しい訳じゃないけど。いや、すいません作者なのに……………。

正直、そろそろ、俺の作者としてのアドバンテージが無くなってきたらよな。前にも話したけど、序盤しか話は作ってないし……………。

俺がそんなことを考えている間も話は続く。

「本気も本気、だって私ならそれで余裕だもん。」

「いや、ですが……………」

真道君は雪白先生をちらりと見る。

それに対し、雪白先生は手元にあるジュースを少し飲んだ後にのんびりした声音で真道君の懸念に答える。

「好きにさせたらいいですよ。少なくとも怪我はしないと思うので。」

「ねっ？だから、大丈夫だよ。あつ、それとくるみん、審判任せても良い？」

「え、無理です。先生はここで森林浴をするっていう大切な用事があるんです。」

そう言うと、雪白先生はどこからともなく、タオルケットを取り出し、自分の膝にかけ、ビーチチェアの腰掛を更に倒す。

あれ、完全に寝る体勢だろ。

「やっぱり、やめましよう。審判もいらないですし。」

真道君はよほど護懐の人のことが心配なのか戦いの中止を提案する。

まあ、確かにマジックチップを使えるのであれば、咄嗟の際に防御魔法で自分の身を守れるけど、マジックチップを封じちゃったらそれも出来ないだろうからね。

これが戦人とかだったら別なんだけど……………。

「うーん、そうだよねえ。本当はくるみんなに審判お願いしたかったんだけど仕方ないね。そこで隠れてる子にお願いしよつか。」

そう言うと、護懐の人はこちらをジッと見る。

えっ?

バレてます?

いやあ、そんな筈ないよね。

俺は息を殺し、ジッとその場で丸くなる。

絶対ハツタリ。ハツタリであってくれ。

「もー、わかってるんだからねー。真道君が入って来た時に一緒についてきてたの!!」

うん、バレてますね。

完全に。

俺は仕方なく屋上の扉を開き、中に入る。

いや、バレるなんて思ってもいなかった。

まあ、護懐がいた時点で気づくべきだったんだけど、まさか護懐に会うなんてそもそも思ってたなかったし、うん、仕方ないか。

「もしかして麗か？」

真道君はついてきた人間を剣風さんと勘違いしているらしい。

残念だけど、同じクラスのモブPです。

なんてね。

「…いやあ、すいません。…えっと初めまして音長です。

ちよつと、教室での真道君の様子が気になってついてきてしまいました。」

気まずい。

どうせ、誰も碌に名前も覚えていないようなモブが出しやばってすいません。

「お前、同じクラスの音長盆多だろ？……ついてきてたのはお前だったのか」

真道君がそんな風に俺のフルネームを言い、ついてきていたのに驚く。

えっ、真道君。君、俺の名前覚えてたの？

「お友達？」

「…いや、そういう訳でもないけど……。同じクラスの仲間だしな。名前は覚えてる。」



真道君ッ!

君つてやつは!

俺ですら未だにクラスメイトの名前全員は言えないのに!

「ほへへ、そつか。よろしくね。音長君。それと審判頼めるかな。」

えっ? いやあ、流石に、めんど、いや、昼食を食べるという大切な用事があるしなあ。

「うーん、む「ありがとうっ!」……はっ?」

「今、うんつて言ってくれたよね。じゃ、行こつか!」

そう言うと、護懐の人は俺を脇に抱える。

その後、何が起こったのか俺には分からなかった。

ただ、視界がブレたかと思ったら、いつの間にか、校庭に立っていた。

多分、転移ではないと思う。

風が吹き荒れ、砂埃が舞ってるし、三半規管がかなりやられて、体がふわふわする。

高速移動の類だと思う。

目で捉えられなかったけど。

ほんとに一瞬で視界が切り替わったみたいな感じだ。

俺と、護懐の人、確か弧毬さんに続き、真道君も、屋上から飛び降り、無事校庭に着

地する。

真道君、身体能力ヤバいな。

勿論、小毬さんの移動速度もはた目から見たらえげつなかつたんだらうけど。

いや、それよりも俺、教室帰りたいですけど!!

「すいません。俺忙しいので……」

俺はそう言つてその場を後にしようとして………足が動かないことに気づく。

そして、俺が足が動かないことに動揺していると小毬さんが俺の耳元に顔を寄せる。

そして、

「ねえ、盗み聞きしておいて何もせずに帰れると思う?」

体の穴という穴から汗が噴き出る。

やばい、完全に虎の尾を、もしくはは龍の逆鱗を刺激してる。

このままだと殺される。

それを本能的に理解する。

……やるしかない。

俺は度重なる命のやり取りで培つた直感に従いそう決意する。

……取り敢えず、二人とも、位置についてもらうか。

「………それでは、二人とも戦闘位置、そうですね十メートル位離れて貰つても良いで

すか？」

「オツケー、良いよ〜。」

「俺もそれで構わない。」

二人はそれぞれ頷き、校庭の真ん中からそれぞれ、反対の方向に十メートル位離れてから魔剣の峰を相手に向けた状態で構える。

「では、はじめ!!」

俺のかけ声と共に、真道君が魔剣の刀身に触れ、仕掛ける。

少し離れて見ている俺の目でも追いかけるのがやつとな速さでの接近だ。

しかも、あれで恐らく基本の肉体強化しかしていないのだから、恐れ入る。

ただ、小毬さんも負けてはいない。真道君の速度を目で追い、的確に攻撃を捌いていく。

しかも、受け流すようにのらりくらりとした太刀筋で豪雨のような剣戟を放っている真道君の方が翻弄されている。

今の所、小毬さんはその場で真道君の攻撃を捌き、時々カウンターを仕掛けるだけに留めている。

その様子に真道君は一度距離をとる。

「……何で肉体強化を使わないんですか？」

「ほほ、私が肉体強化を使つてないって、何で分かったの？」

「貴方は俺の動きを目で追つていなかった。多分、筋肉の動きや視線の動き、後、魔力の気配から、次の攻撃を予測して往なしてますよね。」

えっ？

目で追つてなかったの？

ていうか、肉体強化を使わずに渡り合つてたの？

「だつて、さっき言ったでしょ。マジックチップは使わないって」

「いや、外付けのは兎も角、内蔵のも使わないなんて、ほんとに自殺行為ですよッ!!」

真道君の言つてゐることは百里くらいある。魔力持ちつて言つても、マジックチップを使わなければ少しだけ頑丈で少しだけ身体能力が高いだけの人間だ。

間違つても魔物と戦つていいような存在じゃないし、魔物を屠れる人間とも戦つていい訳がない。

だから、流石に肉体強化くらいは使つてくると思つていたんだが……………。

俺はちらりと小毬さんを見る。

先程の真道君の猛攻を受けても涼しい顔をしている。

「大丈夫って言ってるでしょ?このくらいじゃあ、怪我はしないよ」

「……分かりました。《スパークバインド》」

「どうやら、言っても聞かないと感じたのか、真道君は拘束する方向にシフトしたらしい。」

電気で出来た三つの輪が小毬さんに向かって飛んでいく。

小毬さんはその攻撃を魔剣で受けるつもりなのか魔剣の切っ先を輪に向ける。

バチリ

電気の輪は刀を伝い、小毬さんを拘束しようとする、ことなく、刀身で電気の輪が止まる。

そして、小毬さんが魔剣を振ると、電気の輪は真道君に飛んでいく。

真道君は驚いた顔をするが、しっかりと《ジェネリックシルド》を使い、《スパークバインド》を防ぐ。

しかし、それを見ていた小毬さんはニヤリと笑い、地面に魔剣を刺す。

「いいねえ!それじゃあ、今度はこっちから行くよ。《土球》!!」

その言葉と共に地中からビー玉程度の石の球体が次々と顔を出し、真道君を覆う様に空中で静止し包囲する。

そして、小毬さんが地面に刺した魔剣を引き抜き、天へと掲げ、まるで号令するかの

ように振り下ろす。

瞬間、空中で真道君を包围していた《土球》が一斉に真道君に襲い掛かる。

真道君はそれを《ジェネリックシールド》を自分の体全体を覆う様に半円状にし、全方位から襲い掛かる《土球》を防ぐ。

だが、小毬さんの猛攻はこれで終わりではなかった。

無数に飛んでくる《土球》の攻撃により、《ジェネリックシールド》罅が入り始めた所で小毬さんは魔剣を大きく振るう。

すると、不可視の衝撃波のようなものが真道君の張った《ジェネリックシールド》にぶつかり、ガラスのようにシールドを割ってしまう。

それだけじゃない、シールドに衝撃波がぶつかった瞬間、熱風が全方位にまき散らされる。

どうやら、あの衝撃波は熱すらも伴っていたようだ。

実際、すんでの所で後ろに引いた真道君の制服は少しだけであるが、焦げた跡があった。

「それじゃあ、トドメと行こうか。」

小毬さんはそう言うとその場から掻き消える。

これで勝負は終わり、俺もそう思ったのだが……。

「《ジェネリックシールド》!!」

咄嗟の所で、再度半円状のシールドを展開し、小毬さんの攻撃を防いでみせた。確かにどれだけ見えなくても全方位に防御を展開してしまえば防げるのは道理。

しかも、半円状のシールドによつて斬撃を防がれ無防備な姿を晒す小毬さん相手に今まで使つていなかった魔法を使う。

魔剣がバチリと電気を帯びる。

あれは恐らく、彼が自前で習得した魔法。

「《サンダーバード》!!」

超近接からの真道君の全力火力。

約十メートルにもなる巨大な雷の鳥が小毬さん目掛けて飛んでいく。

既に真道君も手加減をする気はないようだ。

通常の敵であれば、これで丸焦げにされて終わりだろう。

だが、その攻撃を小毬さんは再度魔剣で完璧に受け止める。

感電する様子も見せない。

そして、そのまま魔剣を振り、《サンダーバード》を真道君に向かって飛ばす。

ただ、真道君も負けていない、《ジェネリックシールド》の効力を引き上げ、完全に

防いで見せる。

「ただ、そこで、真道君の足元で轟音が鳴る。」

よく見ると、真道君の足元に罅が入っている。いや、足元に張ってあった《ジェネリックシールド》に罅が入っている。

「むむ、足元は留守だと思っただけだな……………」

「流石に俺もそこまで迂闊じゃないですよ」

真道君はそう言いながらその場から離れる。

それによつて俺にも何があつたのか理解できた。

何故なら、真道君が立っていた場所に拳ほどもある壊れた土の球体が転がっていたのだ。

恐らく、地中から《土球》を使ったのだろう。

仮に真道君が《ジェネリックシールド》を足元にも展開していなかったら今頃、拳ほどもある《土球》により顎を打ち抜かれていたかもしれない。

「うーん、上手くいくと思っただけだな……………。仕方ない、実力行使といきますか。」

小毬さんは魔剣を天に突き出す。

…これはやばい。

審判という第三者のような立ち位置であるにも関わらず、俺の本能は警鐘を鳴らして



いた。

そして、それは実際に相対している真道君も同様だったようだ。

「させるか!!《サンダーウルフ》」

剣を振るい、十を超える雷の狼を生み出し、けしかける。

だが、無駄だった。無駄だったのだろう。

世界が暗転する。

<sup>いかづち</sup>雷が迸る。

真道君の《サンダーウルフ》ではない。いや、もしかしたら、《サンダーウルフ》もその大きな雷に<sup>いかづち</sup>呑み込まれているのかもしれない。

ただ、一つ言えるのは、暗転した世界、<sup>いかづち</sup>雷が迸る暗夜において、小毬信濃の魔剣だけが、確かな輝きを放っていた。

いや、まるで、世界が彼女を照らすために動き出しているようだった。

迸る雷も、突如消えた太陽も、全ては彼女を一番にするために動いているようだった。

「《天剣・白夜》」

その言葉と共に天に向かって掲げた魔剣を振り下ろす。

青と白の輝きが魔剣から放たれ、真道君を狙う。

幅十センチにも満たない極細の光の柱は彼だけを射抜くように一直線に飛んでいく。

傍目からも、絶大な威力を誇ると分かるその攻撃を、真道君は全力の《ジェネリック シールド》で受け止める。

だが、拮抗することは無かった。光の柱は、いや破壊の光は真道君の《ジェネリック シールド》を溶かすようにシールド全体に波及していく。

そして、シールドが粉々に、いや粉すら残すことなく消滅した直後、真道君の体を地中から現れた無数のこぶし大の《土球》で打ち据えていく。

当たり前だが、真道君の意識は既がない。

……こいつ、鬼畜過ぎるだろ。

「えっと、勝者、小毬信濃!!」

俺は一応ながら、この戦いの勝者を宣言する。

うん、正直言つて、真道君が意識を失っているのでわざわざ勝者を宣言をする必要もなかったような気もするが、まあ、勝者の宣言は審判を引き受けたものの義務だろう。

「やった、勝った。」

何か信濃さんもめっちゃ喜んでるし……。

にしても、今思い返しても圧倒的だったな。

小毬さんは真道君の攻撃を簡単に防いでいるのに、真道君は小毬さんの攻撃を防ぐので手一杯になっていた。

これが、護懐の実力。

正直、主人公ならもしかしてと思っていたけど、流石は五指に入る実力者、これ程の差があるのか……。

最後は不意打ちというか防御不可のコンボ技みたいな感じになっていたけど、たぶん、そんなことしなくても真正面からでもゴリ押せたんじゃないかな？

俺は思案にふける。

ただ、小毬さんの実力を分析しようとしていた俺に遠くから話しかける声が聞こえる。

「おーい、音長君！昼休み終わるから自主訓練に行くよ！」

「えっ？うん、今行く！」

どうやら、毒ノ森君が校庭にいる俺を見つけて話しかけてくれたようだ

初めの頃は貧乏くじを引かされたと思ったけど、真道君の現状の実力も分かったし、護懐の実力の一端も見れた、割と有意義に過ごせたな。

俺がそう考えていると、俺のお腹がぐうとなる。

……………そう言えば、昼食べ損ねた。

# あれ？俺の出番は？

☆☆☆

体が重い、瞼が重い。

それでも現状を確認するために、瞼をゆっくりと開けていく。

一体何をしていったんだっただか……………。

そう思いながら、俺は周りを見渡す。

麗と弓弦が心配そうにこちらを見ている。

カルミアが安心したように息を吐く。

そして、

「才君大丈夫!!」

そうだった。

俺はこの人と戦っていたんだ。

それで、勝敗は……………いや、聞くまでもないか。

「……………ええ、何とか、無事です。」

俺は信濃さんを安心させるために体を起こし、微笑みかける。

にしても、最後に受けた攻撃、いや、俺の《ジエネリツクシールド》を割ったあの技は凄まじいものがあつた。

恐らく、初めからあの技を使われていたら、勝負にならなかつただろう。

いや、それだけではない。仮に信濃さんが使ったあの衝撃波の攻撃や《土球》を使われ続ければ俺は防戦一方になっていただろう。

「うん、ほんとにごめんね? 勇利さん基準で考えてたから……」

「ははは、父はそれだけ強かつたんですね。」

「うん!! 魔法も勿論凄かつたけど、剣術と体術が物凄く強かつたんだよ!!」

「へへ、そうだつたんですか。俺、親父が戦つてる姿なんて見たことないから知りませんでした。」

「そうなの?! もし良かつたら私、いっぱいお話しするよ!!」

「ははは、ありがとうございます。今度聞かせてください。」

俺は曖昧に笑いながら信濃さんにそう告げた。正直な話、親父の話に興味がないわけでは無い。

むしろ、じっくり時間をかけて聞きたい。

だが、今は麗や弓弦、カルミアたちがいる。

そして、彼女たちにはまだ親父が戦人であったことは話していない。

だから、この場で親父の話聞くわけにはいかないのだ。麗たちに親父の正体、そして、俺の正体がばれる訳には……………まだ、いかない。

勿論いつまでもこのままでいる訳にもいかないというのは分かっているのだが……………。

特に、今は雷系統のマジックチップを器用に使い、様々な雷魔法を再現していると言いつつ、今は雷系統のマジックチップを器用に使い、様々な雷魔法を再現していると言いつつ、この良い訳がいつまで続くか分からない。

彼女たちだって馬鹿じゃない。むしろ学業に関してとてもいい成績を残している。

実技の実力からも俺の言っていることに違和感を持っていても可笑しくはない。

「でも、いつか必ず聞かせてください。親父のこと、親父とあなたがどうやって過ごしていたのか」

「…うん、いいよ。何時でもね!」

信濃さんは元氣よく笑い、頷く。

「それで、信濃さんはこの後はどうするんですか。」

「……………え?一緒に住むでしょ?」

……………え?

俺の思考が停止する。

信濃さんが一体何を言っているのか分からなかった。

いや、というか

「俺、この後も防人魔法学校に通わなければいけないので……………」

「うん、だから、私も才君と同じ部屋に住むよ?」

「え……………ええええええええええええええええ!!」

何か良く分からないことを言ってきた。

☆☆☆

いやいやいや、流石に不味いだろ!

俺の住んでる場所は男子寮だぞ!

俺の他にも男はいるし、風呂とかどうする気なんだ。

「その、お風呂とかも大浴場しかないですし、信濃さんが入るのは……………その……………」

「あははは、分かってるよ、そんなこと。大丈夫、お風呂に関してはくるみに借りることにしてるから」

成程、それなら確かに、いや、まあ、勝手に女子寮の一部を私物化してるあの人もどうかと思うが、うん、そこは深く考えないでおこう。

とりあえずこれで問題は解決……………してない、全然してない。

食堂はいい。男子しかいないけど、そこまで問題にならない。

ただ、洗濯物とか、着替えとか、寝床とかどうするんだ！

洗濯物は個別で洗って貰えるけど、流石に女性ものを、その、不味いだろ！

紛失騒ぎとかが無いとは限らないし……………。

「その、洗濯をどうするかとか、着替えとか寝床とかの問題もありますし……………」

「ん、洗濯はくるみんの所でするから大丈夫。着替えとか寝床は才君と一緒に良くない？」

「いや、良くないですよ！その、良い年した男女が、その、そんな、よ、良くないですよ！」

「え、何でさ。先輩とは一緒に温泉とかにも行ったよ。裸の付き合いしたよ？」

「そ、それは、子ども時の話ですよ？俺とあなたは大人なんですよ！」

「別にいいじゃん。先輩の子供は私にとっても弟みたいなものだし、…あつ、何だったらお姉ちゃんって呼んでも良いんだぞ？」

俺の体に抱き着きながら、耳元で信濃さんはそう呟く。

顔が熱を持つのを感じる。信濃さんはその、美人だし、スタイルも良いし、急に抱き着かれたらドキドキするとうか……………。

声も耳元で、しかも、い、いきなりお姉ちゃんって、きゅ、急すぎるだろ！



そもそも、血だつて繋がって無いのに。

「な、なに言ってるんですか!ち、血だつて繋がってないじゃないですか!冗談もほどほどお願いします」

じゃないと心臓が持たない。今も心臓がバクバク言っている。

大丈夫か?こんなに密着しているし、ドキドキしてるの気づかれてないよな?

大丈夫だよな?

抱き着かれてるせいで、お互いの顔が見えない。

流石にこのドキドキがばれてないと良いんだが…………。

暫くして、信濃さんは俺から体を離してくれる。

顔には苦笑いを張り付けて。

「…あははは、ごめんごめん、怒らせちゃったかな?」

そう言いながら、信濃さんは俺に背中を向ける。

「うくん、最近の子は難しいなあ。でも!」

信濃さんはそこで振り返り、人差し指をピシッと俺の方に向ける。

そして、にかつと笑う。

「ぜくつたい、もつと仲良くなるよ才君と!」

えっと、これは何だろうか？

告白とは違うだろうし、宣戦布告？

別に仲良くなるのは俺としても一向に構わないし、むしろ親父のことをよく知っている彼女とは俺としても仲良くしたいとは思うのだが…………。

「べ、別に仲良くなるのは良いんですよ？むしろ俺も仲良くして欲しいくらいですし。ただ、

男女の仲ですから、その、部屋を一緒にするのは良くないのではないかという話です……………」

俺は信濃さんにそう伝えようとしたが、信濃さんはいつの間にかいなくなっていた。何というか、嵐のような人だったな……………」

☆☆☆

真道才らと別れた弧毬信濃は屋上にいる雪白狂実に会いに行っていた。

「…どうでしたか？勇利さんの息子さんと会った気分は？」

雪白狂実は今もパラソルとビーチチェア、タオルケットというオフモードを維持しつつ、弧毬信濃に問いかける。

問いかけられた、弧毬信濃は校庭の柵に体を預けながら、苦笑する。

「そうだなあ。もっと早くに会いに行くべきだったなあとは思うかな？」

その後、「ま、元氣そうで何よりだったけど」と付け足す。

雪白狂実はその言葉にため息を吐く。

表面上はニコニコしていても、内心ではうじうじしている所は昔から何も変わっていない。なかつたからだ。

「そのことはよく。私もなくんども忠告したのですよ。傷ついているのはあなただけではなく。彼もまた、実の父を失って悲しんでいるのですよ。つて。」

「あははは、ごめんごめん」

「別にいいですよ。そもそも私はよく、終わったことをうじうじ考えても仕方ないと思っているのです。もっと合理的に考えていきましょ。切り替えく切り替えく」

雪白狂実はどこまでものんびりとその様なことを言う。

一見興味が無いようにも取れるこの言動はしかし、その実彼女なりの精一杯の励ましののだ。

うじうじとしている同僚を励ますために、精一杯激励の言葉をかけているのだ。

付き合いの長い小毬信濃もそれが分かっているのか、表情を和らげる。

「うん、ありがと、くるみん。」

「別に良いのですよ。人生の先立ちとして当たり前前のことを言っただけです。それに今の私は先生ですのです。」

「そっか、くるみんなが先生か。みんなちゃんと前に進んでいるんだね。」

「……あなただつてそうでしょう？だから、今更になつて真道君に会いに来たのでしよう？」

「……どうだろ。私は今も昔も■■■■に飢えてるだけなのかもしれない。彼に勇利さんの影を重ねているだけなのかも」

「……少なくとも、私の目から見たあなたと勇利さんの関係は薄つぺらくなかったですよ。」

「ありがと。私にとって先輩は特別だから」

「そうですか。」

「うん」

それから暫く、二人の間に沈黙が流れる。

ただ、雪白狂実も小毬信濃もそれを苦痛だとは思わなかった。

真道勇利と弧毬信濃の関係程ではないにしろ、雪白狂実と弧毬信濃は間違いなく友と呼べる関係であつたのだから。

「……信濃さんにとつて。真道君はどういう存在なんですか？どうなりたいんですか？」

「そうだなあ。先輩の大切な子供で、……私は才君の■になりたい、かな」

「……なら、真道君についてもっと、もっとく、知らなくちゃいけないですよ。」

「うん、ありがとくるみんな。出来るだけアタックしてみるよ。ま、取り敢えず、荷物とつて来ないとね。」

弧毬信濃はそう言うとその場から掻き消える。

恐らく、件の高速移動でこの場を後にしたのだろう。

雪白狂実はその姿を見届けるとため息を吐く。

「なんだかあ、空回りしそうで心配なのですよ〜」

その言葉は誰にも届くことなく、風に流されて消える。

☆☆☆

俺は自らの魔剣でもって敵の一撃を受け止める。

だが、生憎敵は一体じゃない。

「麗、一緒に食い止めるぞ!弓弦援護を頼む!カルミアは付与魔法を!愛華はいざと言  
う時の為に防御魔法を待機させておいてくれ!」

「二はい!(ああ!)二二」

現在俺たちはダンジョンにいる。麗達には信濃さんとの模擬戦の後であるため、ダン  
ジョンに潜るのは渋られたが、俺からすれば魔法すら使っていない相手に負けたのだ。

このままジツとなんてしてはいられない。  
もつともつと魔物を倒して強くなる。

そして、今度こそ信濃さんとの勝負に勝つんだ。

俺と麗が鬼人型の足軽組頭級の魔物攻撃を防ぐ。

そして、その隙に弓弦が《プロミネンスレイ》を放つ。

これは高熱の炎を一点集中させて放つ、超攻撃型の魔法だ。

勿論生産コストも高いために通常では学生に支給されることは無いが、そこは特別防人としての功績があるため、特別に支給されている。

鬼人型の魔物はその超火力の一撃を受け、一体は体を炭化させる。

そして、もう一体もあまりの熱量に距離を取る。

因みに俺と麗にはカルミアが付与魔法を愛華が防御魔法を使い熱から守ってくれている。

だからこそ、俺は怯むことなく前に踏み出す。

「終わりだ！《サンダーボルト》」

俺はそう言いながら、自分の力で発動した《サンダーウルフ》を放つ。

敵は俺の《サンダーウルフ》になすすべもなく外側と内側から電熱により焼かれ、倒れた。

因みに俺のチップ構成は片方が《ジェネリックシールド》、もう片方が《サンダーボルト》になっている。

《ジェネリックシールド》は兎も角として《サンダーボルト》を入れている理由としては他の雷魔法と比べて操作が楽であり、様々なアレンジを加えることが出来るからだ。

これを使い俺は今まで彼女たちから自分の正体を隠して来た。

「よし、今日の所はここまでだな。みんな帰ろうか!」

「ええ、ていうか見た!私の魔法の火力!」

「ふん、お前の魔法と言うより、実家のコネだろ?弓弦」

「何よー私が特別防人になれるだけの實力を示したから学校が支給してくれてるのよ!そもそも私以外が使ってもあんな火力出ないわよ!」

弓弦と麗が口喧嘩を始める。二人は元々一緒にパーティーを組んでいた仲だからか、ああいう風によく喧嘩をする。

因みに麗が弓弦にいった実家の話に関しては元々弓弦の家は裕福で防人というか、国防の為にかなりの援助をしており、相応の権力を持っていることについて指摘しているのだろう。

勿論、彼女のたゆまぬ努力があつたからこそ、《プロミネンスレイ》を支給されたの

だろうか…。

実際、他の人間では同じマジックチップを使ってもあそこまでの火力は出せないからな。

俺は二人のやり取りを微笑ましく眺める。

すると、何故か話題の矛先が俺に移る。

「そもそも、凄いと言ったら才の方だろう？なんせ、《サンダーボルト》をあたかも《サンダーウルフ》や《サンダーバード》のように変化させて使っているのだからな！」

「ぐう、そ、それは認めるけど、っていうかほんとにあれどうやってるのよ！私ですら出来ないのに！」

「あははは。まあ、その、たゆまぬ努力、かな？」

「お前が大したことないというのもあるだろうがな！」

俺は罪悪感に苛まれながらもそう誤魔化す、ほんとはマジックチップなんて使わずに他の魔法を行使しているだけだから凄く、居心地が悪い。

……………いつかちゃんと話さないのだよな。

☆☆☆

俺は麗達と別れて男子寮にある自分の部屋に帰る。

帰りながら、結局、最後まで弓弦と麗はいがみ合いながら帰っていたなと思いつく。



まあ、あれは二人の間のコミュニケーションのようなものだし、気にすることでもないんだが……。

俺はそう思いながらクスリと笑う。

俺のパーティーも随分賑やかになったものだ。

いがみ合いながらも息がぴったり合っている弓弦と麗、それを仲裁するカルミア。

その様子を後ろで微笑ましく見つめる俺と愛華。

何だかようやく歯車が動き出した気分だ。

俺はそう思いながら、自分の部屋のドアノブに手をかける。

そして、扉が開かれると共に、

「おっかえりく、遅かったね才君」

俺のベットに腰かける信濃さんが目に飛び込んできた。

久しぶり!! 今日も出番が少ないけど主人公です。

☆☆☆

昨日は凄い疲れた。

何故か信濃さんが俺の部屋にいて、勝手に部屋に泊まろうとしたのだ。

それを何とか説得して……………。

いや、全然説得になってはいなかったか。

俺がどれだけ男女同じ屋根の下で過ごすことが危険か説いても全然聞き入れてくれないから最終的に力づくで追い出す形になってしまった。

勿論、信濃さんが本気で抵抗していたら、俺の方が成すすべもなく倒されていただろう。

だからまあ、俺の本気度が伝わったから、自主的に行ってくれたと言った方が正しいのかもしれない。

うん、……少し、悪いことをしたな。

次あった時、もう少し優しくしよう。

ところで、話は変わるんだが俺は今寝ている筈だ。

うん、今も意識がふわふわしており、瞼も閉じている。

ただ、この通り、考え事が出来るくらいには浅い眠りだ。

というか、何か俺のベット、固くないか？

あと、冷たくない？

布団はどこだ？

何か、おかしいな、この感じ。

俺は重い瞼を開け、体を起こす。

そして、ベットに触れる。

うん……………床だ。

紛れもなく床だ。

俺は何で、床で寝てるんだ？

そう思い、自分のベットに目を向ける。

……………何でいるんだ？

俺の視線の先には大の字で気持ちよさそうに寝ている信濃さんがいた。

目を擦る。

だが、やっぱりいる。  
夢じゃないみたいだ。

どうしようか？

俺は時計を見る。時刻は現在朝の四時。

この時間に起こすのは流石に可哀そうだよな。

俺は仕方なく、自室にあるソファへと移動し、横になる。

一応、男子の友達部屋に遊びに来た時のことを考えて買っていたソファだったので、まさかこんな使い方をすることになるとは……………。

俺は、予備の毛布を取り出し、自分にかけてと再度、夢の中に落ちていった。  
床よりはやっぱりましたな。

「…………い、い、起きろ、朝だぞ。」

誰にかに肩を強く揺すられる。

初め、地震かと勘違いしたほどだ。

しかし、人の声を聞き、どうやらそういうことではないと理解する。

俺は重い、非常に重い瞼を開ける。

そこにはやはりと言うか、何と言うか、信濃さんがおり、俺を見下ろしていた。

「おは、ようございませす。」

何とか重い体を起こす。

やばい、全然休めた感じがしない。

床で寝てたのと、夜に一度起きているのが効いている。

片手で頭を押さえながら、現状を分析する。

俺のその様子に信濃さんは呆れたように息を吐く。

「もう。ちゃんと休んで昨日の疲れを癒さなきゃ駄目だよ?」

常在戦場の心構えだよ!!」

信濃さんは堂に入ったファイティングポーズを取りながら、俺に忠告をする。

：確かに、寝る場所が床だろうが、ソファだろうが、疲れを癒さなきゃ駄目だよな。

現在はかなり恵まれた環境にいるし、プロの防人も野営をすることは滅多にないが、

親父の故郷である戦人界では野宿することも珍しくなかったそうだ。

というのも、戦人は人間と違い容易に魔法が使えるため、文明レベルはそこまで進ん

でいないのだとか。

そのため、街と街を移動する際には野宿することも珍しくないと聞いていた。

流石に戦人界にいく事はないと思うが、それでも、常在戦場の心構えは確かに必要ではあるだろう。

と  
……………正直、少しだけ、俺のベツトを勝手に使った信濃さんに言われるのは釈然

しないと思ってしまう自分もいるが……。

いや、そう思ってしまうのは俺が未熟であるが故か。

おそらく、信濃さんは俺に常在戦場の心構えと共に心を常に冷静に保つ修練を付けてくれているのだ。

だから、この程度で心を揺さぶられては駄目だ。

ま、まあ……………それはそれとして、

「そ、その、昨日も言いましたが、男女が同じ屋根の下、それも同じ部屋で一夜を過ごすなんて良くないと思います。」

「もう、まゝた、そんなこと言つて、才君は先輩の息子さんなんだからそんなこと気にしなくて良いの!」

いや、俺が親父の息子であることとこの件は一切関係がないと思うのだが……………。

もしかして、これも、修行の一環なのか?

俺が少しでも、彼女に、その……………邪な思いを抱いたら、首を搔つ切る、的な?

この先、女性型の魔物が現れても、動揺しないための修行?

いや、もしかしたら、魔力持ちの犯罪組織を相手にした際の対処法か?

確かに、犯罪組織の中にはマイクロピキニを着た魔剣士もいると聞いたことがある。

そういうことか?

ずっと先を見て、指導してくれているのか?

彼女は。

いや、いや、でも、やっぱり、良くないだろ。

そこまで早急にやるべきことでもないし。

「んんん、信濃さんの言いたいことは何となく分かりました。

ただ、やはり、男女で部屋は別れた方が良いと思います。」

「……なるほど、そう言う年頃か」

年頃?

いや、成程、信濃さんもまだ、そう言った修行を行う時ではないと悟ったのだろう。

そういう女性への免疫っていうのは徐々に時間をかけて自然と身に着けることだからな。

こんな風に強引に進める必要はない。

一步一步、その……女性との経験も積んでいけばいい。

まあ、まだ、彼女もいない身ではあるが……。

そう言えば、他のパーティーメンバーはどうなんだろう。

今日、麗に聞いて見るか。

因みにこの後、信濃さんが俺の部屋で着替えを始めたので、俺は急いで部屋から出て行った。

しかも、着替えが終わった後、食堂にも、付いてきた。

そのせいで、俺は男子寮に学園外の女性を連れ込む、変体野郎と呼ばれるようになった。

何でこんなことに……………。

☆☆☆

ぐぐぐつと伸びをする。

今日も良い朝だ。

もう少し寝ようか？

まあ、そうしたくても、出来ないんだけど、もう六時半だし。

俺は仕方なく、誠に遺憾ながら、支度を開始する。

まずは、部屋にある洗面所に行き、顔を洗い、髪を整え、歯磨きをする。何故かうちの寮ではトイレと風呂は共同なのだが、洗面所だけは設置されている。噂では朝の時間



に共同の洗面所がごった返すため、洗面所だけ後付けで作ったと言われているが、正直真相は闇の中だ。

歯磨きを終えた俺は空のクローゼットの扉を閉め、クローゼットの横についている制服模様がついたボタンを押す。

すると、ガチャンという音が鳴る。

中を開くと、クリーニングしたての制服が入っている。

基本的に一日来た制服はこのクローゼットの中に入れボタンを押すことでクリーニングを行うことが出来る。そして、次の日の朝に再度ボタンを押し、制服を取り出す。

仮にクリーニングが途中だったとしても、予備の制服も入っているため安心だそう  
だ。

俺はそうして、取り出した制服に袖を通していく。因みに、私服に関しても私服用のクローゼットに入れば同じように対応してもらえる。

大変良き。

ただそれはそれとして正直、休みたい。

もつと、休みたい、だらだらしたい。

でも、仕方ない。

このままだにご飯をくいっぱぐれることになるし……………。

それは嫌だ。

一生休みでいい。

マジで。

ただ、そうすると何も口に出れずに死ぬ。

布団も、雨風を防げる住処もなくなる。

ほんと、世の中って不自由に出来てるよね。

俺はそんな風にならなくてもいいことを考えながら、着替えを終える。

何時もの制服姿だ。

そして、制服に着替えた俺は毒ノ森君の部屋をノックする。

「おはよう、毒ノ森君」

俺がそう呼びかけると、扉がガチャリと開き、毒ノ森君が出てくる。

毒ノ森君の姿は既に着替えを終え、寝ぐせなども整えられていた。

流石、準備が早い。

因みに、今日、俺が毒ノ森君を呼びに来たが、これはお互いに交互で行っている習慣だ。

まあ、相手が起こしてくれから自堕落でいいかっていう考えに陥らないようにしている感じだな。

俺は毒ノ森君と共に、食堂に向かう。

しかし、そこで俺は違和感に気づく。

いつもはもつと静かな筈の朝の食堂がやけに騒々しいのだ。

ただ、悪いアクシデントが起きているって感じではないような気がする。

もつと、こう、お祭り騒ぎに近いというか、転校生が来た教室のような、そんな物珍

しいものを見つけたときのような騒々しさだ。

俺は何が何だか分からず、首を傾げるが、食堂の中に入ったことでその正体に気づいた。

うん、真道君が男子寮に小毬さん連れ込んでいたのだ。

成程、これは騒ぎになるわけだ。

「あれ、どう見ても女性だよな?しかも、昨日教室に乱入した」

「うん、そうだよ。真道君のプライベートに関わることだから、詳しくは言えないけど……」

にしても、真道君こんな大胆なことをする子だったとは……、俺の小説では十八禁ゲームという設定ではないから、こんな大胆なことをしたりはしないのだが、本来の真道才という人間は割と肉食系だったりするのだろうか?

もつと、奥手な人間だと思っていたのだが、………既に剣風さんたちにも

手を出しているのだろうか？

彼がガツガツいく肉食男子ならパーティーは全員女性だし、成り行きとかでそうなつていても可笑しくないのか？

いや、流石にないか？ ないよな？

一応主人公だし、とはいえ、パーティー内の誰かと恋仲になつてもおかしくはないか。仮に、癒希さんとかが真道君の手籠めにされていたら、棚加君は草葉の陰でハンカチ噛みながら号泣してゐるだろうな……………。

まあ、だからといって俺が何か出来るわけでも無いんだけど……………。

うん、他人の人間関係に口出しは出来ないからね！

すまん、棚加君、成仏してくれ。

俺は心の中で棚加くんに合掌する。

「あれ？ 君、確か、審判を買つて出てくれた子だよな？」

心の中で合掌している俺に対し、小毬さんが話しかけてくる。

後、別に買つて出た訳じゃないです。

「いえ、別に「奇遇だねえ！ ところで何してるの？」

「…………えつと、ここ男子寮の食堂なので普通に朝食を取りに来ました。」

「ふくん、そつか。私たちと一緒に食べる？」

「信濃さん!あまり、音長たちを困らせないでやってくれ!」

小毬さんは俺達を自分たちのいる席まで案内しようとするが、そこで毒ノ森がストツプをかける。

正直凄、ありがたい。

元々、真道君と仲が良い男子は基本的に陽の人たちだから、何と言うか、話も合わないし、何より、今は小毬さんの存在もあり、凄、注目を浴びている。

辛い、陰の者にとって注目を浴びるのは吸血鬼が日光を浴びることぐらい辛いんだ。

というか、人が寄り付くような明るい(色んな意味で)場所とか苦手だし、俺ら実質吸血鬼では?

流石に暴論か……………。

「え、別に音長君だつて困つて無いよ。それに、私だつて、他の人から才君の話聞きたいんだよ?」

「分かった。だったら、後で剣風たち合わせるから、それまで待つてくれ」

「やった〜」

「すまん、迷惑かけたな。音長、毒ノ森」

そう言う、真道君と小毬さんは嵐のように去っていく。

「なんか……………凄かったね?」

「うん、凄かった。」

俺と毒ノ森君はお互い顔を見合わせ、そう言うど強く、強く頷いた。

過去一、毒ノ森君と気持ちちが一致した気がする。

☆☆

信濃さんが押しかけてきてから、俺と彼女は常に一緒にいるようになった。

というか、信濃さんが俺にくっついて離れないのだ。

流石にトイレやお風呂は離れてくれるけど、それ以外の食事、寝るとき、授業中いつも、彼女がついて来る。

そのため、今では信濃さんも大分、有名になった。

『真道が女を連れて来た』というありもしない噂と共に。

パーティーメンバーに弁明するのも大変だった。

麗や千弦、挙句の果てには愛華にまで問い詰められた。

唯一、カルミアだけが、俺を受け入れてくれたが、それでも、俺と信濃さんの関係に  
関しては誤解していた。

まあ、もう終わったことだし、言っても仕方がないか……………。

それじゃあ、弁明が終わった今、信濃さんが何をしてくるかと言うと。

「頑張れー。…右から魔物来るよ!!」

信濃さんの声援と共に、俺達は鬼人型の魔物を倒す。しかし、T字路の右側から、新たにもう一体鬼人型の魔物が姿を現した。

信濃さんの指示通りだ。

「麗フオローを頼む」

「あ、ああ」

俺は自分が前に出ると、敵の右拳を受け止める。

だが、鬼人は直ぐに左の拳を俺に向ける。それを麗が割り込み受け止めた。

そう、信濃さんが何をしているかと言うと一緒に鬼人タイプの足軽組頭級ダンジョンまでついてきて、何故か遠くで応援と指示出しをしてくれている。

因みに、攻撃魔法士、防御魔法士、回復魔法士、魔剣士が揃った俺達、特別防人部隊は現在、足軽組頭級まで自由に出入りできるため、信濃さんは特に監督役という訳ではない。

だから完全に善意で監督役を引き受けてくれているということだ。

ただ、信濃さんは何故か両手にハンバーガーやジュースの入った紙袋を持っており、なんとというか、完全にスポーツの観戦に来たファンみたいな恰好をしている。

「…くっ、済まない。押し負ける」

「どうやら、鬼人の膂力は麗の身体強化を超えているらしい。

麗はそう言うかと愛華たちがいる所まで吹き飛ばされてしまう。

「いや、いい。助かった麗。」

「麗ちゃんそこは受け流しだよ。後、愛華ちゃんも今の所で防御魔法を使って」

うん、現在の護懐として活躍している人から直々に指導してもらえるのは凄いありがたい。

俺達の動きは確実に以前よりも良くなっている。

ただ……………。

「よくし、私も出るよ。」

そう言うのと、信濃さんは魔力波を放ち、〈土球〉を放つ。

そして、敵はミンチにされた。

魔物は俺達に意識が言っており、防御姿勢も取れてなかったもので、一瞬で勝負が決まる。

俺達だけではこうはいかなかっただろう。

紛れもなく、彼女の力が決め手となった勝負だった。

…そう、俺達の力、ではなく……………。

「…え、えっと。信濃さんは見ていてくれて、良いですよ？ピンチという訳でもないです



し」

「駄目だよ!!ピンチになってからじゃ、遅いんだから!」

正論だ。

確かにダンジョンは危険の伴う場所であり、怪我をしてからでは遅いかもしいない。ただ、このまま、信濃さんにおんぶに抱っこで今後やっていけるのか不安があるのだ。最近はやけに事件に巻き込まれることも多い。

今もネットが急に使えなくなるという事態に陥っている。

今のように、信濃さんに手伝って貰ったままの状態で、信濃さんが居ない時に、緊急事態への対処が果たしてできるのか、その考えが頭を過る。

焦っていると喋ってしまえば、それまでだが……………。

「大丈夫、私を頼って!」

「……………え、えっと、ありがとうございます。ただ……………」

「あつ。」

俺が言い淀んでいると信濃さんが目を大きく開き、何かを察する。

そして、目を瞑る。

……………悲しませてしまっただろうか。

慌てて、言葉を探す。

「い、いや、凄く助かってて、ここまでスムーズに抵抗力<sup>レベアアップ</sup>上昇出来たのは信濃さんのお陰だと思つてます。ありがとうございます。それに、護懐の人にこうして指導してもらえ  
る機会なんて全然ないですし、「大丈夫、分かっているから」

そう言うと、信濃さんは悲し気に目を開け、俺を見る。

その表情に俺の思考が一瞬止まる。

「……良いんだよ。だって才君は……」

不味い不味い、何かフオローしなくては、俺の思考は混乱から空回りする。

どうすれば傷つけずに済む？

どうすれば笑顔にさせられる？

俺は必死に頭を回す。

だが、俺が言葉を紡ぐよりも先に、信濃さんが口を開いた。

「……………思春期、だもんね」

「はっ?」

「分かった。私はいなくなるよ。後は頑張れ!!」  
信濃さんはそれだけ告げると、謎の移動手段でもってその場から煙のように消えた。

# 幕間 私はみんなを守りたい

## 幕間 前編

勇利は信濃を連れて防人本部に来ていた。

出来るのならファミレスで信濃と一緒に昼ご飯を食べたかったのだが、残念ながら急ぎの呼び出しだったため、結局代金だけ払い、ここに来る羽目になっていた。

一応、コンビニで軽食程度は買っているが、呼び出しの内容が内容だけに勇利の内心はかなり荒れていた。

勿論、子どものいる手前そんな様子を見せることは出来ないが……………。

「勇利？ 一体本部に何しに行くんだ？」

「ああ……………。どうやら、お偉いさんが俺たちのことを待つてみたいでな。」

「なんだ？ 任務か？」

「ああ、今度、心海市の奪還作戦があるから、そのための作戦会議に参加しろだとき。」

「そうなのかい？ なら、私もレクイエムみたいに戦うぞ!!」

信濃は両手の拳をギュッと握り、やる気を示す。

しかし、それに対し、勇利はため息を吐き、信濃のやる気に水を差す。

「戦わせるわけねえだろ？お前は俺と一緒に後方支援だ。」

「なんでだ！私は強いぞ！魔物なんて私にかかれば、ぎったんぎったんに出来るんだぞ！」

勇利の指示に信濃は噛みつく。

信濃には今まで様々なダンジョンと様々な魔物を倒して来た実績がある。

本人の中では不当な評価を受けていると感じても仕方がないのかもしれない。

それでも、勇利は頷くことはしない。

「ば〜か、そういうのは俺に勝てるようになってからいえ、後、大規模作戦は集団行動が基本だ。お前みたいなじゃじゃ馬がいれば、隊が壊滅し兼ねない。」

大規模作戦に参加したかったら、学校を出て集団行動を身につけてからにしろ」

「〜!!勇利の馬鹿、あほ、頑固者!!」

「はいはい、分かった、分かった」

勇利はなけなしの罵倒を浴びせてくる信濃を適当に流しながら歩く。

この時、勇利は初めて成長限界に達している己の体に感謝をした。

仮にまだ勇利に戦う余地があったのなら、信濃を連れて戦場に出なくては行けなかっただろう。

何故なら、勇利の実力はこの国の五本指に入るほどであり、攻略の要と言えるもので

あるからだ。

(……………まったくこの体に感謝するとはな)

勇利は内心で苦笑する。

しかし、その様子に気づいていない信濃は見るからに怒っていますというように頬を膨らませながら、手を大きく振り、大腿で歩いていつてしまう。

「おいおい、ちよつとは待つてくれよ。」

「ふん！勇利のことなんてしらないからな！」

一人で歩いて行ってしまいう信濃の背を勇利は少し早歩きで追いかける。

遠くない未来でこんな風に実力すらも追い越していくであろう少女の可能性を予感しながら、そして、防人の中心人物として他の防人の道を切り開く存在になることを確信しながら。

「もつと、スピードを上げるぞ！ついてこい勇利」

「ああ、了解だ。」

☆☆☆

防人本部、大会議室。

大きさに関しては学校などにある体育館と同等かそれよりも広いくらいの大きさであり、内部は大学の講義室のようになっている。

そこに、ぎっちりと入っている防人たち。

一応、護懐の一人と言うことで、勇利たちには前方指定の席が用意されていた。現在時刻は昼の十六時二十九分。

しかし、直ぐに、時計の針は三十分を指し示した。

それと同時に、演台の前にスーツを着た恰幅のいい男が立つ。

男は辺りを見渡し、招集した防人の大多数が来ていることを確認するとマイクのス  
イツチを入れる。

「急ぎの呼び出しによくぞ応じてくれた国を守る防人の諸君。

今日君たちを呼び出したのは他でもない、豊富な海産物の産地でもあり、観光名所と  
しても有名であった心海市の奪還の目処が立ったためだ。

勿論、目処が立ったとはいえ急な招集をかけてしまったことには私を含めた防人本部  
の者たちも胸を痛めている。

中には非番の者もいただろう。本当にすまなかった。

しかし、心海市に住んでいる者たちは故郷を奪われた日から今この瞬間も片時も忘れ  
ることのできない痛みを抱えながら日々を過ごしている。

ならば、国の守護者たる防人は今こそ立ち上がらなければならぬ!!

皆の者 拳を掲げろ！胸に愛国の火を灯せ！君たちこそ国を照らす日輪だ！」

それだけ言うと恰幅のいい男は壇上を折りていく。

そして、入れ替わるようにスーツを着て、眼鏡を付けた細身の男が壇上に登る。

「では、皆さんの士気が上がっているだろうこのタイミングで作戦会議に移ります。

心海市の面積は682?、占拠している魔物は天使型、徒大将級数は魔力感知で五体確認、徒組頭級は魔力感知で八体、足軽大将級は魔力感知で四十五体、足軽組頭級は魔力感知で八十体、足軽級は魔力感知で五百体、雑兵級二万體。

まず、〔無二〕を筆頭に裏魔班、香取班、千馬班、国来班、古島班には心海市全域にわたる結界の要になってもらいます。あなた達の他に二百名程、手の空いている防御魔法士に声をかけているのでご安心を。

当然、出来ますね?」

その言葉に勇利は強く頷く。

自分一人ではどうやっても三分の一を覆うのが限界ではあるが、この面子なら出来ないことはないと感じていたからだ。

また、細身の男は出来ないことは言わないという信頼も誠に遺憾ながらも多分に含まれていた。

その後の会議にて、内部に潜入する班を決めていく。

一つの隊の合計はおおよそ十五人まで、街の多方面から攻める作戦となる。



と言うよりも、一昔前ならいざ知れず、殆どの街が奪還された現在は攻めるよりも守ることに重きを置いており、行動を起こすまでに時間のかかる組織だった動きよりも少数で素早く動き鎮圧出来る小数編成での部隊が主流となつてゐるため、即席で大隊を作るよりも小隊程度の人数に抑えた方が前線で戦う防人たちが動きやすいのだ。こうして様々なことが決まつていき、作戦会議は終了する。

作戦開始は今から十六時間後。

☆☆☆

防人本部にて信濃と別れた勇利は一度家に帰り、自分の息子の才に会いに行つていた。

「よつ、只今、いい子にしてたか？」

「父さん、遅いよ！俺もう寝ようとしてたんだよ！」

「わりわり、仕事が長引いてな。」

「…そうなの？今日も魔物倒したの？」

「ええと、これから魔物を倒すお手伝いに行くんだ。だから、先に寝ててくれ。」

「えっ！今帰つてきたところでしょ！」

「そうなんだけどな。どうしても外せないんだ。悪いな」

そう言つても子供である才は不満そうな表情を隠そうとはしない。

勇利はそれを見て仕方なさそうに優しく笑う。

そして、頭をその大きな右手でごしごしと撫でる。

少しでも自分の愛情を伝えるために。

「悪いな、今度時間を作るからどこか遊びに行こう。」

勇利は振り返ることなく、玄関の扉を開けた。

☆☆☆

護懐である勇利のためだけに用意された装甲車の中で勇利と信濃は仮眠を取る。

装甲車はキャンピングカーに匹敵する広さを保有しており、二つの簡易ベットが用意されていた。

とはいえ、同じ車両内にいるため、信濃の寝息が聞こえてくる。

勇利は信濃がしっかりと眠れていることに頬を緩めるが、それと同時に家に置いてきた才に思いを馳せる。

一応、義母と義父に連絡を付け、才の様子を見に行ってくれるように頼んではいるが、流石に高齢である義理の両親にばかり迷惑をかけてはいられない。

これを機にこの仕事から足を洗うべきなのかもしれない、という気持ちが勇利の中に湧いて来る。

というのも、いざと言う時には逃げることしかできず、死ぬリスクも高い仕事が続けた結果、才を一人にしてしまうのではないかと不安なのだ。

しかし、それと同時に信濃を一人には出来ないと考え、自分も勇利の中には存在していた。信濃に伝えることは出来ていないが、勇利の中では既に信濃はもう一人の娘と呼んでも差し支え無い程、大きな存在になっているのだ。

今更、この子を一人にはさせられないと考えてもいた。

「……これから、どうするのかも考えて行かないとだよな……………」

勇利はゆっくりと目を瞑る。

明日は作戦当日なのだ、少しでも英気を養わなければ。

この時の勇利は気づくことは無かった。

眠っていた信濃が目を覚まし、勇利の独り言を聞いていたことを。

☆☆☆

昨日作戦本部に集められた防人たちが作戦通り所定の位置について行く。

テントは張られ、勇利も何時でも結界を張れるようにしている。

後は号令を待つだけだ。

そして、その号令も

『【無二】結界を張れ!!』

今、まさに来た。

「《ポイントバリア》」

勇利はその言葉と共に魔剣を地面に刺す。

すると、魔剣から光の柱が斜めに伸びていく。

他の地点でも同様の光が空から伸びてきて、上空で光の柱同士がぶつかり、光は線から面へと変わっていく。

これが多人数における防御魔法《ポイントバリア》の効果である。

必ず複数人が必要になる代わりにこういった広域にわたる防御が可能になる魔法であり、まだ魔物が世界中を自由に闊歩出来ていた時代は街を《ポイントバリア》で守っていたのだ。

勇利たちが防御魔法を展開すると同時に、結界内部へと防人たちが入っていく。

《ポイントバリア》の基本性能は《ジェネリックシールド》とほぼ同じため、このように味方は外部と内部を自由に行きすることが出来る。

結界の中に入っていく防人たちを眺めながら勇利は戦いの生末を祈る。

もう彼には戦う力はないため、こうして祈る事しか出来ない。

とはいえ、勇利以外の防人たちも護懐には劣るものの精銳ぞろいだ。心海市内にいた徒大将級を一つの部隊が危なげなく討伐してみせる。

また、別の場所では徒組頭級の魔物二体を相手に別の部隊が危なげなく討伐する。

長年占拠されていたため強力な魔物もかなりの数目撃されているが、彼らは襲い来る魔物たちを危なげなく討伐していた。

また、消耗した場合は一度結界の外で回復魔法士が詰めている後方基地に戻り、休息を取る。その間は待機していた他の部隊が入れ替わるように中に入り、魔物を倒す。

そのサイクルによってこちらの疲弊を最小限にし、向こうの消耗を強いていたのだ。

結界も同様で、勇利を含めた防御魔法士もローテーションで休みを取り、消耗を最小限にする。

長期戦により、確実にそして最小限の損耗で勝利しようとしていた。

この数十年で魔物と人間の地力は逆転していた。

決して難しいことでは無かった。

食料も人口も、教育を行う下地も資材も加工する施設も全てを整えていたのだ。

二度と生活圏を奪われぬように一時も怠ることなく力をつけるための努力を続けてきた。

故にこの結末は必然だった。

「なんだ、私が出る幕は無かったな」

「当たり前だ、馬鹿。子供が戦場に出ようとするな」

「馬鹿とはなんだ馬鹿とは！馬鹿と言った方が馬鹿なんだぞ！」

信濃は予想以上に順調に進む心海市奪還作戦に緊張がほぐれ、勇利に噛みつく元氣すら出てきていた。

勇利は未だに完全に安心はしていなかったが、それでも自分の出る幕はないと多少の安堵を抱いていた。

☆☆☆

内部にて魔物を討伐する任に就き、一小隊の体調を任された風刃ふうじは同じ部隊となった防人と共に状況を確認していた。

「右から足軽大将級二、足軽組頭級三。そっちは？」

「左は……ゲツ!! 徒大将級一体、徒組頭級一体！」

「あく、上から雑兵級二十、こつちを狙ってまゝす。たいちよ」

「了解。炎堂班は足軽級を一掃しろ!! 水島班は右から来る足軽大将級と足軽組頭! その間、徒大将級と徒組頭は俺のパーティーで引き受ける。後その取ってつけたような隊長呼び辞めろ！」

風刃ふうじはそう言うのと自分のパーティーの人間と共に徒大将級と徒頭級に攻撃を仕掛ける。

十五名による小隊、実際の所は三パーティーで一部隊を作っているため、指示を最低にし、出来るだけ各パーティーの連携を活かせるように心がけていた。

とはいえ、徒大将級や徒組頭を相手にする場合はその限りではなく、一小隊で確実に撃破する。

風刃はこの隊で最も実力が高いパーティーを率いているため、他のパーティーが雑魚を倒すまでの時間をパーティーの仲間たちと共に稼いでいるのだ。

そのため、基本的に徒大将級と徒組頭相手には防御を優先し、行動する。

「《ハードソリッド》」

「《ジェネリックシールド》」

「《オートヒール》」

「《サンダースネーク》」

前衛の魔剣士である風刃達は《ハードソリッド》で防御力を上げ、防御魔法士は《ジェネリックシールド》で自分達パーティーを覆う様にドーム状に結界を張る。

回復魔法士はドーム内に入って来た魔剣士たちに通常の回復魔法と自動回復の魔法をかけ継戦能力を引き上げ、攻撃魔法士が拘束魔法の《サンダースネーク》で相手の動きを阻害し、機動力を奪う。

これにより、風刃達は危なくなったら、安全圏である《ジェネリックシールド》の内部に隠れ、回復魔法士により傷が癒えしだい攻撃を再開するという流れが出来上がる。

しかも、攻撃魔法士も《プロミネンスレイ》や《ドラゴンボルト》などの攻撃を繰り出し、明確にダメージを与えることで相手の気を引いていく。

その上で回復魔法士は回復を終えた風刃達に《フィジカルオーガ》の完全上位魔法として有名な《リトルタイタン》の魔法支援や反射神経と速度を引き上げる《クイツクミゼット》を使うことでより戦況を優位に運んでいく。

徒大將級の魔物は《ショットレイ》を使い、文字通り、雨のように光線を打ち込んでくるが、それを防御魔法士と回復魔法士が遠隔から《マジックシールド》を使い威力を軽減する。

それにより、多少ダメージは受けつつも、《ハードソリッド》による防御力集中超極上昇、《リトルタイタン》による全能力超高上昇、《クイツクミゼット》による反射神経と速度の集中極度上昇、《オートヒール》による自然治癒力上昇により、風刃は継戦可能なレベルの手傷を負いながらも《ジェネリックシールド》の中に戻り、回復魔法士の手により傷を癒すことが出来ていた。

また、それを見ていた徒組頭級は近くにある建物を碎き、瓦礫になった建物を魔法で持ち上げる。



魔法は《マジックシールド》で防げるが、魔力で構築されていない者は防げないという《マジックシールド》の逆転を突いた戦法だ。

それを見ていた、徒大將級も同様に両手に瓦礫を握る。

徒大將級は未だリキャストタイムが過ぎていないので魔法が使えないのだろう。

風刃達はこちらの対策をしてきた相手に怯むことなく、魔物の前に立つ。

「風奈風奈、鳴なる、円まどか、頼んだ。」

そして、回復魔法士と攻撃魔法士、防御魔法士の名前を呼ぶ。

三人はコクリと頷き、魔法を発動する。

風奈と呼ばれた回復魔法士の女性は衝撃を減らす《インビジブルクッション》を鳴と呼ばれた青年は《フリーダムタイフーン》と呼ばれる攻撃魔法を、そして防御魔法士の青年は回復魔法士の女性の魔法に近い効果を持ちながらもより攻撃的な《クッションカウンター》を使用する。

《クッションカウンター》は衝撃を減らすのではなく、弾性により跳ね返す魔法だ。

初めに《インビジブルクッション》で飛んでくる瓦礫の威力を減らし、それを《フリーダムタイフーン》の風で更に威力を減らす。

そして、《クッションカウンター》で跳ね返す。

ことは無かった。

そも、その必要が無かった。

何故なら初めから相手の攻撃を受けきる気は無かったのだ。

攻撃魔法士の鳴の放った魔法である《フリーダムタイフーン》の目的は敵の瓦礫の威力を減らすだけではなく、風刃ともう一人の魔剣士である雷丸を空へと打ち上げる目的があった。

面での防御では限界が来るため、敢えて立体的な起動を取れるような状況を作る。

宙に浮いた二人は《クツションカウンター》と瓦礫を足場にし、器用に敵の攻撃を避けていた。

そして、二人は二体の魔物の頭上を取った。

「行くぞ、らいまる雷丸」

「おうよ」

「《ヘビーマテオ》」

これは防御力と重量を引き上げる魔法であり、その特性上あまり人気は無いが、こういった頭上からの奇襲においてはこれ以上に適した魔法はない。

文字通り隕石の如く飛んで来た二人を咄嗟に二体の魔物は受け止めた。

ズシンという音が辺りに響くが、何とか二体の魔物はその攻撃を耐えた。

しかも、徒大将級の魔物はリキャストタイムが終わり、衝撃波を放つ魔法により二人を吹き飛ばす。

しかし、忘れてはいけない。そもそも、彼らが只の時間稼ぎと言うことに。

「お待たせしました。《ライトニンググワイバーン》」

「私がMVP!!《フリーズフロスト》」

「《ムーブアーマー》、無いよりましでしょ?」

「《マッスルメタル》!お前たちの筋肉の可能性を見せてみる」

「《ワイズマジック》!これで魔法の威力が上がります。」

「《マナヒール》、ま、魔力も回復しておいた方が良いでしょう?」

「俺達も前衛を張る。」

「了解」

「りよ」

「わかった」

続々と小隊の仲間たちがこの場所に集まってくる。

向こうの魔物を倒し終えたということだ。

これにより、戦況は逆転した。

六人の魔剣士によるかく乱と三人の攻撃魔法士による援護射撃、三人の攻撃魔法士に

よる、弾幕のような魔法の連射、回復魔法士たちによる付与魔法と回復魔法、防御魔法士は一人が安全地帯を作り、二人が魔剣士たちを狙った敵の攻撃を遠隔で防ぐ。

完全に流れがこちらに来た瞬間だった。

負ける要素が微塵もない。

そして、その予想は外れることなく。

敵はそれ程時間を立たずに倒された。

「いやあ、にしても徒大将級と徒組頭級も結構倒したし、奴さんも戦力切れじゃないか？」

魔剣士の内一人が、頭に手を組みながら、気楽気に言葉を紡ぐ。

実際に風刃達は既に徒大将級を三体、徒組頭級を三体倒しており、他の部隊が倒した徒大将級が二体、徒組頭級が五体とのことなので、この魔剣士の言うことは風刃としても概ね同意であった。

もしかしたら、魔力を隠し、潜伏している個体がいるかもしれないが、正直言ってその可能性は限りなく少ないだろう

何故なら、徒組頭や徒大将級の敵というのは早々出てくるものではなく、ダンジョンに一体から二体が平均であり、多くて四体といった所だ。

魔物たちがここに戦力を集中させていたとしてもそろそろ徒組頭や徒大将級の戦力

はいないと考えても良いだろう。

仮に居ても一体程度と見るのが妥当だ。

ただ、一つ気になることがあるとすれば徒組頭や徒大將級の戦力をこれだけ投入しているのに対し、足軽大將や足軽級、雑兵級などの上澄み以外の魔物の投入数が非常に少ないに感じたことだ。

他の部隊が倒してくれているのだろうか？

風刃がそう考えていると、突如として地面が揺れる。

「全員警戒!!」

風刃の言葉に他の隊員たちは円を作りどこから敵が来てもいいように備える。

しかし、上空を含め、辺りを見渡しても敵影は見つけられない。

すると、水島班の防御魔法士が地面を指さす。

「下から来ますー!」

その言葉と共に全員がその場を対比し、散らばる。

地下から出て来たのは徒大將級の魔物であった。

「ちっ! まだいやがったか! 懲りない奴め!」

全員、すぐさま臨戦態勢を取る。

そして、相手の出方を伺う。

しかし、敵は中々動かない。

風刃の目にはそう見えた。

じつと、その場で風刃達を睨みつける。

何か策があるのか？ 風刃は訝しんだ。

訝しんだが、時すでに遅かった。

それに気付いたのは味方からの通信が着た後だった。

『敵が次々と自害している!! そちら何かわかるか?!』

その言葉と共に目の前の徒大将級の魔物に瘴気が集まる。

集まっステージアップていき位階上昇が起こる。

「……か、観測魔力……侍大将級です。」

他の徒大将級、徒組頭級が居なくなったことで先ほどまで生きていた魔物の瘴気が全て一体の徒大将級の下に集まったのだ。

戦力の温存もこの為だったのだろう。

侍大将級の魔物は今まで好き放題されていたことの腹いせのようにその圧倒的な魔力を用いた《プロミネンスレイ》でもって結界を壊し、外に出る。

「全員気を引き締めろ、増援がくるまで時間を稼ぐぞ。」

☆☆☆

侍大將級が現れたという報告により、仮眠を取っていた勇利たちなどを含む休憩中の防人も叩き起こされ、心海市近くに作られた、領土奪還用戦略仮設基地ノアへと集められていた。

因みにノアとは変形機能と連結機能が搭載されたマルチ自動車であり、時に小型船や小型のジェット機、時に連結機能を使い、大型の船や空中要塞、今回のように地上の軍事拠点に姿を変える、箱舟という訳ではないもののその在り方はかのノアの箱舟と同じく人類の生存のために作り上げられた乗り物となっている。

「何かあったのか？」

勇利は首を傾げながら、この場に集められた全員の疑問を代表し、口にする。

「ああ、侍大將級が現れた、現在【虚心】が向かっている。君たちにはそれまでの時間稼ぎを頼みたい。」

眼鏡をかけた細身の男は防人たちを見渡しながらそう告げる。

それを聞いた防人たちは初めの内は動揺からざわついたが暫くすればお互い顔を見合わせながらも自分たちがやるしかないと言悟を決めていく。

ここに集まっているのが国の選んだ優秀な防人でなかったらこうはいかなかっただろう。

「すいません。俺達はどうぞすれば……………」

そんな中、防御魔法士たちは恐る恐る手を上げる。

それも仕方がないだろう。

彼らは街を覆う結界を張るために集められたが、現状それも意味をなさなくなってしまうた。

「君たちは【無二】の指示に従って前線で戦う防人たちの援護をしてくれ」

勇利は面倒くさそうに頭を掻きながらこうなってしまうたら仕方がないと腹を括る。

「んじゃ、よろしくな」

「勇利、私は？私はどうする？」

今まで勇利の背中で眠っていたと思われていた信濃が突如手を挙げる。

それに対し、勇利は信濃を優しく地面に下ろし、頭を撫でる。

そして、にっこりとほほ笑む。

「お前は待機な？」

「何でだー!!」

「子供は寝る時間だからだ。鋭理、頼んだ。」

「分かった。責任を持って預かろう。」

勇利は鋭理と呼ばれた眼鏡をかけた細身の男に信濃を預けると防御魔法士たちを引



き連れ外に出る。

信濃は勇利を恨めし気に睨みつけていた。

そして、それを鋭理と呼ばれた男は冷たい目で見つめていた。

☆☆☆

目の前には大きさにして三十メートル、腕が六本、八対の翼を背から生やし、頭上と背中にそれぞれ大ききの違う光輪を持つ侍大将級の天使型の魔物がいた。

瘴気を纏ったその姿は傍目には墮天使のようにも映り、その人知を超えた姿に一般人では畏怖すら抱いたかもしれないが、勇利からすれば、そんなことよりも戦況の悪さにこそ目がいった。

そう侍大将級との戦いは端的に言ってしまうえば非常に旗色が悪かった。

それは護懐の一人であり【無二】の称号を持つ勇利が加わっても変わらなかった。

「クツソ・すまん第一から第二の防御魔法士たちは味方の回復に専念してくれ！」  
グロウアウト  
 (成長限界に達した俺じゃあ戦えない……こいつらに頑張ってもらえないんだが……)

勇利は現在の戦況を冷静に分析する。

一応自分の《ジェネリックシールド》で安全地帯を作っており、更に防御魔法士たちと共に味方の支援や致命的なダメージを遠隔からの防御魔法で軽減している。

更に、前線で戦っている防人たちの仲間の回復魔法士や防御魔法士たちも勇利たちが防御魔法で安全地帯を作り、回復魔法や支援魔法などを積極的にかけているので、かなり動きやすそうにしている。

だが、それ込みでこちらが押されているのだ。

回復魔法も一撃で倒されてしまえば意味が無い。

支援魔法も敵の潜在能力の前では雀の涙に等しい。

防御に關しても威力の軽減が精々だ。

それも結局、無いよりもまし程度のものとなっていた。

「勇利に關しても安全地帯を作りながらの遠隔での防御魔法では完全に防ぎきることは出来ない。」

防人たちからは断末魔すら聞こえない。

何故ならたったの一撃、刹那の間に命を刈り取られるのだから。

「無、【無二】殿、前線で戦う防人たちは既に半数程となっています。て、撤退した方がよろしいのでは？」

防御魔法士の一人がそのような言葉を零す。

しかし、勇利には聞くことは出来なかつた。

何故なら、このまま、撤退した場合、奴は野放しとなり、他の街に襲撃をかけるから

だ。

そうすれば、何も知らない一般人が今以上の数が死ぬ。

それに、前線で戦う防人たち、そして、その仲間たちはまだ折れていない。

「いや、悪いがここで足止めする。ただ、帰る場所がある者は帰ってくれ。

ここからは俺が引き受ける。」

勇利がそう叫ぶと暫く防御魔法士たちは続々と撤退を始める。

前線で戦う防人たちの中にも旗色の悪さに撤退を選ぶ者が現れる。

それを横目に勇利は前に出る。

勿論、死ぬ気は毛頭ない。

(防御魔法と補助魔法だけで時間を稼ぐ！)

勇利はそう思い《ジェネリックシールド》を時前に出て、《ジェネリックシールド》

を球体上に展開し、そのまま体当たりをする。

それにより、魔物は態勢を崩す。

だが、魔物はそれを気にした様子はない。

直ぐに、魔法の光線を放つ。

ただし、狙いは勇利ではなく。

撤退を選んだ防人たちであった。

「なに?」

勇利はそれに動揺する。

一体何人の防人が生き残れたのかと。

ただ、敵はそんな勇利の心境になど配慮はしてくれない。動揺して動きを止めた勇利を《ジエネリックシールド》ごと掴みソフトボールのように投げ飛ばす。

それにより、軽く、一キロは飛ばされる。

しかし、勇利も動揺を振り払い、《ジエネリックシールド》を空中で固定することでその場にとどまる。

「クッソ、やられた。」

そして《ジエネリックシールド》を足場に再度、敵の下に向かう。

今の所は誰もやられていない。

敵の下についた勇利は味方が未だ生存していることに安堵する。

だが、それは敵の悪辣な策略の上でのものだった。

勇利が味方を目視できる距離に入ったと分かるや否や敵は《ヘブンピラー》と呼ばれる魔法を発動した。

この魔法の効果は純粹に天までのぼる高熱の光の柱を生み出す魔法だ。

その魔法は魔物自信を中心に半径300km、つまりこの街全土を対象にしていた。

完全に結界に閉じ込められていたことの腹いせだろう。せめて、目の前の味方だけでも守りたい。

焦った頭で勇利はそう考えたが、遠隔防御が届かない。

いや、敢えて届かない距離を見定めて発動したのだろう。

勇利自身の力不足により目の前で仲間の命を取りこぼすのを見せつけるために。

「や、やめ……………」

その言葉を紡ごうとした所で、光はふつと止んだ。

そして、次の瞬間には天使の体に深々と袈裟斬りに傷がつく。

「待たせたな。真打の登場だ。」

女性でもなかなか見ない高音の持ち主は余裕たっぷりにそう告げる。

その声は勇利には非常に聞き覚えのあるものだった。

「信濃!! なんだここに!!」

# 幕間 俺は我が子を守りたい

幕間 後編

☆☆☆

勇利は言葉を失っていた。

と言うよりも先ほどよりも動揺していた。

何故なら、安全な場所で待機させていた筈の信濃が戦場のど真ん中にあるのだ。

大切な、それこそ、我が子のように可愛がっている子供が戦いの中心にきて動揺するなと言う方が難しいだろう。

「なんでだと？そんなの決まっている!!勇利たちがピンチだと聞いたから助けに来たんだ!」

信濃はそんな勇利の内心などお構いなしにはきはきと答える。

その様子はピンチを救ってみせたこともあつて少し、得意げでもあつた。

「……………はあ、わかった。取り敢えず、ここにいる俺以外の仲間を連れて仮設基地に戻れ。」

「何を言っているんだ？私がここに来たのは勇利と一緒に戦うためだぞ」

キョトンと首を傾げる信濃に勇利は諭すように優しい声で語り掛ける。

「いいか、信濃。お前はまだ子供だ。そんな危ない真似しなくてもいい。」

「こういうことは大人がやる。だから……………」

「なら、私は何のために防人本部に育てられたんだ？ 勇利は何のために優しくしてくれただ？ 私は今こそ、皆の優しさに答えなくちゃいけないんだ。」

勇利は口ごもる。

自分は違うと言いたかった。

ただ、それと同時に防人本部が信濃を手塩にかけて育てた理由は、信濃の予想通りであるとも思ってしまった。

実際、勇利が鋭利に信濃を頼んでいた筈なのに信濃はここに立っている。

それが答えだろう。

だから、ここで信濃を止めてしまえば信濃の防人本部内での立場を悪くしてしまう。

この子の帰る場所である筈の本部での評価を下げてしまう。

故に勇利は信濃を止めるのを躊躇ってしまった。

勿論、そこには自分であれば信濃を守り切れるという慢心も含まれていたが……………。

勇利は数秒の黙考の末、結論を出す。

「……………分かった。俺がお前を守る。」

だから、お前は好きに戦え」

勇利が諦め気味にそう告げると信濃はニヤリと笑い。

勇利の言葉を否定する。

「何を言っている？私が全て救ってやる。そのために来たんだ」

信濃は不敵な笑みを浮かべて魔剣を構え、姿を消す。

否、姿を消したのではなく、超高速で敵の、侍大將級の背後を取ったのだ。

侍大將級の魔物も信濃の動きを目で追うことは叶わず、背後を取られた後、ワンテンポ遅れて反応する。

しかし、そこで再度、姿を消す。

今度は侍大將級の魔物の目の前だ。

「食らえ!! 《俊撃》」

その言葉と共に糸よりも細い斬撃が飛ぶ。

しかも、只の斬撃ではない。

《ドラゴンボルト》の雷撃を圧縮した高密度の雷の斬撃だ。

その瞬間火力は彼女が持つ魔法を使わなかった場合の高威力技である《天劍・白夜》を凌ぐほどだった。

それを何度も何度も連続で敵に叩きつけていく。



「グウウウウウ!!」

侍大將級は避ける隙すら与えない高威力の連撃により、どんどんと傷ついていく。先程までの戦況が嘘のように覆されていく。

しかし、相手もまた侍大將級という上から数えた方が早い強者。直ぐに《ジェネリックシールド》を使い自らの身を守る。

これにより、信濃の攻撃は侍大將級の魔物には届かなくなつた。

ただ、それでも、その場に立ち尽くしていた防人たちは少くない衝撃を受けた。

なんせ、【無二】に引つ付いていた少しだけ才覚のある子どもだと思つていた存在が自分たち上位の実力を誇る防人ですら束になつても敵わなかつた敵を相手に大立ち回りをしていけるのだ。

これを驚かずにいられようか？

「む、【無二】！彼女は一体何なんですか!？」

戦いを見ていた防人の一人が勇利に信濃の存在について尋ねる。

それに対し、勇利は面倒くさそうに頭を掻きながらも、ここで答えた場合と答えなかつた場合どうなるかについて、考える。

（答えるつてことは当然ながら信濃の手の内をばらすつてことだ。

こいつらが敵対した場合に多少は不利になるかもしれないな。

……いや、ここに集まっているメンバーは少なからず国から信頼を得ている奴らだ。

言わなかったとしても、国の方が勝手に信濃の情報を渡すか？

それじゃあ、答えなかった場合はどうなる？

……今回、俺の意見を無視して作戦に信濃を参加させた件、銳利が信濃を戦場に向かわせた件、国は俺の教育方針をあまり好ましく思っていない………だから、ここで少しでも不信感を買う訳には行かない………(か)

なんせ、不信感を買った結果信濃と引き離される可能性もあるのだから、と勇利は更に心の中で付け加える。

「あく、アイツの能力、固有魔力波は本部では収束って呼ばれている。」

「収束？ただ、自分の下に集めるだけのようには見えませんが………」

「ああ、あいつの固有魔力波は範囲指定、対象指定、どこへ収束させるかの座標指定の3つの要素から出来ている。」

「な、なるほど………」

防人は何となくわかったのか曖昧に頷く。

勇利の話に補足を入れるのなら一番初めの範囲指定とは魔力波を飛ばす行為によって完了する。

そして、対象指定は魔力波が届いた範囲内から指定し、どの物質、どのエネルギーを対象にするかを決める。

ただし、魔力を持つ生物は自分を除き、かなりの実力差が無ければ不可能であり、また、運動エネルギーを対象にすることも出来ない。

座標指定に関しても魔力波の届いた場所であればどこにでも指定することが出来る。この能力を活かすことで弧球信濃は自分を対象指定し、目にも止まらぬ高速移動を可能とし、敵の魔法を対象とし、魔剣のある位置を座標指定することで敵の魔法を収束し、魔法攻撃を無効化していた。

更に、そこから、2つ目の収束座標を指定することで、敵の魔法を拡散させずにカウンターを決めているのだ。

「取り敢えず、俺はこれからノブのフォロワーに行く。お前らは離れてろ。」  
勇利はそう言うと、彼らに背を向け、信濃の下に走る。

「ノブ！取り敢えず、俺も手伝う」

「む！休んでも良いんだぞ？勇利」

信濃の下まで来た勇利に信濃は首を傾げる。

「いや、弟子が敵の矢面で戦ってるんだそういう訳にも行かないだろ？取り敢えず防御

魔法なら任せてくれ。それぐらいしか出来ないが……………」

「分かった。なら防御魔法を使って出来るだけ敵の動きを拘束してくれ。」

信濃は現状を分析し、現状防御魔法で出来る上で有効な手段をはじき出す。

本来、回避とカウンターを行える信濃には防御魔法は必要ないが、敵の妨害などをしてくれるのであれば話は別だ。

その答えを信濃は一瞬で導き出した。

「分かった。任せろ!!」

勇利も知らぬ間に成長している信濃に寂しさ半分、嬉しさ半分で答える。

この戦いにおいて鍵を握るのは間違いなく、信濃だろう。

そのことを勇利は長年の直感で感じ取る。

「グアアアアアア!!」

敵は《創剣》を用い6本の腕にそれぞれ剣を持つ。

そして、二本の腕で信濃に斬りかかる。

それを信濃は収束の固有魔力波を使い直ぐさまその場から移動することで回避する。

しかし、それを相手は想定していたのか直ぐに二本の腕で背後に剣を振るう。

「残念だが、外れだ。」

ただ、それを更に読んでいた信濃は相手の頭上を取る。

「《俊撃・二式》」

頭上を取った信濃は《ドラゴンボルト》と《プロミネンスレイ》を圧縮し、束ね、放つ。

その攻撃は先程の《俊撃》よりも更に威力が上がっており、敵の《ジェネリツクシルド》に罅を入れる。

それを見ていた信濃は更に一撃、二撃と連射する。

ただ、相手も只棒立ちで見ているわけではない。

残った二本の腕で剣を振るう。

更に、光線による攻撃も行ってくる。

勇利はそれを収束の固有魔力波による高速移動によつて緊急回避する。

ただ、相手は畳みかけるように更に魔法を行使する。

その魔法の名は先程使った広範囲魔法《ヘブンピラー》だ。

これを防ぐには回避ではなく。

収束による無力化を行うしかない。

信濃も瞬時にそれを選んだ。

しかし、それを相手は狙っていた。

範囲を指定し、対象を指定する。

それは高速移動を行う際も行っている行為ではあるが、《ヘブンピラー》は通常の攻撃よりも範囲が広く、対象の指定に少しだけ時間がかかってしまった。

その隙を突き、《クイックミゼット》を使った敵が一気に距離を詰めてくる。

ある種の慢心により生じたピンチであるが、ただ、信濃を責めることは出来ないだろう。

何故なら、敵は現時点で確実に魔法を使う際のクールタイムを無視して魔法を行使しているのだから。

「《ジェネリックシールド》!!」

それを遠くから敵の動きを妨害していた勇利が咄嗟に防ぐ。

これに関しては経験の差と遠くから戦況を観察できるといいう状況であったことによる影響だろう。

「ナイスだ!!」

信濃はそれだけ言うと収束させた敵の《ヘブンピラー》を圧縮させ、自分の《ドラゴンボルト》と《プロミネンスレイ》を上乗せし、飛ばす。

「《俊撃・三式》」

これにより、敵の《ジェネリックシールド》は容易く割られ、更に非常に深刻なダメージを与える。

「私を敵にしたことを呪うんだな!! 終わりだああああ《俊撃・二式》!!」

信濃はそう言うのと魔剣から糸よりも細い斬撃を飛ばす。

これで終わり、そう思われた時、敵はふっと姿を消した。

「!?」

信濃は直ぐに辺りを見渡そうとするが、それよりも早く、敵が勇利の背後を取る。

勇利は回避タイプであり瞬間的な速度は群を抜いているが、その方法は座標まで体を引き張っているに過ぎない。

勿論、肉体強化だけでも相当な速度、動体視力を得ることが出来るが、残念ながら今の信濃にはこの侍大将級の魔物の動きを捉えることは出来なかった。

侍大将級の天使型の魔物は信濃の背後を取ると思い切り、剣を振るう。

それを勇利は黒い雷を体から迸らせ、加速することで間一髪のところまで救出する。

「危なかったな」

「な、何なんだ!? あいつは!! 急に早くなったぞ」

信濃は敵が急に強くなったことに目を白黒させ困惑する。

しかし、遠くから戦況を見ていた勇利は何故敵が強くなったのか直ぐに分かった。

「奴さんは今《アクセラレーター》と《フェニックスフレイム》を使ってやがる」

その言葉に信濃は目を大きく瞬かせるが直ぐに敵の強化した方法を察する。

《アクセラレーター》とは速度だけを上昇させる自壊バフだ。

そして《フェニックスフレイム》は《オートヒール》の上位互換となる自動回復の魔法だ。

この二つを併用することで敵は《アクセラレーター》を極限まで行使し、こちらを道連れにしようとしているのだ。

その証拠に《フェニックスフレイム》の回復が全くと言っていい程間に合っていない。

《アクセラレーター》で限界以上に加速し、こちらを潰しにかかっている。

敵のその覚悟と戦闘能力と信濃の現在の實力を凶り、勇利はある決断をする。

「ここからは俺が受け持つ。信濃は下がってろ。」

そう言うのと勇利は黒い雷を迸らせ、敵に突っ込む。

それからの攻防は一方的だった。

侍大将級の魔物は勇利の速度に翻弄され、更に黒い雷は敵を感電させるだけに留まらず敵を切り裂き、どンドンと魔物の体を削っていった。

将来の護懐とまで言われている信濃ですら立ち入ることが出来ないレベルの戦いが繰り広げられていた。

そして、侍大将級の魔物は倒され、大ダメージを与えていた信濃にその殆どの瘴気が



いく。

これにより、信濃に大幅な抵抗<sup>レ</sup>力<sup>ベル</sup>上昇<sup>アップ</sup>が起こる。

そして、勇利には全体で言うると一割程度の瘴気が吸収された。

大したことが無い量、信濃が九割の魔力を受けきれただから、勇利が受け止められない筈がない。

信濃はそう確信していたが、結果は違った。

瘴気を吸収した勇利は身体中から血を流しながら倒れる。

「ゆ、勇利どうした?! 大丈夫か?!」

信濃は急いで勇利に駆け寄る。

そして、無きそうな顔で勇利に縋りつく。

「勇利?! 大丈夫か勇利!!」

それを見ていた勇利は苦笑する。

「そんな心配そうな顔するな。こんなのかすり傷だ」

安心させるように信濃に言い聞かせる勇利。

実際に信濃がかなりのダメージを与えてくれていたおかげで死ぬほどの怪我には至っていないかった。

勿論長時間が放置されれば分からないが……………。

しかし、悪い想定は早々に外れた。

遠くから人の気配がすることに勇利は気づく。

「お〜い、回復魔法士を連れて来たぞ！凄かったな！」

防人の一人がそう言いながら、近づいて来る。

「どうやら、近くで見えていた防人が本部に連絡し、回復魔法士を連れてきてくれたらしい。」

勇利はほつとし、眠るように意識を失った。

☆☆☆

勇利は目が覚めると病室のベットにいた。

横に目を向けると、椅子に座り、読書をしていた鋭利と目が合う。

「おや、起きたみたいですね」

「ああ、ところであの後どうなった？」

「皆家に帰りましたよ。勿論、信濃さんもね」

「そうか……………」

勇利は無事に何事もなく終わったことにほつと息をつく。

その勇利の姿を見ながら鋭利は勇利の現状について聞く。

「それより、勇利さんこそ体の方は？」

「ああ、普通に生活する分には問題ないが、もう戦いには参加できないな」

勇利は自分の右手を握って開いてを繰り返しながらそう告げる。

「そうですか、分かりました。今までありがとうございます。あなたは今日限りで防人の任を解きます。」

「そか、分かった」

「安心してください。退職金はたんまり出るので」

「そりゃよかった」

勇利と鋭利はそう言うのとニツと笑いあう。

そこには往年に渡る友情が垣間見えた。

「……………一つ聞きたいんだが、信濃の教育係に再就職って出来るか？」

「……………あの少女ですか？」

無理ですね。あなたの存在はあの少女にとって悪影響と判断されていますから」

「そか、それでお前も信濃を俺の下に誘導しなくちゃいけなかったのか」

「はい。」

勇利はそれだけ言うと、顔に手を乗せる。

「それでも諦められねえな。どうにかして会うか……………」

「まったく、貴方ならそう言うと思ってましたよ」

呆れ気味に、それでいて、それこそが勇利の良い所だともいう様に穏やかに笑い、鋭利はスーツの内ポケットに手を入れる。

「おっ!!何か策があるのか?」

勇利はキラキラした目で鋭利を見る。

そして、鋭利はそんな勇利を眺めながら、通常よりも大口径な拳銃を勇利に向けた。

対戦人用暗殺銃だ。

「…私は本当に貴方のことを快く思っていました。」

でも、私は家族が一番大切だ。そして、その家族の安寧にはあの少女の存在が何よりも重要。それこそ、戦えない貴方よりも。」

「お、おい。冗談だ」

そこまで言いかけた所で鋭利は引き金を引いた。

サプレッサーが付いていたのでプシュンという呆気ない音と共に、そして真道勇利は命を落とした。

☆☆☆

防人本部に帰った信濃は元孤児院の園長にして、勇利が来るまでの信濃の教育係でも

あった、暗奈と一緒にいた。

「やっぱり園長の親子丼は最高だ！」

「ふふ、ありがとう」

そんな他愛もない話をしていると園長のスマホに電話がかかってくる。

「あら、誰かしら？」

園長は首を傾げて、スマホを片手に部屋を出る。

信濃はその様子に対して不信任を抱くこともなく親子丼を食べ続ける。

何故なら園長が色んな人から連絡を受けるのは何時ものことだからだ。

しかし、今日に関しては少し事情が違った。

何故なら信濃にも関係のある話だったからだ。

「大変よ。勇利さんが、勇利さんが!! 痺気の影響で亡くなられて……………」

その言葉で勇利は親子丼を食べていたスプーンを落とす。

「わ、私が勇利の言いつけを破ったから……………」

「それは違うわ。信濃ちゃんが勇利さんの言いつけを破ったから亡くなったんじゃない。ただ、信濃ちゃんが弱かったから亡くなったのよ」

園長慰めるように信濃に抱き着きながら信濃の耳元でそう呟く。

「私が弱かったから？」

「ええ、そうよ。だって信濃ちゃんが強かったら勇利さんを戦わせなくて済んだでしょう?」

園長は信濃の頭を優しくなでる。

言い聞かせるように、優しく諭す。

「だから、強くなつて? 勉強なんてしないでいいから、友達何て作らなくていいから、学校何て通わなくていいから。ただ、ただ強くなつて、信濃ちゃん。」

信濃は園長の言葉を噛み締める。

自分の無力に歯を食いしばる。

そして、血を吐くように決意する。

「分かった。私は誰よりも何よりも強くなる。」

「良い子ね。今日は色々あつて疲れたでしょう。もう休みなさい」

暗奈はそう言うと、信濃を寝室まで連れて行く。

そして、信濃が寝室に向かったのを確認し、一人で恍惚と笑う。

「信濃ちゃん。貴方は他人に気持ちを取り添わせなくて良いのよ。ただ、その力で私たちの未来を明るく照らしてくれればそれで良いの。それこそ、暗い宇宙空間で誰のためでもなく輝き続ける太陽のように」